高知県立大学地域共生学研究機構

活動報告書

令和７年度　地域共生学研究機構　活動報告書
目次

003　ご挨拶

003　1　地域共生学研究機構長 ご挨拶

004　教員紹介

004　1　地域教育研究センター教員
018　2　健康長寿研究センター教員
021　3　総合情報研究センター教員

029　地域共生学研究機構紹介ページ

030　1　高知県中山間部での「介護保険・日常生活圏域ニーズ調査」結果にみる健康とウェルビーイング向上に関連する社会的処方の取組み
032　2　Kochi Teens Base（こうちティーンズベース）
037　3　歴史文化を通じたまちづくり
039　4　「共生社会の未来を描く『土曜の永国寺カフェ』（認知症カフェ）」
041　5　永国寺はらっぱフェス
046　6　みんなでサロン
048　7　親子で学ぶ「いのち」と「性」：BEP カードで始める性教育サロン
051　8　フレイルの多面性に着目した生活習慣とフレイルの関連の検討
－フレイル予防からはじまる健康のリ・デザインプロジェクト－
053　9　地域共生学研究機構シンポジウム
057　10　社会的処方研究会

063　地域教育研究センター紹介ページ

064　（1）包括連携協定先・協力団体との連携強化に向けた取り組み

064　1　連携推進会議
065　2　域学共生連携推進拡大会議
067　3　ご意見番会議
068　4　包括連携協定締結団体一覧、活動実績

069　（2）地域教育研究センターの学生ボランティア

069　1　コミュニティサービスラーニング（ＣＳＬ）サポートデスク
071　2　高知県立大学学生による集落活動センター活性化支援事業

073　（3）「県民大学」学生プロジェクト　立志社中

083　（4）「知の拠点」としての多様な生涯学習の機会の提供

083　1　令和７年度「県民大学公開講座」
084　2　第 42 回本山町・本山町老人クラブ連合会・高知県立大学公開講座「夜學 2025」
086　3　令和７年度高知県立大学公開講座「『源氏物語』と日本近代文学」
088　4　高大連携事業　出前講座
090　5　高大連携事業　高校生のための公開講座「県大立志塾 2025」
092　6　令和７年度　高知県立消費生活センター×高知県立大学公開講座「消費生活講座」

093　健康長寿研究センター紹介ページ
094　（1）健康長寿研究センター事業
094　1　つながる保健室事業
096　2　「転びにくい体を一緒につくろう！！」つながる保健室 in 四万十町
098　（2）健康長寿に係る研究活動
098　1　地域住民の健康・厚生の向上に向けた実証分析と社会実装・県内自治体の伴走型支援に関する研究
099　2　小児健診・健康行動調査に関するデータ分析研究
101　3　Beans Education Project
103　4　健康長寿に係る研究等一覧
104　（3）高知県内の医療・健康・福祉専門職者育成に資する活動
104　1　高知県中山間地域等訪問看護師育成講座
121　2　高知県介護職員喀痰吸引等研修事業
123　3　入退院支援事業
139　4　社会福祉学部リカレント教育講座
141　5　新任期行政栄養士研修会
142　6　高知県新任期保健師研修会
147　（4）地域貢献に関する活動
147　1　生活習慣病予防のための料理教室
149　2　高知県キャリア教育推進事業　集合研修
159　3　高知市三里地区サロン活動の継続支援プロジェクト
～地域と大学で育てる災害に強いコミュニティ～
162　4　第 14 回みさとフェア
163　5　高知医療センター包括的連携　子育て支援事業赤ちゃん同窓会
165　6　地域ケア会議推進プロジェクト
167　7　土佐市両親学級
169　8　健康長寿文庫
171　総合情報研究センター紹介ページ
172　（1）プログラミング講座
172　1　プログラミング講座（第 1 回）
175　2　プログラミング講座（第 2 回）
179　付録
179　1　高知県立大学地域共生学研究機構規程
180　2　高知県立大学地域教育研究センター規程・構成員
182　3　高知県立大学健康長寿研究センター規程・構成員
184　4　高知県立大学総合情報研究センター規程・構成員

ご　挨　拶

地域共生学研究機構も３年目に突入しました

地域共生学研究機構 機構長　甲田 茂樹

高知県立大学は、健康･医療･福祉･教育･文化･産業に携わる人材を育成・輩出し、県・市町村・各種団体や地域住民の方々とのつながりを大切にしてきました。このような活動から得られた経験やネットワークは本学のかけがえのない強みであるといえます。

国は、令和６年度から今までの健康日本 21 の取組を踏まえて「二十一世紀における第三次国民健康づくり運動（健康日本 21（第三次））」の推進を厚生労働省告示第 207 号（R5.5.31）で発出しました。その中で基本的な方向として①健康寿命の延伸と健康格差の縮小、②個人の行動と健康状態の改善、③社会環境の質の向上、④ライフコースアプローチを踏まえた健康づくり、の四点が示されています。①と②に加えて、③と④の方向性が示された背景には、私たちの健康づくりの課題が、病気や障害の有無だけでなく、経済的な貧困・困窮、社会的な孤立・孤独などの要因や保健・医療・介護・教育などの担い手や提供するサービスの不足などの社会環境の要因によっても影響を受けることがあるからです。すなわち、新たな健康日本 21 の取組みには、保健・医療・福祉機関だけでなく、分野を超えたつながりを意識し、住民などを巻き込んだ地域全体でのネットワークづくりが、地域共生社会を実現する上で大変重要となります。

地域共生学研究機構は 2026 年 4 月から 3 年目の活動に入ります。新機構が立上げと同時に地域共生社会を実現するための個別分野の取組みとして「リ・デザインプロジェクト」と地域共生社会への取組みを科学的に検証する「社会的処方研究会」の二つを行ってきました。昨年度までの実績では六つの「リ・デザインプロジェクト」が展開され、年複数回定期的に機構で取組んでいる地域共生社会の実践報告会、あるいは学外の地域共生社会に携わる実践者や地域共生社会の取組みを分析・評価している研究者などをお招きして「社会的処方研究会」や関連する講演会・シンポジウムを開催してきました。このような地域共生社会の実践と科学的検証を交互に行っていくことは私共のような地域に依拠する高等教育機関にとっては貴重な活動であります。

また、3 年目に入った機構では、従来から取組んできた日本一の健康長寿県を目指した諸活動（2010 年～）、域学共生（2015 年～）や立志社中（2013 年～）の活動とも連携しながら、大学と地域をつなぐネットワークをアップグレードし、地域共生社会の実現を支援する実践的な教育・研究の礎に育てていきたいと考えております。そのためにも、機構は来年から健康長寿研究センターと地域教育研究センターの二つのセンターが統合する形でリニューアルします。このように機構の体制を強化することで、「少子高齢化」「人口減少」などの課題を抱える高知県に対して、ＷＨＯが提唱する「高齢者にやさしいまち」づくり（Age-Friendly City, これは「全ての住民にとってやさしいまち」に通じる）を実現し、「持続可能な社会を構築する」方策を提案することにつながると信じております。

教員紹介

1　地域教育研究センター教員

教授　石山　貴章（Ishiyama Takaaki）

○専門領域

発達心理学／教育心理学／教育方法 / 教育相談／生徒指導 / 特別支援教育

○現在の主な研究テーマ

現在の主な研究領域は、発達アセスメント及び教育方法、相談支援、特別支援教育である。特に教育・発達心理学的知見から、学校教育現場の児童生徒への教育的アプローチや生徒指導、教育相談支援などについて検証を行っている。また、キャリア教育・キャリアサポートのあり方について、特に、障害者の就労支援現場を中心にフィールドワーク調査を通しながら、その課題や支援方法などについて検討を継続的に行っている。

○令和７年度の活動概要

Ⅰ．教育活動

１．生徒指導の理論と方法及び特別活動の指導法
「生徒指導提要」「いじめ」「体罰」「懲戒」「不登校」「部活動」「児童虐待」「安全教育」「キャリア教育」「アンガーマネジメント」「食育」「教員スタンダード」「LGBTQ+」」「発達障害」など

２．教育相談及びキャリア教育の理論と方法
「構成的グループ･エン･カウンター」「特別支援教育」「交流分析」「保護者支援」「チーム学校」「スクールカウンセリング」「アンガーマネジメント」「ブレーン・ストーミング」「アサーション」「ロールレタリング」など

３．教育の方法と技術及び総合的な学習の時間の指導法
「ディベート」「アクティブ･ラーニング」「カリキュラム･デザイン」「授業デザイン」「学習指導案」「情報教育」「国際バカロレア」「板書」「総合的な学習の時間」「総合的な探求の時間」「特別活動」「模擬授業」など

４．教育心理学
「学習理論」「動機づけ」「学習評価」「レディネス」「集団心理」「アセスメント」「心理検査」「投影法」「認知行動療法」「ゲシュタルト心理学」「ポジティブ・アプローチ」「SST」「いじめの心理」「不登校の心理」など

５．発達心理学
「遺伝と環境」「知能」「認知発達」「記憶」「視覚」「発達検査」「アタッチメント」「愛着」「パーソナリティ」「アイデンティティ」「人格発達」「社会性の発達」「道徳性の発達」「ハンディキャップ」「発達アセスメント」など

６．特別支援教育概論
「インクルーシブ教育」「障害児心理」「障害児教育」「発達障害」「ASD（自閉スペクトラム症）」「ADHD（注意欠如多動症）」「SLD（限局性学習症）」「発達アセスメント」「キャリア教育」

７．教職実践演習
高知県教育センター、教育委員会等との連携による企画・運営

８．教育実習Ⅰ・Ⅱ、介護等体験
組織運営と巡回指導

９.高知工科大学非常勤講師「特別支援教育概論」

10. 就実大学大学院教育学研究科非常勤講師「障害者就労支援特論」
11. 環太平洋大学非常勤講師「教育相談」「教育心理学」「認知心理学」「児童心理学」
12. 名古屋商科大学非常勤講師「特別支援教育論」
13. 高知リハビリテーション専門職大学非常勤講師「特別支援教育論」
14. 高知健康科学大学非常勤講師「教育と社会」
15. 尾道市立大学非常勤講師「生徒・進路指導論」
16. 新見公立大学非常勤講師「教育相談（幼児）」

Ⅱ．研究活動

１．特別支援学校における「キャリア教育支援」
２．特別支援教育現場における「発達支援サポート」
３．特別支援教育における授業づくり

Ⅲ．地域連携活動

高知県教育委員会特別支援教育課「自閉症・情緒障害特別支援学級授業づくり支援事業」講師
高知県特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会研究協議会「心身の調和的発達の基盤を培う自立活動の質の高め方」講師
土佐市教育研究所「土佐市立新居小学校特別支援学級研修会」講師

○令和７年度の担当科目

Ⅰ．共通教養教育科目

・地域学実習Ⅰ・Ⅱ

Ⅱ．教職課程　教職に関する専門教育科目

・教育心理学
・発達心理学
・教育の方法と技術及び総合的な学習の時間の指導法
・教育相談論及びキャリア教育の理論と方法
・生徒指導の理論と方法及び特別活動の指導法
・特別支援教育概論
・教育実習Ⅰ・Ⅱ
・教職実践演習
・介護等体験
・文化学課題研究ゼミナール

○研究業績

Ⅰ．著書

なし

Ⅱ．学術論文

1) 教職課程履修学生の不登校支援に関する学びのニーズ
－「生徒指導」「教育相談」講義における数量化Ⅲ類とテキストマイニングによる探索的分析－, 高知県

立大学紀要 地域教育研究センター・総合情報センター編 ,73,1-12.

2)「ギフテッド（Gifted)」の教育的支援に関する展望と課題－特別な教育的ニーズのある児童生徒へのスペシャルサポートの検討を通して－ ,Humanismus(36),1-15.

3) 教職課程履修学生「生徒指導」の「校則」に関する問題意識－計量テキストと満足度調査を援用した分析を通して－ , 尾道市立大学教職支援センター紀要 ,7.117-126.

4)「教育相談」における講義改善に向けた検討－教職課程履修学生に対する授業評価内容と満足度調査を通して－ , 大学教育研究ジャーナル ,22,1-12.

Ⅲ．学会発表

なし

○所属学会（役職を含む）

１．日本特殊教育学会
２．日本職業リハビリテーション学会
３．日本教育心理学会

○社会的活動（地域貢献事業・行政や NPO 等の委員を含む）

Ⅰ．委員等

高知県特別支援学校技能検定会長
高知県障害児教育支援委員会委員
高知市教育支援委員会委員

Ⅱ．講演

高知県教育委員会特別支援教育課「自閉症・情緒障害特別支援学級授業づくり支援事業」
高知県特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会研究協議会「心身の調和的発達の基盤を培う自立活動の質の高め方」
土佐市教育研究所「土佐市立新居小学校特別支援学級研修会」

○研究助成

なし

○学外の機関との共同研究の実績

高知県南国市十市小学校「自閉症・情緒障害特別支援学級　自立活動の授業づくり」

○センター内の役割と活動実績

１．地域教育研究センター共通教育部会（部会員）
２．地域教育研究センター地域連携部会（部会員）

○学内委員会活動

１．教職課程専門委員会 [副委員長]
２．キャリア支援委員会 [委員]

教授　　鈴木　康郎　（Suzuki Koro）

○専門領域

教育学／比較・国際教育学

○現在の主な研究テーマ

現在の研究テーマは、比較・国際教育学の中でも、主に東南アジアをフィールドとした実証的研究を行っている。重点的に取り組んでいるテーマは以下のとおりである。

・多文化社会におけるマイノリティの文化・教育問題とその改善に向けた教育のあり方に関する理論的・実証的研究（タイの華人系学校、南部タイのイスラーム教育、英国のムスリムに対する教育）
・グローバル化の進展により公教育そのものが変容を迫られている状況（学力観や外国語教育、道徳教育の位置づけなど）に着目した基礎教育改革に関する研究
・アジアにおける小学校英語教育の実施状況に関する国際比較研究
・アジアにおける多様な価値の共存に向けた道徳教育に関する国際比較研究
・ボーダースタディーズの手法を用いた国境地域における教育交流の実態に関する研究

○令和７年度の活動概要

I. 教育活動

1. 教育原理、教育基礎理論

教育学に関する基礎的な知識と教養を身につけることを主な目標とした。授業では、映像資料を活用し、教育に対する意識の変化や学校教育現場の最新動向を確認できるよう配慮した。これにより、学校教育をめぐる改革のあり方を考察する機会を提供した。

2. 教師論

教職の意義や教師の役割について、制度と実態の両面から考察し、教師という職務の重要性とそのあり方の理解を目標とした。１回生対象科目であることを踏まえ、将来の進路選択に資するよう、教師生活や採用までの道のりに関する映像資料を積極的に提示し、教師としてのキャリア形成に貢献する情報を提供した。

3. 道徳教育論

教職をめざすものとして必須となる道徳教育に関して、基本的な知識や考え方を身につけることを目標とした。加えて、『学習指導要領』をてがかりとして、「特別の教科」となって以降、こんにちの学校教育に新たに求められる道徳のあり方や指導方法について、実践を通して確認できるよう配慮した。

4. 人権教育論

現代社会における人権問題とそれに対する取り組みについて学び、これからの人権教育のあり方を考えることを目標とした。これを通して人権教育について、必要な知見を得るとともに、それに対する問題意識を各自が養うことができるよう、事例研究の手法を多く採り入れた。

5. 教育社会学

教育社会学の理論および方法を学び、具体的な分析手法を身につけることを目標とした。理解を進めるために、学校教育に関する身近な事例や、メディアにあらわれた教育事象を考えるための学習活動を積極的に盛り込み、社会学的に教育を捉える視点を養うことができるよう留意した。

6. 教育実習Ⅰ・Ⅱ、介護等体験

開講科目の企画運営を行うとともに、実習生に対する事前・事後指導を分担した。

7. 文化学課題研究ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

文化学部の専門科目として、教育事象を主対象として比較文化の観点より卒業研究をまとめられるよう、文献講読や研究発表について実践的指導を行った。

8. 教育学特論

大学院生を対象として、教育学に関する基本的な理解を図った上で、学校教育現場における教育実践とその課題について、理論的・実践的に考察することを主な目標とした。授業では、教育哲学・教育方法論・教育課程論・教育行政学・教育評価論といった多様なアプローチから教育実践を検討し、学際的な視点を養えるよう構成した。また、将来の研究者・大学教員としての役割を見据え、授業の設計・展開・評価に関わる知識と技術をゼミナール形式で実践的に習得できるよう配慮した。

9. 地域学実習Ⅰ

課題番号09「伝統野菜である入河内大根の播種体験を通じて、地方農業の実情と中山間地域の課題について学ぶ」の担当者として、安芸市東川地区に伝わる在来野菜・入河内大根の栽培継承と中山間地域における農業の現状を主要テーマとし、事前指導、実習指導、事後指導（フィールドノート・スライド資料作成・レポート提出）を行った。実習では、「入河内大根のこそう会」会員や地域住民からの講話、実際の圃場での播種作業体験、東川地区でのフィールドワーク、地域住民との意見交換を通じて、在来野菜の保存・継承が持つ意義と農業現場の実態について学習した。実習での活動を通じて、担い手不足・高齢化・鳥獣被害といった中山間地域特有の課題や食文化継承上の価値が明らかになった。これらの学びをもとに、各学部の専門的視点から地域農業の持続可能な発展に対してどのような貢献が可能かについて意見や考えを集約し、具体的成果を地域に還元することができた。

10. 地域学実習Ⅱ

地域教育研究センター教員として、同実習の指導を分担した。2024年度入学生より従来のメールベースからMoodleベースの運営方式へと移行し、実習グループ内での各学生の役割分担が明確化されるとともに、計画書・事前事後レポート・プレゼンテーションポスターといった各種提出物の受理状況や学外活動の実施状況が担当教員と当該グループに所属する学生全員の間でリアルタイムに共有されるようになった。この変更により、提出物の未提出・誤送信・連絡不備といった従来のメール運用に起因するトラブルが大幅に減少し、指導・管理体制の面で改善が見られた。一方で、評価においては個々の受講生の取り組み状況の差異を成績に反映しにくくなった点が課題として残っている。また、交通費支給をはじめとする一部手続きについては引き続き紙ベースによる処理が求められており、担当教員・受講生の双方がデジタルと紙の並行運用を正確に把握したうえで対応する必要がある。

Ⅱ. 研究活動

1. 科学研究費補助金による研究分担者として、学外研究者との共同研究活動を実施した（「○学外の機関との共同研究の実績」を参照）。

○令和７年度の担当科目

【共通教養教育科目】

・地域学実習Ⅰ　　・地域学実習Ⅱ
・人権教育論

【教職課程　教職に関する専門教育科目】

・教育原理　　・教育基礎理論
・教師論　　・道徳教育論
・教育社会学　　・教育実習Ⅰ・Ⅱ

【専門教育科目】

・文化学課題研究ゼミナールⅠ　　・文化学課題研究ゼミナール III
・文化学課題研究ゼミナールⅡ　　・文化学課題研究ゼミナール IV
・日本語学専門演習Ⅱ

【大学院科目】

・教育学特論

○研究業績

I. 著書

なし

II. 学術論文

鈴木康郎（2025）「タイの小学校宗教教育が育む資質・コンピテンスに関する予備的研究」, 日本比較教育学会『日本比較教育学会第 61 回発表要旨集録』

III. 学会発表

鈴木康郎（2025）「タイの小学校宗教教育が育む資質・コンピテンスに関する予備的研究」, 日本比較教育学会第 61 回大会 , 帝京大学 , 2025 年 6 月

○所属学会（役職を含む）

1. 日本比較教育学会
2. 日本タイ学会

○社会的活動（地域貢献事業・行政や NPO 等の委員を含む）

1. 教師教育コンソーシアム高知　教員養成・育成事業部会、共同研究事業部会 [部会員]

○研究助成

1. 科学研究費補助金・基盤研究 (C)、研究分担者
   研究課題：タイにおける海外留学と社会階層の再生産に関する質的研究―エリート形成の新たな経路（25K06366）
   研究期間：2025 ～ 2028 年度
   研究代表者：S Kampeeraparb（名古屋大学）

2. 科学研究費補助金・基盤研究 (C)、研究分担者
   研究課題：コロナ禍が日本留学の研究環境と生活実態に与えた影響―M-GTA による質的分析から（22K02679）
   研究期間：2022 ～ 2025 年度（研究期間延長）
   研究代表者：S Kampeeraparb（名古屋大学）

3. 科学研究費補助金・基盤研究 (B)、研究協力者
研究課題：越境通学児童の実証的比較研究―国境の透過性および国民形成との関係を中心に―（22H00974, 23K22245）
研究期間：2022 ～ 2025 年度
研究代表者：森下 稔（東京海洋大学）

○学外の機関との共同研究の実績

1. 科学研究費補助金・基盤研究 (C)、2025 ～ 2028 年度、研究分担者
研究課題：タイにおける海外留学と社会階層の再生産に関する質的研究―エリート形成の新たな経路（25K06366）
研究代表者：S Kampeeraparb（名古屋大学）

2. 科学研究費補助金・基盤研究 (C)、2022 ～ 2025 年度（研究期間延長）、研究分担者
研究課題：コロナ禍が日本留学の研究環境と生活実態に与えた影響―M-GTA による質的分析から（22K02679）
研究代表者：S Kampeeraparb（名古屋大学）

3. 科学研究費補助金・基盤研究 (B)、2022 ～ 2025 年度、研究協力者
研究課題：越境通学児童の実証的比較研究―国境の透過性および国民形成との関係を中心に―（22H00974, 23K22245）
研究代表者：森下 稔（東京海洋大学）

○センター内の役割と活動実績

○学内委員会活動

1. 教職課程専門委員会 [委員長]
委員長として、同委員会の運営に携わった。関連して、教師教育コンソーシアム高知の部会員として、高知県教育委員会および高知県内の教職課程を置く大学との連携を進め、本学の教職課程の充実を図った。
2. 国際交流センター運営委員会 [委員]

※ [　] 内は当該組織の中での役割

准教授　　秋谷　公博　（Akiya Kimihiro）

○専門領域

社会学／開発社会学／まちづくり／地域研究／アクティブラーニング

○現在の主な研究テーマ

・中山間地域における住民主体によるまちづくりに関する研究
・コンテンツを活用した観光まちづくりに関する研究
・チーム基盤型学習（以下、TBL）及び課題解決型学習（以下、PBL）を活用したアクティブ・ラーニングの教育効果に関する研究

○令和７年度の活動概要

Ⅰ．教育活動

1.「地域学概論」（池キャンパス）

「地域のことを考える意味とは」、「地元をもとに地域について考える」、「高知県の現状と課題」、「地域づくりとは」等のテーマを取り上げ、高知県の地域づくりについて理解を深めた。

2.「地域とグローバリゼーション」（永国寺キャンパス及び池キャンパス）、

「地域とは？グローバリゼーションとは？」、「グローバリゼーションと多国籍企業」、「格差と不平等」等のテーマを取り上げ、グローバリゼーションを地域との関係から多面的に捉えられる視野を養えるように取り組んだ。また、①コミュニケーション能力、②傾聴力、③思考力、④主体性、⑤発信力、⑥省察力も併せて養う培うことも目的としてTBLを取り入れ、チームワークでの議論や作業を毎回行うことで、学生の上記の６点の能力も身につくように取り組んだ。

3.「チーム形成論」

チームTBL及びフィールドワークを取り入れたPBLを併せて講義を行うことで、多様な背景を持った人々と良好なラポールを気づきながら「思考力」、「主体性」、「発信力」、「傾聴力」、「省察力」及び「コミュニケーション能力」を他学部の受講者とのチーム活動を通して養っていくことを目的として講義を行った。講義の全ての時間はチーム主体で行い、3回のフィールドワーク及び成果発表を課すことで、上記の６点の能力が養えるように指導を行った。

4. その他実習科目

実習科目では、「地域学実習Ⅰ」、「地域学実習Ⅱ」、「域学共生実習」を担当し、フィールドワークを活用して地域の実態把握や、実戦力が培えるように指導を行った。

5. その他の活動

高知県立大学、高知工科大学、高知大学の３大学合同地域活性化団体Sun-fesの顧問を務めた。

Ⅱ．研究活動

令和７年度は、TBLとPBLを活用した教育効果に関する研究等を中心に行った。

Ⅲ．地域連携活動

・高知県土佐市創生有識者会議委員を務め、「土佐市まち・ひと・しごと創生総合戦略」への助言や提言を行った。

・高知県市町村図書館等振興協議会委員を務め、県の取組と市町村立図書館等の現状を踏まえ、図書館の振興に向けた助言や提言を行った。

・スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員を務め、高知県立高知小津高等学校におけるスーパーサイエンスハイスクール事業の運営に関する助言などを行った。

・佐川町総合審議会委員を務め、佐川町総合計画推進のための助言を行った。

佐川町まち・ひと・しごと創生推進会議委員を務め、佐川町まち・ひと・しごと創生総合戦略の運用に関する助言や提言を行った。

・高知県おもてなし県民会議委員を務め、外国人観光客や日本人観光客の誘致に関する助言や提言を行った。

○令和７年度の担当科目

Ⅰ．共通教養教育科目

・地域学実習Ⅰ…45 時間× 6 課題
・地域学実習Ⅱ…45 時間（5 課題）
・域学共生実習…45 時間
・チーム形成論…45 時間
・地域とグローバリゼーション…45 時間（池キャンパス）
・地域とグローバリゼーション…45 時間（永国寺キャンパス）
・地域学概論…45 時間

Ⅱ．教職課程　教職に関する専門教育科目

なし

Ⅲ．専門教育科目

なし

Ⅳ．大学院科目

地域資源論

○研究業績

Ⅰ．著書　なし

Ⅱ．学術論文

１．吉田友一、秋谷公博（2025）「地域活性を内包したコンテンツツーリズムの実際 - 高知市映画ロケ事業からの考察 -」、地域活性学会、『地域活性学会第 17 回研究大会予稿集』、pp. 351-354。

Ⅲ．学会発表

1. 秋谷公博（2025）「チーム基盤型学習と課題解決型学習を活用したチームマネジメント分野における教育効果に関する研究」、東アジア日本語教育 · 日本文化研究学会 2025 年度国際学術発表大会（於、琉球大学）、2025 年 8 月 22 日。

2. 秋谷公博（2025）「SNS と主観的幸福感に関する研究」、韓国日本近代学会第 51 回 国際学術大会（於、

近畿大学)、2025 年 10 月 18 日。

○所属学会（役職を含む）

1. 社会学学会
2. 国際開発学会
3. 東アジア日本語教育・日本文化研究学会 理事
4. 都市計画学会
5. 都市住宅学会
6. 日本国際観光学会
7. 韓国日本近代学会
8. 地域活性学会

○社会的活動（地域連携事業・行政や NPO 等の委員を含む）

Ⅰ．委員等

1. 土佐市創生有識者会議委員
2. 高知県市町村図書館等振興協議会委員
3. スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員
4. 佐川町総合審議会委員
5. 高知県おもてなし県民会議委員
6. 令和 8 年度中山間地域交流促進事業委託業務プロポーザル審査委員会審査委員長
7. 土佐市指定管理者制度検討委員会公園・住宅・集会所・その他部会委員

Ⅱ．講演

1. 安徽省大運河文化研究学会大運河建設学術大会で「コンテンツツーリズムを通したインバウンド振興に関する研究～日中友好を視座に入れて～」の講師を担当（於　中国、淮北師範大学）（特別講演の講師・ビデオ出演）（2025 年 10 月 18 日）
2. 域学共生連携拡大会議で「実習を通した関係人口の構築に向けて」の講師を担当（於　高知県立大学永国寺キャンパス）（2025 年 12 月 23 日）
3. 令和 7 年度 高知県立大学社会福祉学部 FD 研修で「チーム基盤型学習（TBL）と課題解決型学習（PBL）を活用した教育について」の講師を担当（於　ZOOM）（2026 年 2 月 9 日）

○研究助成

なし

○学外の機関との共同研究の実績

なし

○センター内の役割と活動実績

1. 地域教育研究センター運営委員会 [副センター長]

○学内委員会活動

1.FD 推進委員会 [委員]

2. 共通教育専門委員会 [委員]
3. 高知県立大学大学院人間生活学研究科教務委員会 [委員]
4. ウェルビーイング学領域 WG[委員]

※ [　] 内は当該組織の中での役割

准教授　　高徳　希　（Takatoku Nozomi）

○専門領域

健康・スポーツ科学／バイオメカニクス／発育発達／測定評価

○現在の主な研究テーマ

・動作分析および筋電図学的手法を用いた身体運動の定量化
・調整力の発達過程

○令和７年度の活動概要

Ⅰ．教育活動

（1）令和６年度と同様に、共通教養教育科目である健康スポーツ科目および域学共生科目を担当した。「健康・スポーツ科学Ⅰ・Ⅱ」については、各種のスポーツ活動を通して多様なスポーツの在り方や生涯スポーツの意義を示し、自らの身体活動の振り返りを促しながら学生自身のフィジカルリテラシーを高める授業を展開した。「健康とヘルスプロモーション」については、各世代に応じた身体活動の在り方や運動処方をふまえ、「スポーツ×健康×まち（地域）づくり」をコンセプトにしたスポーツ（運動遊び）を立案するワークを行った。「地域学実習Ⅰ」「地域学実習Ⅱ」については、多様な地域活動をとおして地域固有の価値を発見し、学生自らが発信できるように支援を行なった。特に「地域学実習Ⅰ」においては高知県歴史文化財課の民族芸能の担い手事業と連携したプログラムを展開した。

（2）令和６年度と同様に、「県民大学」学生プロジェクト「立志社中」に採択された学生団体「活輝創生実行委員会（佐川町尾川地区）」「おおとよ探検隊（大豊町立川地区）」の顧問として、現地活動の視察、円滑な団体運営に向けた支援を行なった。

Ⅱ．研究活動

令和６年度と同様に、以下の研究について重点的に取り組んだ。

・科学研究費助成事業・基盤研究（C）「動きのぎこちなさの定量化に基づく新たな調整力評価法の開発」に関連して、連続的な運動の動作過程を定量的に評価する手法について検討
・地域共生学研究機構リ・デザインプロジェクト「歴史文化を通じたまちづくり」に関連して、バイオメカニクス領域の研究手法を用いた民俗芸能のデジタルデータ化（主に演じ手、踊り手の身体情報）について検討

Ⅲ．地域連携活動

・高知市健康増進課「高知市健康チャレンジ 2025 スタートイベント」講師:「いつもの身体活動でアクティブに！～健康への第一歩は日常生活の中に～」（令和７年６月）
・日本スポーツ協会日本スポーツ少年団・四国ブロックスポーツ少年団連絡会議「令和７年度四国ブロックスポーツ少年団リーダー研究大会」講師：「『つくる』スポーツ～みんなでアイデアの引き出しを増やそう～」（令和７年８月）
・第 42 回本山町・本山町老人クラブ連合会・高知県立大学公開講座「夜學 2025」講師：「日常の身体活動を見直そう」（令和７年９月）
・香川県スポーツ協会香川県スポーツ少年団「令和７年度香川県スポーツ少年団指導者研修会」講師:「『つくる』スポーツ～スポーツの『当たり前』を見直す意味とは？～」（令和７年 11 月）

・地域教育研究センター「令和７年度域学共生連携拡大会議（第二部 連携の種）」講師：「日常生活の『歩き方』から考える健康づくり」（令和７年 12 月）

○令和７年度の担当科目

Ⅰ．共通教養教育科目

・健康スポーツ科学Ⅰ…30 時間× 5 クラス
・健康スポーツ科学Ⅱ…30 時間× 5 クラス
・健康とヘルスプロモーション…10 時間× 2 クラス
・地域学実習Ⅰ…45 時間× 3 課題
・地域学実習Ⅱ…（旧カリキュラム）45 時間× 2 課題
（新カリキュラム）45 時間× 1 課題

Ⅱ．教職課程　教職に関する専門教育科目

なし

Ⅲ．専門教育科目

・文化学部課題研究ゼミナールⅠ…30 時間
・文化学部課題研究ゼミナールⅡ…30 時間
・文化学部課題研究ゼミナールⅢ（夜間主）…30 時間
・文化学部課題研究ゼミナールⅣ（夜間主）…30 時間

Ⅳ．大学院科目

なし

○研究業績

Ⅰ．著書

なし

Ⅱ．学術論文

（学術論文）

・西面智華、高徳 希、藤原 素子：時間的制約下における投動作のタイミングコントロール －移動視標の速度に対する「投げ分け」に着目して－（査読付）、奈良女子大学スポーツ科学研究、27 巻 1 号、pp.1-13（令和７年）

（報告書等）

・高徳 希：両足連続跳び越しの動作過程からみえてくるもの、子どもと発育発達、23　巻 3 号、pp.182-187（令和７年）

Ⅲ．学会発表

・高徳 希：幼児の両足連続跳び越しにおける動作過程の評価、日本幼少児健康教育学会 第 44 回大会（秋季）（令和７年 9 月）

・高徳 希、根本大志：有形・無形文化財のデジタルアーカイブ化を考える（リ・デザインプロジェクト）、令和７年度第 3 回社会的処方研究会「地域共生社会をデザインする～県大が取り組む共生社会へのアプローチ～」（令和 8 年 2 月）

○所属学会（役職を含む）

・日本体育・スポーツ・健康学会
・日本バイオメカニクス学会
・日本発育発達学会
・日本体育測定評価学会
・四国体育・スポーツ学会
・日本幼少児健康教育学会

○社会的活動（地域連携事業・行政や NPO 等の委員を含む）

Ⅰ．委員等

・高知家健康会議生活習慣病対策部会（高知県健康政策部保健政策課）[委員]
・令和 7 年度事業所健康づくり支援事業委託業務公募型プロポーザル審査委員 [委員]
・葉山の花取踊調査委員会 [委員]

Ⅱ．講演

・高知市健康チャレンジ 2025 スタートイベント 講師（令和 7 年 6 月）
・令和 7 年度四国ブロックスポーツ少年団リーダー研究大会 講師（令和 7 年 8 月）
・第 42 回本山町・本山町老人クラブ連合会・高知県立大学公開講座「夜學 2025」講師 （令和 7 年 9 月）
・令和 7 年度香川県スポーツ少年団指導研修会 講師（令和 7 年 11 月）
・令和 7 年度域学共生連携拡大会議（第二部 連携の種）講師（令和 7 年 12 月）

○研究助成

・科学研究費助成事業・基盤研究（C）、研究代表者（4,420 千円）
研究課題：動きのぎこちなさの定量化に基づく新たな調整力評価法の開発
研究期間：令和 5（2023）年～令和 8（2026）年

○学外の機関との共同研究の実績

・科学研究費助成事業・基盤研究（B）、研究協力者
研究課題：幼児の運動能力発達の時代推移と運動発達に関与する要因の運動創造性媒介モデルの検証
（研究代表者：東京学芸大学・吉田伊津美）
研究期間：令和 7（2025）年～令和 10（2028）年

○センター内の役割と活動実績

なし

○学内委員会活動

・共通教育専門委員会 [委員]
・紀要専門部会 [委員]

※ [　] 内は当該組織の中での役割

2　健康長寿研究センター教員

准教授　小林　秀行（Kobayashi Hideyuki）

○専門領域

健康経済学、経済政策、看護学

○現在の主な研究テーマ

ケイパビリティを情報的基礎とする健康・厚生・経済評価指標の構築
労働者のウェルビーイングの向上と健康経営
個人のウェルビーイング向上

○令和７年度の活動概要

Ⅰ．教育活動

保健統計学、地域保健政策、看護情報学、データサイエンスに関連する教育
地域住民を主体とした在宅療養支援に関する大学院生の実地教育

Ⅱ．研究活動

住民のウェルビーイング向上に資する評価指標に関する研究
児童生徒の生活と健康・ウェルビーイングに関する分析

Ⅲ．地域連携活動

在宅療養推進に向けた地域の専門職との連携
自治体における小児生活習慣病健診に関する分析・助言
小中学校養護教諭部会との連携

○令和７年度の担当科目

I. 看護学部専門教育科目

保健統計学、地域保健政策、情報と看護、看護セミナーⅢ（データサイエンス）

II. 大学院科目

データ分析方法論、看護情報学Ⅰ、看護情報学Ⅱ

○研究業績

Ⅰ．著書

なし

Ⅱ．学術論文

1) 日本の正社員労働者における職場のソーシャルサポートと精神的健康の関連： 縦断調査による検討 . 医療経済研究 , 36(2):172-190.
2) 事業場における労働時間把握方法の実態：業種・従業員規模・時間外労働時間に着目して . 労働安全衛生研究 , 18(1):23-30.

3) 子どもの社会経済的状況が発育不良や不健康リスクに及ぼす影響 : 健診データと健康行動国際指標との関連の検討 . 生協総研賞・第 21 回助成事業研究論文集 , 21:77-89.
4) 非典型時間帯労働と勤務日・休日の睡眠時間との関連 . 労働政策研究報告書 ,235:101-124.

Ⅲ．学会発表

1) 非典型時間帯労働と勤務日･休日の睡眠時間との関連 . 第 98 回日本産業衛生学会． 仙台市 , 2025 年 5 月 .
2)「看護師が実施するケアは違う」のか？ 回復や生活構築への効果の計量的検討 . 日本看護技術学会第 23 回学術集会 . 京都大学 , 2025 年 10 月 .
3) 小中学生の寝だめと健康・ウェルビーイングの関連 . 第 45 回日本看護科学学会学術集会 . 新潟市 . 2025 年 12 月 .
4) 小中学生の SNS 利用自己管理と健康・生活への影響に関する研究 . 第 71 回四国公衆衛生学会総会 , 高知市 , 2026 年 2 月 .
5) 中山間地域高齢者の近隣助け合いと日常生活機能の関連 ;「もうちょっと居ろうや」に向けて～ . 第 71 回四国公衆衛生学会総会 , 高知市 , 2026 年 2 月 .

○所属学会（役職を含む）

日本経済学会
医療経済学会
日本経済政策学会（部会幹事）
公共選択学会（理事）
日本公衆衛生学会
日本看護科学学会
日本看護技術学会
日本看護管理学会

○社会的活動（地域貢献事業・行政や NPO 等の委員を含む）

Ⅰ．委員等

労働政策研究・研修機構 経済社会の変化と労働者の生活、健康、ウェルビーイングに関する研究会委員

Ⅱ．講演

高知県看護協会認定看護管理者教育課程
土佐市養護部会研修会

○研究助成

なし

○学外の機関との共同研究の実績

住民のウェルビーイング向上に関する研究（津野町）
小児生活習慣予防健診データと生活習慣評価（土佐市、芸西村）
児童生徒の健康行動調査研究（土佐市、芸西村）

○センター内の役割と活動実績

健康長寿研究センター　副センター長

第 3 回社会的処方研究会講師

○学内委員会活動

健康長寿研究センター運営会議 [委員]

紀要専門部会 [委員]

図書館運営本部会議 [委員]

研究倫理検討本部 [委員]

リデザインプロジェクト [委員]

※ [　] 内は当該組織の中での役割

3　総合情報研究センター教員

教授　五百藏　高浩（Ioroi Takahiro）

○専門領域

英語学（音声学、音韻論、形態論、コーパスを活用した言語使用）／英語科教育

○現在の主な研究テーマ

継続的に関心を持ってきているのは、英語という言語が持っているシステムの中で、特に、音の面を構成しているシステムがどのように組織化されているのかという問いを考究することを通じて、人が持っている言語を産出・理解する能力の特質を理解することである。言語を研究する分野は多岐に分かれており、どの部分を見るのか、どのような考え方（理論）を前提とするのか、どのような資料を用いるのかといった点でも様々なアプローチがあるが、私の場合は、語を形成する体系（形態論）と音の体系（音韻論）とが接する箇所の機構に着目し、そこでどのような相互作用が生じるのか、新しい語の候補となる要素の組み合わせはどのように体系的に説明できるのかという問いを考えている。英語を学習者する学習者が派生語のアクセント位置を予測する際に語のどのような特性が判断に影響を及ぼすのかという問いについても考察してきた。

英語の音声・音韻だけでなく、特定の表現や連語などが実際にどのように用いられているのかを知ることを目的に、言語資料（コーパス）を活用した実証研究についても行ってきている。

○令和７年度の活動概要

Ⅰ．教育活動

・文化学部専門科目「言語教育実践論Ⅰ」において、受講学生が、地域に住む日本語を母語としない方々への支援を通じ文化的・社会的課題への理解を深めこと及び実際の教育現場での指導を見学することで学びを深めることを目的とし、高知県立高知国際中学校夜間学級での授業見学（履修者５名）を実施した。

・文化学部において卒業論文提出者２名、大学院人間生活学研究科において博士前期課程修了者（修士論文提出）１名を指導した。

卒業論文題目

・Characteristics of Pronunciation Errors of Chinese Learners' English

・英語の感覚動詞 feel に関する研究 ―「主語（人）＋ feel ＋形容詞」のコロケーションに焦点を置いて―

修士論文題目

・GHQ/SCAP・CIE 映画に関する批判的談話分析

・教育実習事前指導（模擬授業）において、外部助言者の招聘を増やし、より実践的できめの細かい指導を受けられる機会を充実させた。

・教員採用試験受審者に対し、二次試験対策（模擬面接、模擬授業）を個別に実施した。

・令和７年度高知大学教育学部附属中学校研究発表会への参加（教職課程受講者３，４回生対象）

・高知県教育センターとの連携により「教職実践演習」の内容充実を図った。

Ⅱ．研究活動

前年度に学会で口頭発表を行った以下の２件の研究について学術誌投稿準備を進めた。

・Use of AI for exploring morphology and phonology in English

・英語の派生接尾辞 -ify/ize の付加に見られる基体の変化について

総合情報研究センターとして取り組んでいる以下の研究１件について、方法論の検討を行った

・大学図書館における新しい検索支援システムに関する研究―図書空間の体験と偶発的発見を支援するデジタル・アーカイブの実践

Ⅲ．地域連携活動

・　帰国・外国人児童生徒等に対するきめ細かな支援事業運営協議会委員
・　高知県立高知国際中学校・高等学校国際シンポジウム審査員及びアドバイザー会委員
・　高知県立安芸高等学校学校運営協議会委員
・　高知工科大学利益相反マネジメント委員会委員

○令和７年度の担当科目

Ⅰ．共通教養教育科目

なし

Ⅱ．文化学部専門教育科目

言語教育実践論Ⅰ、異文化理解Ⅰ、異文化理解（夜間主）、英語学専門演習Ⅱ、国際文化専門演習Ⅱ、文化学研究ゼミナールⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

英語科教育法Ⅰ、英語科教育法Ⅱ、教職実践演習、教育実習Ⅰ、Ⅱ

Ⅲ.大学院科目

英語文化論Ⅰ、研究倫理

○研究業績

Ⅰ．著書

なし

Ⅱ．学術論文

なし

Ⅲ．学会発表

無し

○所属学会（役職を含む）

日本英文学会会員（中国四国支部理事）、日本英語学会会員、英語コーパス学会会員（幹事）、全国英語教育学会会員、四国英語教育学会会員（理事）、日本第二言語習得学会会員

○社会的活動（地域貢献事業・行政や NPO 等の委員を含む）

Ⅰ．委員等

・公益財団法人高知県産業振興センター評議員
・高知ぢばさんセンター大ホール等あり方検討会委員（（公財）高知県産業振興センター）
・帰国・外国人児童生徒等に対するきめ細かな支援事業運営協議会委員（高知県教育委員会）
・高知県立安芸高等学校学校運営協議会委員（高知県教育委員会）
・高知県立高知国際中学校・高等学校国際シンポジウム審査及びアドバイザー会（高知県立高知国際中学校・高等学校）

Ⅱ．講演

なし

○研究助成

なし

○学外の機関との共同研究の実績

なし

○センター内の役割と活動実績

総合情報研究センター長

・高知県公立大学法人情報戦略統括会議委員（県立大学統括責任者）

・高知県公立大学法人情報戦略実務者協議会委員

・ 高知県公立大学法人データセンター及び回線サービス提供業務仕様策定委員会・委員プロポーザル審査委員

・ 高知県公立大学法人データセンターサービス整備事業及び運用保守委託業務仕様策定委員会委員・プロポーザル審査委員

・ 高知県公立大学法人永国寺・池キャンパス有線ネットワークシステム更新及び運用保守委託業務仕様策定委員会委員・プロポーザル審査委員

・令和７年度公立大学協会情報部会出席（令和７年 11 月 13 日）

・令和７年度高知県ネットワークセキュリティ連絡協議会（令和７年）

・情報演習室 BYOD ワーキンググループ委員

・情報インシデント発生時に本学情報課と連携し対応を図った。

・センター事業としてプログラミング講座を開催（担当　根本講師、名和助教）

○学内委員会活動

・大学運営会議

・教育研究審議会

・情報基盤・セキュリティ本部

・総務・危機管理本部長

・高知県立大学内部質保証専門部会

・教員評価専門会議

・地域共生学研究機構運営委員会

・高知県立大学振興基金運営委員会

・ウェルビーイング学領域ワーキンググループ

・教学マネジメント推進ワーキンググループ

・令和７年度 高知県立大学 リ・デザイン プロジェクト審査

講師　根本　大志（Nemoto Taishi）

○専門領域

応用情報学、情報デザイン、デジタルアーカイブ、人工知能、情報教育

○現在の主な研究テーマ

文化資源のデジタルアーカイブと継承支援に関する研究
人工知能と拡張知能の概念を用いた知識設計および思考支援に関する研究
情報デザインに基づくシステムおよび設計に関する研究
地域社会における情報基盤整備と地域連携型 DX に関する研究
3D デジタル技術を活用した文化・教育・地域資源の可視化と活用に関する研究

○令和７年度の活動概要

Ⅰ．教育活動

共通教養教育科目、文化学部専門教育科目を担当し、情報リテラシー、AI 概論、データサイエンス入門、情報処理演習といった科目を担当した。講義においては、知識伝達にとどまらず、生成 AI やデジタル技術を活用した実践的学習環境の整備に努めた。

Ⅱ．研究活動

人工知能、拡張知能、デジタルアーカイブ、レシピ生成、地図情報デザイン、共同文書作成支援、研究室メタバースなどをテーマとして研究を推進した。学術論文の公表に加え、国際会議・国内学会において複数の研究発表を行い、研究成果の社会的・学術的発信に取り組んだ。また、競争的資金として、三菱財団の助成課題にも取り組み、研究基盤の拡充を図った。

Ⅲ．地域連携活動

地域文化資源のデジタルアーカイブ化、社会的処方研究会における報告、ならびに中高生向けプログラミング体験講座の実施など、地域に開かれた実践活動を行った。大学内外の関係者と連携しながら、地域資源の可視化・記録・活用に資する情報技術の導入と、その教育的・社会的意義の発信に努めた。

○令和７年度の担当科目

Ⅰ．共通教養教育科目

IT リテラシー
AI 概論
データサイエンス入門

Ⅱ．文化学部専門教育科目

情報処理演習
文化学課題研究ゼミナールⅠ

Ⅲ．大学院科目

人間生活学情報リテラシー

○研究業績

Ⅰ．著書

特筆事項なし

Ⅱ．学術論文

1. 拡張知能概念に基づく文化創造とマルチタスク支援の可能性，『情報デザイン研究』Vol.1, No.1, pp.15-28，2025.

2.Database by RAG to Represent Random Mechanic, Models and Methods for Systems Engineering (Springer Nature Switzerland), pp.381-391, 2025.

Ⅲ．学会発表

1.A Study on a Reading Experience System: Reimagining E-Books and Exploring Their Potential, The 5th International Conference on Applied Informatics and Media Design 2025, 2025.

2.AI 時代におけるコンピテンシーの再構築と教育カリキュラムデザイン, 2025 年度春季 HCD 研究発表会, 2025.

3.Proposal for a Novel Recipe Generation Approach Using Inverse TF-IDF and Generative AI, The 8th International Conference on Interaction Design and Digital Creation / Computing (IDDC), Kitakyushu, Japan, 2025.

4.Proposal for a PBL-type Learning Model Using 3D Gaussian Splatting, The 8th International Conference on Interaction Design and Digital Creation / Computing (IDDC), Kitakyushu, Japan, 2025.

5. 高知県を対象とした年代別「聖地マップ」Web アプリケーションの提案，日本情報デザイン学会 第 3 回学術研究会（四国・九州支部），2025.

6.Implementation of a Protocol for Extending the Functions of Generative AI for Collaborative Document Authoring Based on Process Visualization, The International Conference on Systems Engineering, Warsaw, Poland, 2025.

7.Designing Cloud Communities through Artificial Personalities: A Facilitation System toward Well-being, International Conference on Computers, Data Management and Technology Applications (ICCDTA-25), Las Vegas, USA, 2025.

8. ライブカメラ映像を統合したマッピング Web アプリケーションの提案，電気学会第 102 回情報システム研究会，2025.

9. 地図の情報デザイン史に基づく文脈拡張型マッピングの提案と実践，2025 年度冬季 HCD 研究発表会, 2025.

10. 研究室メタバースの構築に向けた基盤理論と実装モデル, 日本情報デザイン学会 第 4 回学術研究会（関東支部），2025.

11. エッジデバイスにおけるリアルタイム状況認識のためのマルチモーダル統合ストリーミングアーキテクチャの設計 , 日本情報デザイン学会 第 5 回学術研究会（関東支部），2025.

12. 生成 AI・自動化ツール導入を被雇用者視点で評価する診断フレームワークの提案 , 日本情報デザイン学会 第 5 回学術研究会（関東支部），2025.

○所属学会（役職を含む）

情報処理学会　正会員

IEEE（アメリカ電気電子学会）　正会員

International Conference on Interaction Design and Digital Creation / Computing (IDDC)　プログラム委員長

International Conference on Applied Informatics and Media Design (AIMD)　委員

HCD 研究会査読委員

○社会的活動（地域貢献事業・行政や NPO 等の委員を含む）

Ⅰ．委員等

特筆事項なし

Ⅱ．講演

特筆事項なし

○研究助成

第 54 回（2025 年度）三菱財団人文科学研究助成

○学外の機関との共同研究の実績

特筆事項なし

○センター内の役割と活動実績

1. データセンター移設プロポーザル審査員
2. ネットワーク移設プロポーザル審査員
3. リ・デザインプロジェクト　デジタルアーカイブ PJ　社会的処方研究会における報告
4. 中高生向けプログラミング体験講座を実施

○学内委員会活動

1. 情報基盤・セキュリティ本部会議
2. 情報基盤整備方針検討会
3. データセンターサービス整備事業仕様策定委員会
4. 農村歌舞伎デジタルアーカイブ PJ
5. 共通教育委員会
6. 研究費検討 WG

助教　名和　真一（Shin-ichi Nawa）

○専門領域

量子色力学、計算物理学

○現在の主な研究テーマ

有限要素法

○令和７年度の活動概要

Ⅰ．教育活動

コンピュータリテラシー、情報処理概論、プログラミング基礎、地域学実習Ⅰの科目を担当

Ⅱ．研究活動

―

Ⅲ．地域連携活動

―

○令和７年度の担当科目

Ⅰ．共通教養教育科目

コンピュータリテラシー、情報処理概論、プログラミング基礎、地域学実習Ⅰ

Ⅱ．学部専門教育科目

―

Ⅲ．大学院科目

―

○研究業績

Ⅰ．著書

―

Ⅱ．学術論文

―

Ⅲ．学会発表

―

○所属学会（役職を含む）

物理学会、情報処理学会

○社会的活動（地域貢献事業・行政や NPO 等の委員を含む）

Ⅰ．委員等

寺田寅彦記念館友の会幹事

Ⅱ．講演

―

○研究助成

――

○学外の機関との共同研究の実績

――

○センター内の役割と活動実績

データセンターサービス整備事業策定委員、
永国寺・池有線ネットワーク整備事業策定委員

○学内委員会活動

図書館運営委員、紀要専門部会員

地域共生学研究機構紹介ページ

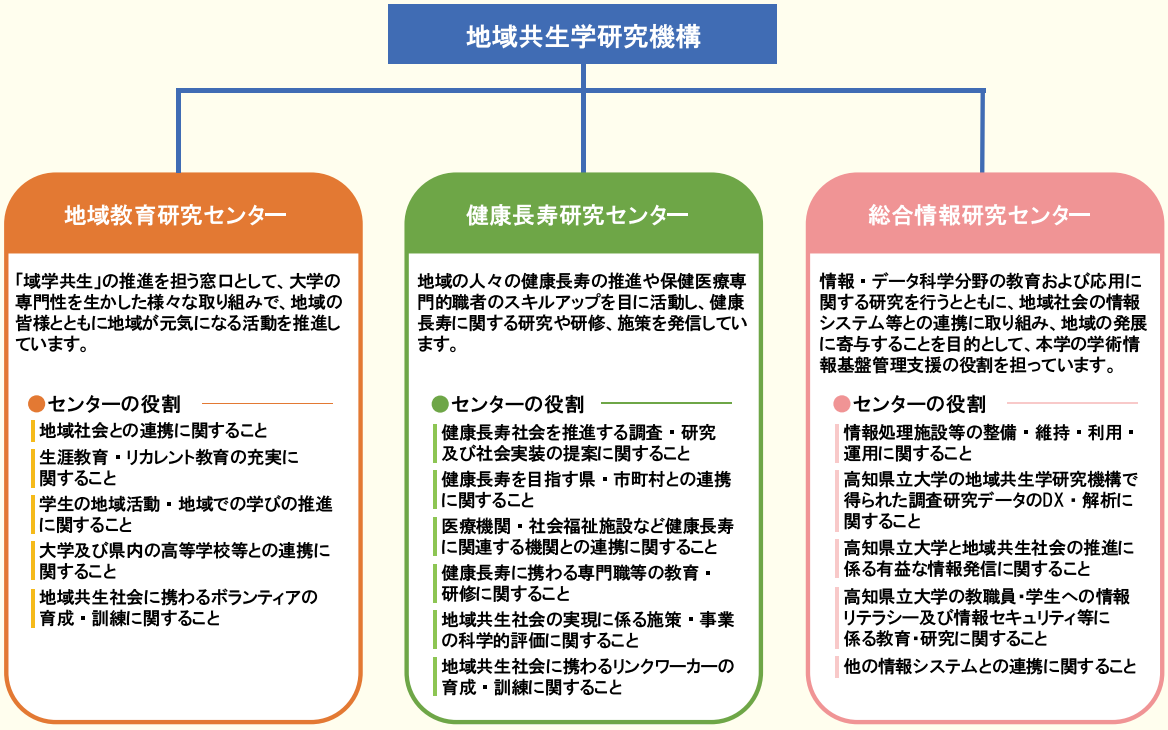
地域共生学研究機構

地域共生学研究機構は、地域共生社会の実現に向けて、分野横断的・共創的な研究・活動を目的とした新機構です。

既存の地域教育研究センターと健康長寿センター、総合情報センターを新たな研究機構として再構築し、分野横断的・共創的な教育・研究を推進し、研究成果の社会還元機能を強化し、高知県における地域共生社会を支援します。

●強化していく取り組み

1．地域共生社会に携わるボランティア・リンクワーカーの育成・訓練
2．地域共生社会の実現に向けた社会的処方の実践と科学的な検証・評価
3．調査・研究から得られた健康長寿社会に係る施策の社会実装の提案
4．大学で得られた調査研究データのＤＸ・解析
5．高知県の発展や健康・幸福度に係る有益な情報の発信
6．大学教職員と学生への情報リテラシー及び情報セキュリティ等の向上



1　高知県中山間部での「介護保険・日常生活圏域ニーズ調査」結果にみる健康とウェルビーイング向上に関連する社会的処方の取組み
ウェルビーイング

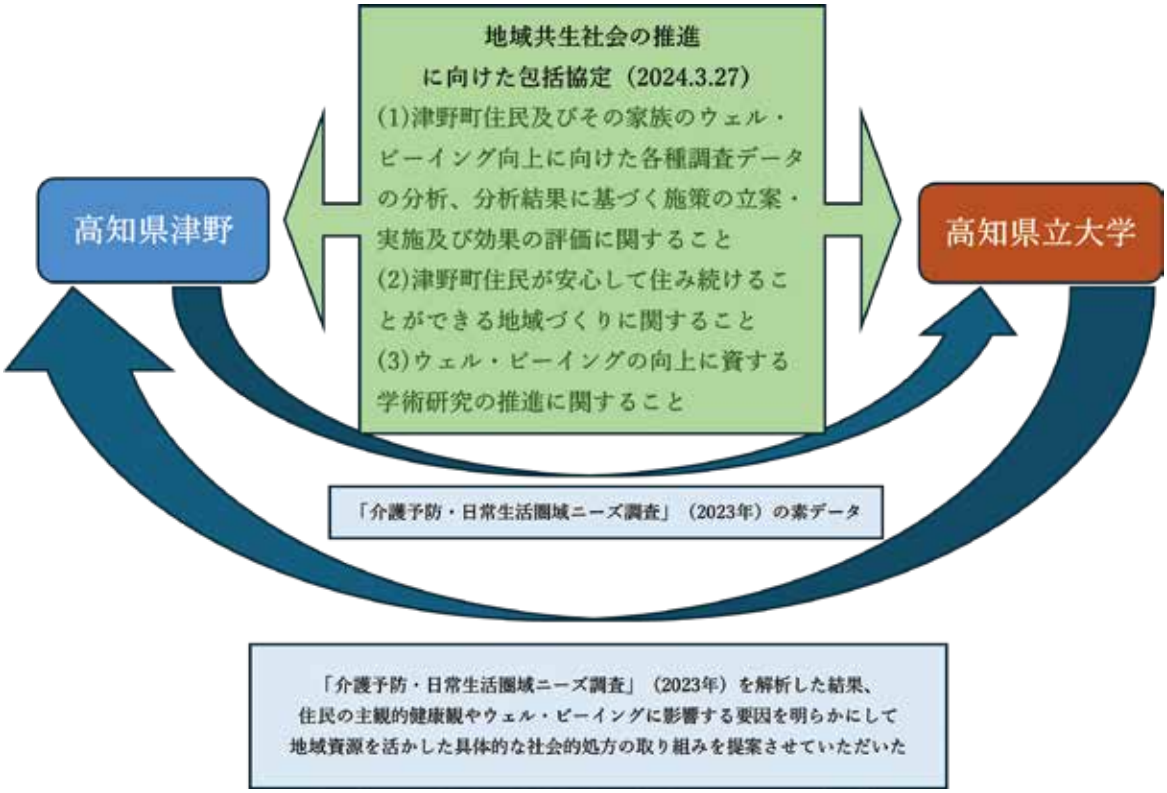
プロジェクトメンバー（学内） 学長　甲田 茂樹／全体統括・データ分析等

(1) プロジェクト概要・目的

高知県は他に類を見ない速さで人口減少が進んでおり、とりわけ総面積の 90％を占める中山間地域では深刻で、「限界集落」と呼ばれる地域が増えている。そこでは地域社会のネットワークが縮小することで地域住民が活用できる社会資源や人的交流が減り、住民の孤立化が進んでいることが地域課題の一つに挙げられている。

2024 年 3 月に高知県立大学と高知県中西部の中山間地域である津野町は地域共生社会の推進に向けた連携協定を締結した。津野町が 2023 年に実施した「介護予防･日常生活圏域ニーズ調査」の結果を解析し、住民の主観的健康観やウェルビーイングに影響する要因を明らかにした。その結果をもとに、住民の主観的健康観とウェルビーイングの双方を高めるための、地域資源を活かした具体的な社会的処方の取組みなどを提案し、地域住民の皆様とともに継続的にその有効性を検証していく。

(2) プロジェクト概要図



(3) 令和７年度のプロジェクト内容・成果

2023 年 1 月に実施された「介護保険・日常生活圏域ニーズ調査」のデータを活用し、高齢者の健康状態や地域活動への参加状況が主観的健康やウェルビーイングに与える影響を多角的に分析した。主な分析結果は以下の通りである。

①主観的健康観が高い高齢者の特徴として、「物事を前向きに考える（憂鬱な気分にならない）」「前期高齢者」「家族や友人以外の相談相手がいる」「収入のある仕事に参加している」といった要因が抽出された。

②日常の生活能力が高い層は、積極的に外出しており、ボランティア活動への参加や、月に 3 人以上の友人と交流がある傾向が認められた。

③幸せを実感している高齢者は、生きがいを持ち、疾病がなく、経済的な困窮感がない状態で、日常的な運動習慣や周囲との人的なつながりを有していることが示唆された。

津野町内にはボランティア・スポーツ・趣味・伝統文化の継承など、多様な団体の活動が確認されており、分析からこれらの地域活動への積極的な参加は、健康寿命の延伸や医療・介護費用の抑制に寄与する可能性がある。特に、就労・スポーツ・地域行事など、複数の種類の活動に従事しているほど、要介護リスクが抑制される傾向が先行研究からも示されている。

本プロジェクトの分析結果は、これまで 2 回津野町の関係各所へフィードバックを行っている。2025 年 3 月 22 日から 23 日にかけて、獨協大学で開催された日本社会関係学会第 5 回研究大会に参加し、公募報告セッション「社会的孤立・孤独の予防と Well-Being」で本学文化学部の大井方子氏が「高知県の中山間部に居住する高齢者の健康とウェル・ビーイングの向上に関与する諸要因の調査研究」を発表した。また令和 7 年度は第 1 回社会的処方研究会において、上記の分析結果を広く学内へ共有した。地域診断を通じた「地域の課題の見える化」を行い、学術的視点から地域共生社会のモデルケースを提示した。

2　Kochi Teens Base（こうちティーンズベース）

プロジェクトメンバー（学内） 社会福祉学部 教授　西梅 幸治／全体統括
社会福祉学部 准教授　加藤 由衣／予算・広報
プロジェクトメンバー（学外） 高知県心の教育センター【運営主体】
指導主事　畔元 杏奈
指導主事　安田 まや
相談支援員　川上 真由美

(1) プロジェクト概要・目的

目的：

集団で過ごすことや人と関わることに不安があったり、学校に通いづらさを感じたりしている中学生・高校生等が安心して過ごすことのできる場を、高知県教育員会と高知県立大学が協働により提供する。そのことを通じて、学びを希望する子どもへの学習支援等をはじめ、社会的自立に向けた成長を支援する。

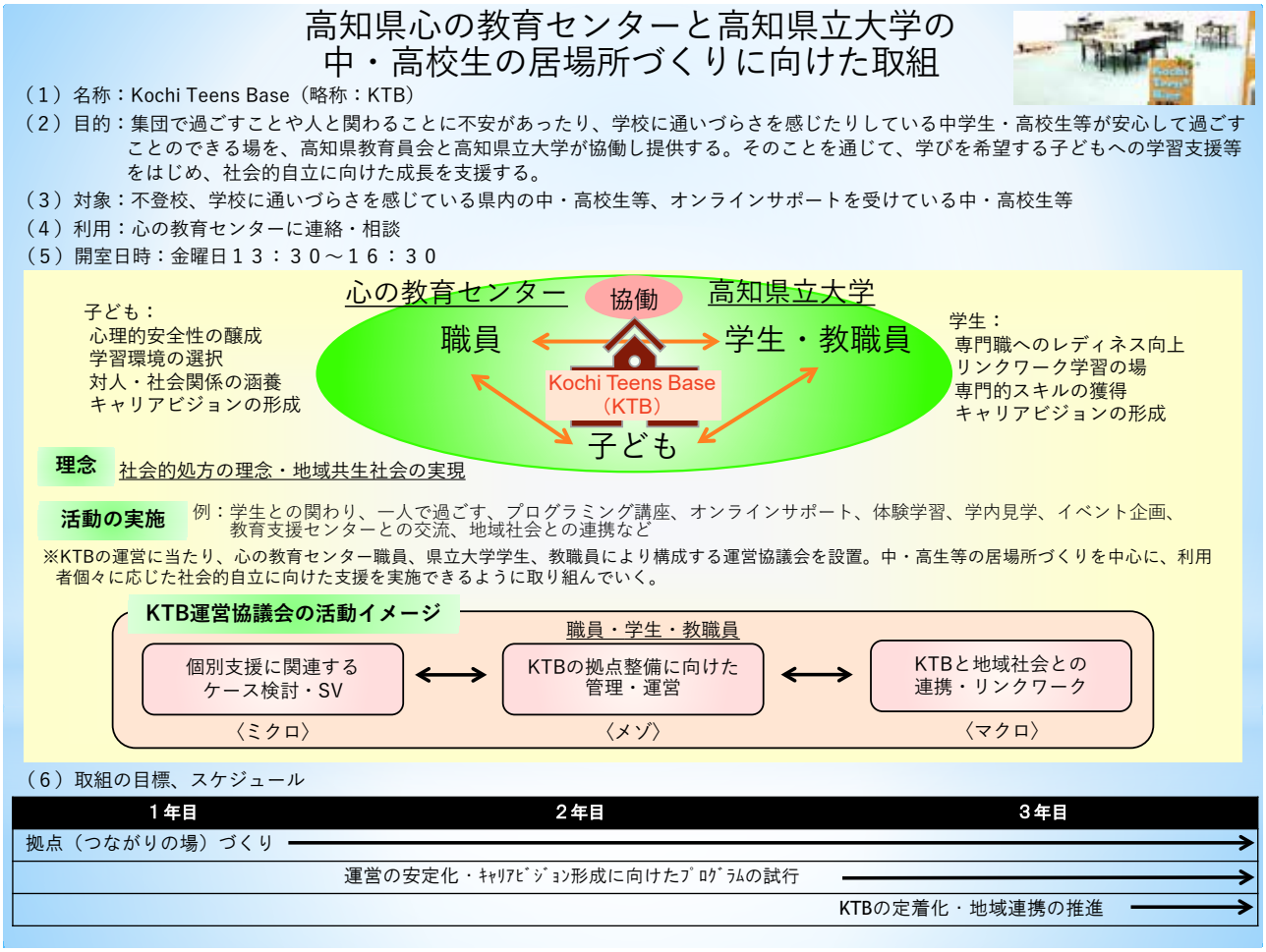
概要：

高知県教育委員会では、高知県内の子どもたちをめぐる現状や課題をふまえ、重層的な支援体制の整備・強化による不登校対策を推進し、多様な学びの機会の創出に取り組んでいる。一方で本学は、県下での地域共生社会の実現に向け、高知家地域共生社会推進宣言に基づいた取り組みを進めている。特に本学の10年戦略「UoK Vision 2033」である地域共生社会を支援する実践的な教育・研究の一環として、地域共生社会や社会的処方の理念をふまえた実践的な取り組みを展開している。Kochi Teens Base（以下、ＫＴＢ）は、高知県教育委員会と高知県立大学の協働によって実現するリ・デザインプロジェクトの一つである。

ＫＴＢは、永国寺キャンパス地域連携棟１階にて、概ね毎週金曜日 13：30 ～ 16：30 に開室し、学校に通いづらい中学生や高校生等が安心して過ごすことを目指した居場所である。活動のスケジュールには、過ごし方を決めるハロータイム、自己学習や興味・関心に基づいて活動する個別タイム、他の利用者や学生ボランティアと交流するグループワークも含めたフリータイム、活動のふり返りを行うグッバイタイムを設けている。

具体的な運営主体は、高知県心の教育センターが担い、指導主事と相談支援員が統括し、心の教育センターに所属するスクールソーシャルワーカーが側面的な支援を、社会福祉学部３・４回生がボランティア・スタッフとして参加している。運営に際しては、心の教育センター職員と学生ボランティア、社会福祉学部の教員（西梅・加藤）、戦略広報課職員で構成する運営協議会を設置し、定期的に開催することで個別支援に関するケース検討、ＫＴＢのプログラム立案やイベントの企画・運営、そして地域社会との連携・リンクワーク等に関する協議を行い、その充実を図っている。

（2）プロジェクト概要図



（3）令和７年度のプロジェクト内容・成果

ＫＴＢでは、2025 年 4 月 11 日（金）～ 2026 年 3 月 13 日（金）にかけて、計 40 回の活動を行った。主な活動内容と成果は、次のとおりである。

内容：

（1）日常的な活動

標準的なスケジュールは、次のとおりである。大まかなスケジュールを示しながらも、子ども個々のペースにあわせた時間配分と活動にするため、ハロータイム時に子ども自身がスケジュールを決めることになっている。具体的な活動にあたっては、拠点であるＢ 101 教室だけでなく、子ども個々の特性やその日の体調に応じてＢ 102 教室を利用し、一人で静かに過ごすことのできる空間を準備している。またイベントやアクティブな活動時には、Ｂ 103 教室も利用している。

表１　１日のスケジュール

時間	分	活動	内容
13:30～	30分	ハロータイム	スケジュール確認、個別ワーク
14:00～	35分	個別タイム	個別ワーク、個々での活動、自己課題学習、学生等との個別交流
14:35～	10分	休憩	
14:45～	45分	フリータイム	グループワーク、カードゲーム、キャンパス散策、モルック、軽スポーツ、イベント
15:30～	10分	休憩	
15:40～	35分	フリータイム	グループワーク、カードゲーム、キャンパス散策、モルック、軽スポーツ、イベント
16:15～	15分	グッバイタイム	ふり返り、次回の予定

（2）イベント開催

今年度、開催した主なイベントは、以下のとおりである。

4月25日：学食ツアー（永国寺生協食堂の体験）
7月25日：夏祭りの開催（子どもの家族も参加）
9月17日：高知まんがＢＡＳＥの訪問
12月19日：こころオンラインサポートへの参加
1月9日：高知まんがＢＡＳＥの訪問
1月23日：お菓子教室の開催（健康栄養学部 講師：彼末　富貴、コーディネート：戦略広報課）
3月6日：楽器ワクワク体験会（ゲスト：高知リハビリテーション専門職大学吹奏楽部、
コーディネート：学生ボランティア）

（3）運営協議会の開催（年5回）

5月23日、8月1日、9月26日、12月5日、2月27日に開催した。

成果：

・2024年8月29日に高知県教育委員会と連携協定を締結し、本活動を開始した。当初は、1名からの利用開始であった。今年度は、年間をとおして3～8名の子どもたちが利用した。この1年間でみると、利用している子どもは、ほぼ継続的に通ってきており、居場所として安定してきている。
・利用する子どもたちのなかには、学生ボランティアやスタッフとの交流を通じて、興味・関心が広がったり、取り組みたいことを自己決定できたり、自己開示や意見が言えるようになったり、復学や進学につながったケースもみられた。
・大学内の施設を利用した取り組みでは、食堂や体育館、学生会館等を学生ボランティアと共に利用することで、より大学を身近に感じることができ、大学進学をイメージしたキャリアビジョン形成のきっかけとなった。
・イベント開催では、大学内の施設を活用した取り組みのみならず、高知まんがＢＡＳＥを中心に永国寺キャンパス周辺の社会資源の活用を図った。今年度は、心の教育センターが別開催しているこころオンラインサポートとも連携し、交流を図ることができた。
・個別の活動のみならず、フリータイムにカードゲームや体育館での軽スポーツ、さらにはイベント等をとおしたグループワークを展開したことにより、スタッフと子ども、学生ボランティアと子どもという関係だけでなく、子ども同士の関係性も醸成し、相互援助システムを形成することができた。
・子どもへの関わりを通じて、学生は学内での講義や演習で学んだ専門的な知識・技術を実際に活かし、心の教育センター職員からの助言・指導を得ながら体験する機会を持つことができた。その過程では、ソーシャルワーカーとして子どもの話を傾聴することや強みに気づく大切さ等、個別支援で必要なスキルを培うことができた。また他大学の部活動ともつながり、イベント企画をとおしてリンクワークを体験的に実践することができた。
・ＫＴＢの運営にあたり、心の教育センター内で定期的にチーム会を行い、所内での支援会や情報共有を行った。また運営協議会を定期的に開催し、運営体制について協議することで、両者の連携も強化され、イベントの実施等、活動の幅が広がり、支援の充実につながった。
・運営協議会により、戦略広報課を通じて学内リンクワークを行い、彼末富貴講師（健康栄養学部）に講師を依頼し、子どもや学生が自宅でも家族と共に簡単に調理できるスイートポテト作りを体験するお菓子教室を開催することができた。その際に、彼末富貴講師からシュークリーム作りのコツを聞き、実際に家で調理した子どももいた。

＜学生ボランティアのふり返り①＞　社会福祉学部３回生　田中美南未

私は、本活動をとおして、子どもとの関わり方について多くの学びを得ることができたと感じています。特に、自身の長所であるコミュニケーション能力を活かした関わりができた点が印象に残っています。当初は声が小さく、自分から話す様子はあまり見られなかった子どもも、積極的に声をかけ、関わりを続けていくなかで、徐々に声が大きくなり、自分のことを話してくれるようになりました。

この経験から、子どもに寄り添いながら、その意見や思いを尊重して関わることの重要性に気づくことができました。また、自身の関わりによって、子どもに前向きな変化がみられたことに、大きなやりがいと喜びを感じました。本活動をとおして得られた経験は、自身にとってとても有意義であり、今後も継続して取り組み、将来につなげていきたいと考えています。

＜学生ボランティアのふり返り②＞　社会福祉学部３回生　生田優衣

ＫＴＢでの活動をとおして、子どもたちとの関係が１回ではなく継続して関わるなかで少しずつ築かれていくものだと感じました。関わりを通じて意識したことには、単純に一緒に遊ぶなかで楽しさを感じてもらうだけでなく、この人いつも来てくれているなという安心感を持ってもらえるように、なるべく毎週継続して行くことを心がけました。その過程で、最初は口数が少なかった子どもも、回数を重ねるなかで自分から話してくれたり、表情や声色に変化がみられたりしたことが嬉しかったです。

また、得意なことをみせてくれる子どもとの関わりでは、ただ隣にいて「すごいね！」と褒めるだけでなく、自分も教えてもらいながら一緒にやってみることで、子どもたちがより主体的に関わってくれるようになった経験が印象に残っています。教える側として、楽しそうに披露してくれたり、学生にもできそうなことを提案してくれる姿から、好きなことや得意なことを発揮できる環境や、自分の趣味を一緒に楽しんでくれる大人がいるという関わりが、自己表現できるようになるきっかけになると感じました。

課題：

・今後も、多様なグループワークの展開により、子ども同士の相互援助システムの形成及び個々の成長を育む社会的自立に向けた支援が重要となる。そのためには、ヴァリエーションが豊富な活動の実施に向けたプログラム素材が必要となる。
・子ども個々に応じた支援の充実を図るため、支援シートの活用やケース会の開催等のあり方を、継続的に検討する必要がある。特に子どもたちのなかには、今後の進路を見据え、ＫＴＢ利用の終結が必要な場面が予想される。そのため終結局面の展開や、キャリアビジョン形成を含めたアフターフォローを見据えた支援等について、チーム会や運営協議会をとおして検討していく必要がある。
・学生ボランティアの定期的な関与も、今後の課題である。定期的に活動した学生は、自らの専門性向上や成長の糧となっていることを実感しており、学生への教育にも有意義な活動となっている。中心的な学生ボランティアは、利用する子どもの傾向から社会福祉学部の学生が適しているが、学生にとっては永国寺キャンパスへの交通手段、交通費、移動時間等の課題がある。予算配分を含めた解決が必要である。

その他：主な取材・見学等

４月 25 日：テレビ取材（ＲＫＣ高知放送）、高知市社会福祉協議会 見学
５月９日：高知大学地域協働学部 見学
７月４日：高知県教育委員会（教育長、人権教育・児童生徒課）見学
７月 25 日：高知新聞 取材
８月 23 日：高知県生涯学習支援センター主催「不登校・高校中退者・引きこもり支援進路相談会　高知県教育長 基調講演」登壇（学生４名）

9月19日：中土佐町社会福祉協議会 見学、鳥取県教育委員会 視察
9月19・26日：実習生（ソーシャルワーク実習）参加
10月3日：NHK 松山放送局ラジオ「ホッと！四国」出演（学生2名）
11月14日：室戸市スクールソーシャルワーカー　見学
11月28日：高知県教育委員会（人権教育・児童生徒課）見学
3月6日：社会福祉士　見学
3月13日：NHK 高知放送局アナウンサー　見学

参考ＵＲＬ：
高知県心の教育センター　https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310000/311902

ＫＴＢの紹介　https://www.u-kochi.ac.jp/site/re-design/kochi-teens-base.html

高知県立大学 note　https://note.com/uok_official/n/nd5beda3fac2d
https://note.com/uok_official/n/n0cb2c3bfbd4a
https://note.com/uok_official/n/n3849f12cf7b4

（4）プロジェクトの様子



①高知県教育長とともに（相談会にて）


②家族も一緒に夏祭りの開催


③お菓子教室（スイートポテト作り）


④楽器ワクワク体験会

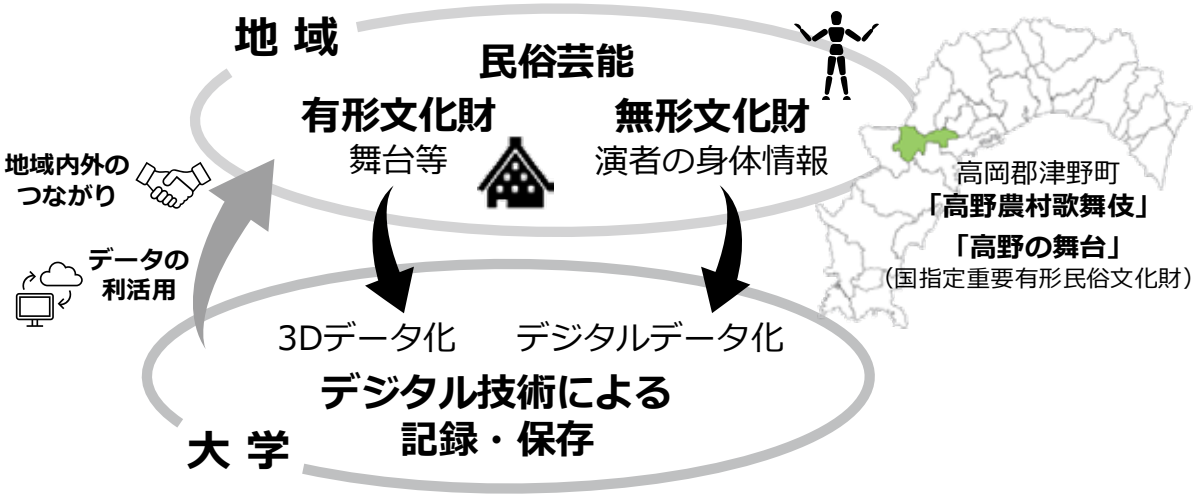
3　歴史文化を通じたまちづくり

プロジェクトメンバー（学内）　地域教育研究センター 准教授　高徳 希／プロジェクト全体の調整、
無形文化財のデジタルデータ化作業
総合情報研究センター 講師　根本 大志／有形文化財の 3D データ化作業

(1) プロジェクト概要・目的

高知県内には地域固有の民俗芸能が数多く残されており、古くからその土地で培われてきた文化や身体技法を人から人へと継承していくことで地域共同体を維持してきたが、少子高齢化や中山間地域の過疎化が進み、民俗芸能を守り継いできた地域の基盤が失われつつある。この現状をふまえると、これまでの保存形態（口伝、テキスト、写真、アナログ映像等）だけではなく、デジタル技術を用いた記録・保存と多様なコンテンツとしての利活用が必要になってくる。本プロジェクトでは、高知県内の民俗芸能（一例：高岡郡津野町「高野の舞台（三嶋神社境内）」「高野農村歌舞伎」）を対象として、3D スキャン技術を用いて有形文化財（舞台等）を 3D データ化およびモーションキャプチャ技術を用いて無形文化財（演者の身体情報）をデジタルデータ化すること、これらのデータの効果的な利活用について地域住民とともに取り組むことを目的とする。また、これらの歴史文化の記録・保存活動そのものが大学関係者と地域とのつながりを創出し、地域内の住民が固有の価値を再認識する契機にもなり得ると考えられる。

(2) プロジェクト概要図



「歴史文化を通じたまちづくり」令和 7 年度事業概要図

(3) 令和 7 年度のプロジェクト内容・成果

令和 6（2024）年度中に実施した高野農村歌舞伎保存会および津野町教育委員会との打ち合わせ、保存会および津野町教育委員会が保有するアナログ映像のデジタル化、保存会の動向確認をふまえ、令和 7（2025）年度の成果は以下に示すとおりである。なお、これらの成果については、令和 7 年度第 3 回社会的処方研究会においてリ・デザインプロジェクトの一つとして報告した。

①現地（津野町）にて高野農村歌舞伎保存会との座談会
農村歌舞伎の具体的な演目、主要動作の聞き取り（担当：高徳）

②各担当者によるデジタルデータ化の試行

当初の対象であった「高野農村歌舞伎」は本格的な活動開始時期の目処が立っていなかったため、各々の研究手法を用いたデータ化の試行を実施

有形文化財（担当：根本）

三嶋神社境内にある「高野の舞台」の撮影と 3D 化を試みた。高野の舞台は、日本で唯一現存する鍋蓋上廻し式の廻り舞台であり、有形民俗文化財にも指定されていることから、建築・民俗文化の両面で高い意義をもつ。そこで、本研究ではこの高野の舞台を対象に、撮影した動画および画像をもとにガウシアンスプラッティングを用いた 3D モデルの試作を行った。3D 化によって、建造物やその周辺空間を自由視点から閲覧できるようになる。老朽化が進む文化財を高精細なデジタルデータとして保存することは、次世代に向けた情報基盤の整備にもつながると考えられる。図①は試作した高野の舞台の 3D モデルである。実写真に近い質感での表現が可能であり、図②はそのモデルを構成するスプラットの状態を示している。スプラットは位置・形状・透明度・色情報をもつ多数の要素から成り、対象物の外観を再現している。

無形文化財（担当：高徳）

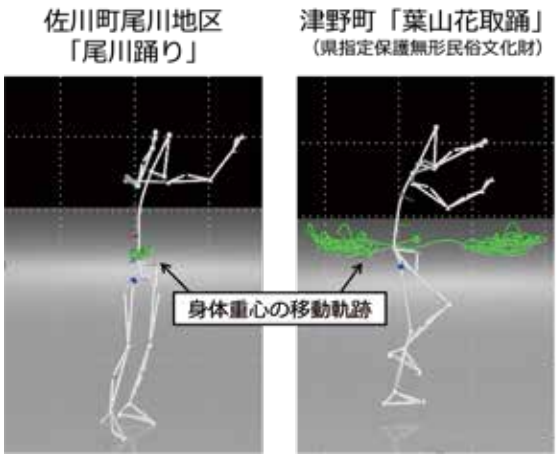
類似の民族芸能として、津野町「葉山花取踊」および佐川町尾川地区「尾川踊り」を対象とした。身体各部位の位置情報を数値化するモーションキャプチャ技術を用いて、演者の動作全体を撮影した映像から得られた空間的（高さ、移動量など）および時間的（速度、加速度など）指標をもとに印象を左右する動作要素（定量的な特徴）について検討した。図③は数値化した身体各部位の位置情報から作成した各演者のスティックピクチャーである。



図①試作した高野の舞台の 3D モデル



図②試作した 3D モデルを構成するスプラットの状態



図③各演者のスティックピクチャー

4 「共生社会の未来を描く『土曜の永国寺カフェ』（認知症カフェ）」

プロジェクトメンバー（学内） 社会福祉学部 教授　矢吹 知之／全体統括・企画調整・運営　学部生 12 名
プロジェクトメンバー（学外） 上街・小坂坂地域包括支援センター／企画運営
高知市基幹型地域包括支援センター／企画運営
高知市社会福祉協議会／企画運営
サードプレイスすろー／企画運営
高校生ンボランティア／運営

(1) プロジェクト概要・目的

2024 年 1 月に施行された「共生社会を実現するための認知症基本法」は、「認知症の有無を問わず、すべての国民がその個性および能力を最大限発揮し、相互の人格と多様性を尊重しつつ協働・共生する活力ある社会」の実現を目的としている。本事業は、高知市民による認知症への主体的理解の促進、および認知症当事者の社会参加機会の創出を図るものであり、関連施策推進の拠点的役割を果たすことを意図している。また、本事業の中核を高知県立大学が担うことで、地域社会資源との連携及び先導モデルとしての活動展開を目指している。

(2) プロジェクト概要図



(3) 令和 7 年度のプロジェクト内容・成果

令和 7 年度は、新たな参加者、連携先、見学者が訪れており地域そして全国に「土曜の永国寺カフェ」が周知されている。

年間開催回数　10 回
年間参加者数　述べ 780 人
年間見学者数（県内 20 団体、県外 15 団体）
連携団体数　　6 団体
新規連携団体　障害者就労支援事業所（5 ヵ所）放課後等デイサービス 1 ヶ所、介護保険事業所、権利擁護関係団体、警察署、商店街の商店等

（4）プロジェクトの様子



①学生ボランティア



②障害者就労支援 B 型事業所



③カフェの様子



④ミニ講話の様子



5　永国寺はらっぱフェス

プロジェクトメンバー（学内）　社会福祉学部 助教　玉利 麻紀
文化学部 教授　白岩 英樹
社会福祉学部 准教授　河内 康文
プロジェクトメンバー（学外）　高知県立精神保健福祉センター チーフ（相談支援担当）　横田 智穂
高知市社会福祉協議会　小谷 真太郎
ヒューマンライブラリー高知　松岡 健一　他

(1) プロジェクト概要・目的

永国寺はらっぱフェスとは（概要）

永国寺はらっぱフェスは「永国寺キャンパス地域交流広場（はらっぱ）を中心に、さまざまなイベントを通して、自由な空間で、いろんな人と一緒に“元気の種”を見つけ、たねまきをするプロジェクト」として誕生し、令和７年２月にプレ開催、５月から本格的に始動した。その後、基本的に、月一回、第三土曜日の午後に、継続して場をひらいている。

永国寺はらっぱフェスでは、いろいろな世代や背景、専門性をもつ教職員や学生、ボランティアスタッフが集まり、気軽に立ち寄りたくなるような週末イベントと、メンタルヘルスに関するミニ講話やヒューマンライブラリー等を企画している。そして、地域の人たちと精神的な困難を経験して生きてきた人たちとが自然に交流できる拠点を高知に創出し、メンタルヘルスへの関心を育み、つながりを生み出すことを目的としている。この取り組みが目指すのは、今までのメンタルヘルス観を「はずして、つくって、やぶって、かいて」、リ・デザインしていくことである。

企画化の経緯

令和６年度「過労死等の労災補償状況」においても、統計開始以来、精神障害による労災認定件数が初めて1,000件を超えた。そのほかにも、ここ数年、メンタルヘルス不調による休職者は増加傾向にあり、特に若年層で顕著であることがデータで示されている。

したがって、メンタルヘルスは身近な課題であると言える。にもかかわらず、未だ口外することが憚られる分野でもある。一方で、メンタルヘルスや精神疾患は他人事、と関心が全くなかったり、忌避感を抱いたりしている人たちもいる。そこには見えない分断があり、精神障害や発達障害に対する偏見が軽減されないというジレンマはなかなか解消されずにいる。

この分断を越えて、まずは「共にある」場がつくれないか？メンタルヘルスに関心を抱き、メンタルヘルスについて語っても良いと感じられる場が必要ではないか？そして、地域共生社会の実現へ大学として寄与することができないだろうか？

そこで、チームメンバーで話し合いを重ね、障害の有無に関わらず、メンタルヘルスへの関心の高低に関わらず、老若男女いろんな人たちが集まれる場を作ろう、ということになった。多様な人たちの交流を目的としているため、メンタルヘルスはあえて前面に出さず、気軽に立ち寄れるはらっぱ企画をして、生協内では自然にメンタルヘルスに関する情報に触れ、多様な背景のある人たちが無理なく出会い、いつの間にか関心アップにつながる空気をつくりたい、というアイディアをチームメンバーで共有した。

目的

以上から、永国寺はらっぱフェスの目的は次のとおりである。

精神的な困難（メンタルヘルス）の問題は自分に関係ないと思っている人にも積極的にプロジェクトイ

ベントへ参加してもらい、メンタルヘルスに関連する人・モノ・事に自然な形で触れることを通して、精神的な困難を経験してきた人とのつながりや「共に在る」場を創出する。これにより、誤解や偏見を持たれやすい人に対して、意識・無意識を問わずに抱いている偏見や忌避感が軽減され、メンタルヘルスへの理解や関心が育まれる機会を提供すること。

プロジェクト実施体制

企画、運営、実施

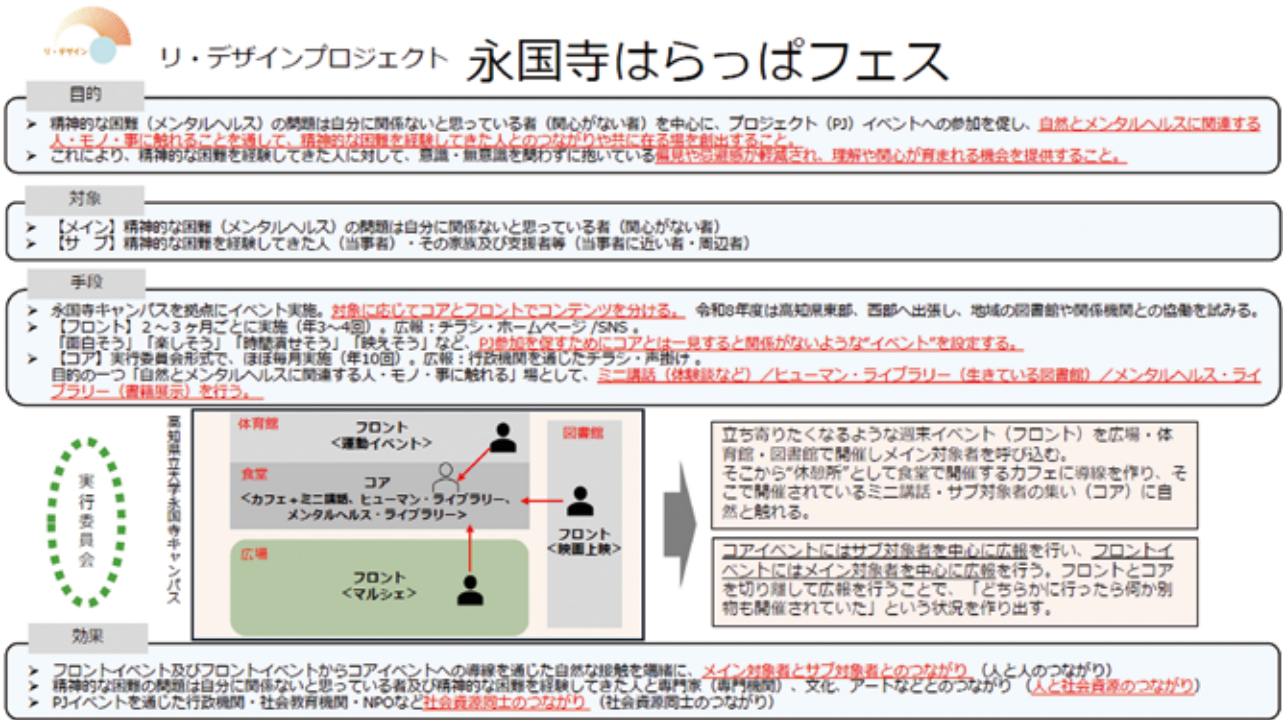
永国寺はらっぱフェス実行委員会

（実行委員会の構成）高知県立大学、高知県立精神保健福祉センター、高知市社会福祉協議会、ヒューマンライブラリー高知

協力団体

- 高知県：精神障害者ピアサポーター派遣事業、ヤングケアラー派遣事業
- 一社）りぐらっぷ高知
- アートセンター画楽
- 高知市保健所
- NPO 法人 地域文化計画
- リカバリーカレッジ高知
- 医療法人おくら会　芸西病院
- カフェサークル caféier（カフェ）
- 十月（カフェ、ライブラリー）
- 小松家 with（ライブラリー）

（2）プロジェクト概要図



（3）令和７年度のプロジェクト内容・成果

開催実績

令和７年度は９回開催し、令和６年度２月のプレ開催１回を含め、計 10 回実施した。各回の企画内容や参加者数、協力者等の情報は表１を参照いただきたい。参加者総数等は下記の通りであった。

- 累計参加者数：356 人（プレ開催から 10 回分を合計）
- 平均参加者数　35.60 人 (SD 15.52)

回	開催日	参加者数（人）	テーマ	はらっぱ企画	トークセッション（テーマ・ゲスト）	カフェ、ライブラリー協力
プレ	2月8日	63	はずしてつくってやぶいてかいて	ダンボールアート迷路づくり	創る人と作る人 上田祐嗣（アートセンター画楽）＆ 白岩英樹	カフェサークル caféier
第1回	5月25日	42	さあ、旗あげだ！じゃあ、旗つくろう！	旗づくりワークショップ	なぜ、一緒に旗づくり？ 上田祐嗣（アートセンター画楽）＆ 玉利麻紀	カフェサークル caféier
第2回	6月22日	28	ピアサポーターってなんだ？	なし	ピアサポーターの力 上甲由佳（高知市保健所）＆ けん（精神障害ピアサポーター）	
第3回	7月19日	28	ひきこもり！	なし	日常がひきこもり 山崎正雄（高知県立精神保健福祉センター）＆ つきゆび（ひきこもりピアサポーター）	十月
第4回	9月20日	43	本！	なし	ケアと読者と当事者と 青木海青子（私設図書館ルチャ・リブロ）＆　白岩英樹	
第5回	10月18日	44	音楽♪	カポエイラ体験バンド演奏	非言語のコミュニケーション 中村茂生（地域文化計画）、徳永洋平（カポエイラバトゥーキ高知）、パンダ計画、白岩英樹	カフェサークル caféier
第6回	11月15日	19	つながりづくり	（ミニ四駆）	社協こそこそ話 小谷信太郎（高知市社会福祉協議会）＆玉利麻紀	
第7回	12月20日	13	元気のたねを見つけよう	なし	リカバリーカレッジ高知との共同開催 中土佐町民会館（高岡郡）でのお出かけ企画	小松家with
第8回	2月21日	51	出会い！	（モルック）	型にはまらない二人のつながりづくり 山崎正雄（高知県立精神保健福祉センター）＆公文一也（芸西病院）	カフェサークル caféier
第9回	3月21日	25	諦めなくていい。生きていていい。	（クリエイティ部）	記憶障害者である私のニーズと私の使命 吉良正輝（ナーシングケアホームおとく）＆ 横井輝夫（高知県立大学名誉教授）	

表１　令和７年度開催実績

- 令和６年度のプレ開催を含む
- 上記日程の 13:30-16:00 で実施した。
- 会場は永国寺キャンパス（12 月の回のみ、中土佐町で実施）

参加者の感想

規格分類	楽しく過ごせた	元気になれた	自分に気づいた	他者と交流できた	また参加したい
制作・アート	6.78（0.37）	6.74（0.31）	6.62（0.48）	5.81（0.57）	7.64（0.45）
体験・身体性	6.96（—）	6.89（—）	6.38（—）	5.35（—）	6.78（—）
制度・対話寄り	7.36（0.26）	7.33（0.24）	7.16（0.48）	6.54（0.30）	7.64（0.33）
全体平均（参考）	7.14（0.37）	7.10（0.36）	6.89（0.52）	6.16（0.59）	7.52（0.44）

表２　企画分類別アンケート得点一覧表（平均値、標準偏差）

参加者から得られたアンケートの平均値を、企画の特徴によって分類したのが表２である。

今回は群間比較の統計検定は行っていない探索的分析ではあるが、全体平均と比較すると、制度・対話寄りの回では「自分についての気づき」や「他者との交流」が相対的に高く、制作・アートや体験・身体性では交流が控えめである。これは、参加の仕方に幅をもたせた場の設計が反映された結果と考えられる。

「また参加したい」という継続意向は一貫して高く、永国寺はらっぱフェスが参加者にとって肯定的な体験となっていることが示唆される。一方で、「他者との交流」は平均値が低めでばらつきも大きく、交流が強制されない場の設計が反映されていると考えられる。これは、０次予防としての「居てもよい場」という特徴と整合的であると考えられる。

次に、参加者数の多い回と少ない回における自由記述内容を検討したところ、下記のような感想が多く得られた。

参加者数が多い回（例：10 月・44 人）

・音楽や体を動かす企画が楽しく、自然と周りの人と話すことができました。
・メンタルヘルスの話も、身構えずに聞けてよかったです。

参加者数が少ない回（例：11 月・19 人）

・人数が少なかった分、一人ひとりの話をじっくり聞けました。
・安心して話せる雰囲気があり、自分のことも考える時間になりました。

したがって、参加者数の多い回では、にぎやかさや偶発的な交流が生まれやすく、参加者数の少ない回では、落ち着いた雰囲気の中で深い対話が生まれていることが推測された。

永国寺はらっぱフェスでは、さまざまな背景を抱える人たちが「共にある場」を創出することを重視している。そのため、参加者数の多寡によって価値が上下するのではなく、異なる質の『関わり方』が立ち上がっている点が重要だと考えられる。

メディア等への掲載

令和 7 年度は以下に情報が掲載された。

・RKC 高知放送（2026/2/17 放送）『自分の経験が同じように苦しむ誰かの心を支えられるかもしれない』ひきこもり・うつ病・パニック障害の経験者が語る
（RKC 高知放送の公式 HP）https://news.ntv.co.jp/n/rkc/category/society/rcdcb1422ef908457c9da5cf643c71d547
（RKC 高知放送の公式 YouTube）https://youtu.be/xSeHpYLHtWc?si=Swpvs3yaIOK4e-UX
・高知家地域共生社会ポータルサイト【取組紹介 Vol.16】多様な人が集まり、つながる場づくり。高知県立大学「永国寺はらっぱフェス」の取り組み｜高知家地域共生社会
（前編）https://kochi-kyosei.pref.kochi.lg.jp/kyosei/page/dtl.php?ID=280
（後編）https://kochi-kyosei.pref.kochi.lg.jp/kyosei/page/dtl.php?ID=281

課題と展望

このプロジェクトは、メンタルヘルスに関連する人・モノ・事に自然な形で触れることを通して、精神的な困難を経験してきた人とのつながりや「共に在る」場を創出することを目的として行ってきた。参加者のアンケートからは、メンタルヘルスがテーマでも話題が重くならず、「また来たい／誰かを誘いたい」という感想が散見された。また、初対面同士の会話や対話が行われる場になっていることも確認できた。

さらに、初年度の取り組みを通して、開催回やテーマによって参加者数の変動や、その参加の仕方に変化があることもわかってきた。ここからは、参加者数という一つの軸を基準に一喜一憂するのではなく、その回のテーマに沿ったゴールを設定する視点と、年間を通してのプログラム設計に活かす視点が必要であることが見えてきた。

このように、実践によって発見できた部分はあったが、一方で課題も具体化されてきた。例えば、「誤解や偏見を持たれやすい人に対して、意識・無意識を問わずに抱いている偏見や忌避感が軽減され、メンタルヘルスへの理解や関心が育まれる機会を提供すること。」という目標が達成できているかどうかは未検証であり、研究としての整理と検証が必要である。また、この事業の継続性、はらっぱを活用した企画

の実施やバリエーションの検討、運営面でのスキルアップ等、運営面での課題に取り組む必要もある。

この一年、チームメンバーと企画を実施し、検討を重ねるごとに、永国寺はらっぱフェスが「特異×得意」の場になっているという輪郭がはっきりしてきた。このプロジェクトにおいて、精神疾患や発達障害を抱える人たちの経験や存在が必要不可欠な要素となっているのはもちろんであるが、各スタッフやチームメンバーが特異さと得意さを存分に活かすことが、多様な背景を持つ人たちの出番を作り、「共に在る」ことや交流、つながりを生む場面に幾度となく遭遇した。この輪郭を大切に、今後は「特異×得意」が発揮できる場となるよう、チームメンバーと方向性を改めて確認しながら展開をしていきたい。

この企画を0から作り、共に形にしてきたチームメンバーや関係者のおかげで、永国寺はらっぱフェスは初年度の開催を無事に終えることができた。心からの感謝と敬意を伝えたい。次年度は、今年度抽出された課題に取り組みながら、より良い形での協働と継続を探索し、高知県におけるメンタルヘルス向上や、地域共生社会の実現へ寄与していきたいと考えている。

(4) プロジェクトの様子



①はらっぱでのダンボールアートの様子



②トークセッションの様子



③ヒューマンライブラリーの読書タイム



④カフェサークル等が、美味しいコーヒーを淹れてくれる

6　みんなでサロン

プロジェクトメンバー（学内）　健康栄養学部 教授　渡邊 浩幸／統括
健康栄養学部 講師　隅田 有公子、竹本 和仁／実施者
健康栄養学部 助教　井治 賢希、杉本 拓海／実施者
健康栄養学部 助手　彼末 富貴／実施者

(1) プロジェクト概要・目的

令和 6 年度より高知県立大学のリ・デザイン プロジェクトとして「みんなでサロン」の活動を開始した。食を通じて地域のコミュニティを活性化し、地域で食や健康課題を共有し合う場所づくりを目指している。活動は高知県立大学健康栄養学部の学生・教員が食や健康に関連する団体と連携して取り組んでいる。食生活相談や料理教室など、食・健康に関する情報・知識を気軽に得られるような場所づくりを行っている。

(2) プロジェクト概要図



(3) 令和 7 年度のプロジェクト内容・成果

令和 7 年度は 7 月 5 日に高知県立大学永国寺キャンパスで食生活相談（土曜日の永国寺カフェ、つながる保健室と同時開催）を、10 月 25 日にコープかもべ店で健康サロンを開催した。また、6 月 21 日に第 10 回日本栄養改善学会四国支部学術総会で、学生が令和 6 年度の活動について実践活動報告を行った（発表題目：食でつながる集いの場づくりを目指す実践活動報告、発表者：健康栄養学部 3 回生　田中千尋さん）。

7 月 5 日の食生活相談では、食育 SAT システムを用いた食事チェックに 19 名、身体チェックではヘモグロビン推定値チェックに 16 名、体組成測定に 11 名、個別食生活相談に 3 名が参加した。食生活相談には健康栄養学部 3 回生 10 名が参加し、教員と共に参加された地域の方の食事の栄養バランスの確認や身体状態の確認を行った。

10 月 25 日の健康サロンでは、「乳和食」をテーマにした健康教育（集団教育）と料理教室、体組成測

定や食育 SAT システムを用いた食事チェック、個別食生活相談を行った。乳和食は味噌や醤油などの調味料に、コク味や旨味をもつ牛乳を組み合わせることで、食材本来の風味や特徴を損なわずに食塩量を減らし、美味しく和食を楽しむ調理法で、不足しがちなカルシウムやたんぱく質、減塩効果が期待される。

当日は健康教育に 31 名、料理教室に 15 名（午前 8 名、午後 7 名）、食事チェックに 23 名、体組成測定に 13 名、個別食生活相談に 8 名が参加した。料理教室は健康栄養学部 2 回生 9 名が参加し、料理教室で使用するレシピの考案、料理教室の準備、当日の運営を担当した。また、健康教育には健康栄養学部 3 回生 7 名が参加し、健康教育の資料の作成、当日は教員の指導の下、健康教育の実施を担当した。当日実施したアンケートでは、乳和食を「知らなかった」と回答した人が回答者の 8 割を上回り、健康教育や料理教室は「参考になった」「まあまあ参考になった」と全員が回答していた。また、料理教室のメニューについても「美味しかった」「まあまあ美味しかった」と全員が回答し、料理教室を通じて今後の牛乳の摂取量が増えると思うと約 9 割が回答していた。活動によって、地域の人々の新たな食に関する知識の習得に寄与したと考える。

今後も活動を通じて、食を通じた地域のコミュニティを活性化や地域の食や健康課題を共有し合う場所づくり、学生の実践力の向上を目指したい。

（4）プロジェクトの様子



①７月５日　食生活相談の様子



②７月５日　食生活相談の様子



③10 月 25 日　健康教育の様子



④10 月 25 日　食事チェックの様子



⑤10 月 25 日　料理教室の様子



⑥10 月 25 日　料理教室の様子





7　親子で学ぶ「いのち」と「性」：BEP カードで始める性教育サロン

プロジェクトメンバー（学内）　看護学部 助教　徳岡 麻由／プロジェクトリーダー・企画運営統括
看護学部 教授　久保田 聰美／プロジェクト企画・調整・運営
看護学部 准教授　中井 寿雄／プロジェクト企画・調整・運営
看護学部 助教　塩見 理香／プロジェクト運営

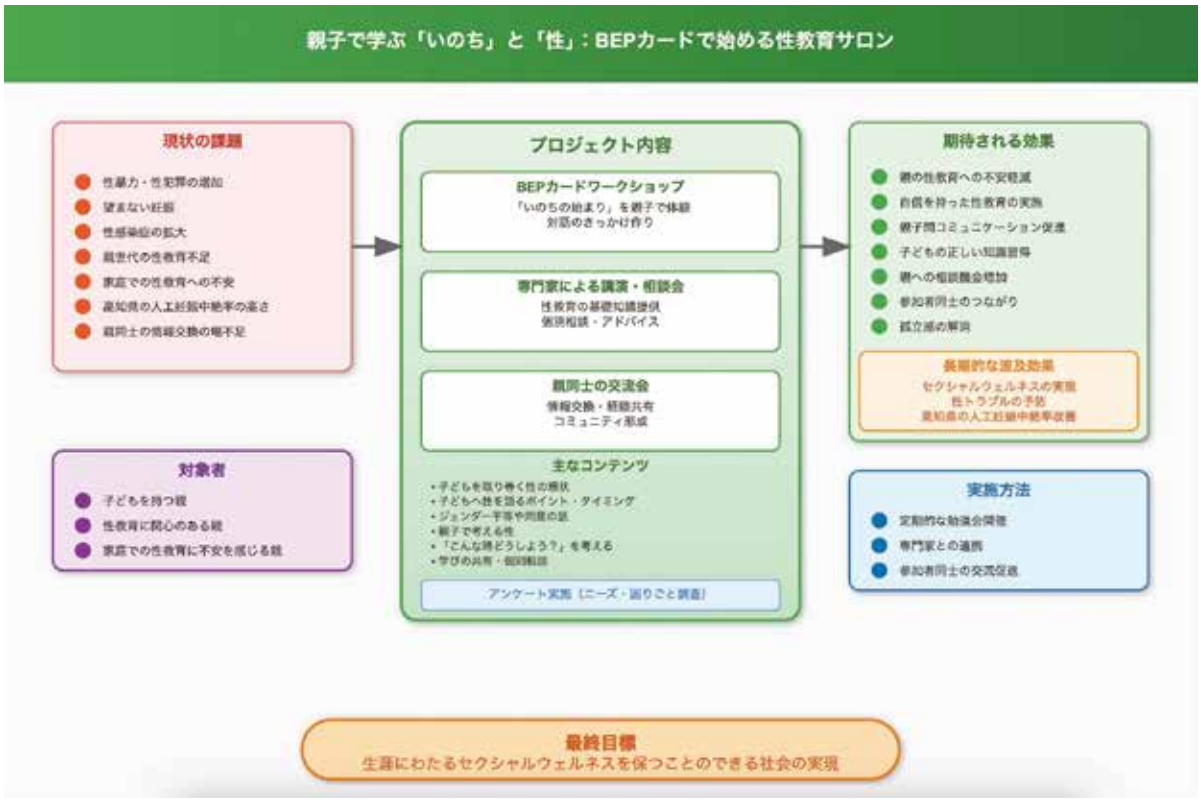
プロジェクトメンバー（学外）　児童家庭支援センターこうちみその 助産師　中村 水苗／プロジェクト運営
高知県・高知市病院企業団立　高知医療センター 助産師／関正節／プロジェクト運営
一般社団法人高知県助産師会 会長 助産師　宗石 きみ子／プロジェクト運営

(1) プロジェクト概要・目的

本プロジェクトは、親自身が性について学び直す場を提供することを基本とし、親子間のコミュニケーションの促進および子どもの発達段階に応じた性教育に対する理解を深めることを通じて、子どもが生涯にわたるセクシュアルウェルネスの土台を築くことを目的とする。

具体的な活動として、「Beans Education Project Card」（BEP カード）を活用し、親と子が共に、あるいは親が主体となって「いのちのはじまり」について学ぶ定期的な会を開催する。これらの会は、単なる知識の提供にとどまらず、参加者同士の交流や専門家への相談の機会を設けることで、親が日常生活の中で自然に性について子どもに伝えられるよう、継続的なサポートを目指すものである。さらに、子どもの発達段階に応じた包括的性教育のコンテンツを紹介しながら、家庭でのコミュニケーションのあり方についてともに考え、理解を深める機会として位置づけている。

(2) プロジェクト概要図



(3) 令和７年度のプロジェクト内容・成果

本年度は保育園と小学校それぞれに出向き、親子、あるいは親だけが集まる場において、BEP カードを用いていのちのはじまりを体感し、幼児、児童それぞれの発達段階に応じた包括的性教育の内容を伝えた。保育園では、4 ～ 5 歳児約 20 人と保護者を対象としていのちのおはなしを展開した。BEP カードを見た幼児が「ちっちゃい！」「見えた！」「お母さんのおなかの中におった」と、おなかの中ではじまる小さないのちを理解していた。出産劇では、いのちが大事に育まれ、望まれて生まれてきたことを伝え、誕生日のことを親子で自然に話す様子が見られた。その後、保護者が集う場においては、幼児期から家庭でどのように性を伝えるか、なぜ幼児期からはじめるべきかをテーマに講演し、特別なことではなく、日常の中でできる性養育を伝えた。保護者からは「少なからず抵抗感があったが、言葉がけひとつで変わるならやっていこうと思う」「難しく考える必要がないことが分かった」などの声が聞かれ、家庭で性を伝えていくことに理解が得られた。

小学校では､6 年生の生徒に BEP カードを使用した教育を実施し､学校のニーズを踏まえて「同意」や「境界（バウンダリー）」といった概念をゲームで理解できるよう働きかけた。人によって考えや選択はさまざまであることや､些細なことでも必ず相手の「いいよ」という同意をとってから行動すること､「いやだ」の意思表示にはすぐに応じることをわかりやすく伝えた。児童はゲームを通じて世の中には多様な考え方があること、自分の考えが必ずしも相手と同じではないこと、そしてそれを受け入れる姿勢が大切であることを学んでいた。保護者向けの講座では、30 人の保護者に包括的性教育の概念や子どもたちが学んでいること、家庭で簡単にできる性のコミュニケーションなどを伝え、「思春期で不安だったが意識して取り組んでいきたい」「少しのことでも変わるんですね」といった声が聞かれた。

本年度は活動開始から数か月であったため、まず実践の場を広げることを優先したが、次年度は活動の幅を広げて、出前講座やサロンを定期的に開催する中で保護者へのアンケートを実施し、保護者の家庭での性教育の実態を明らかにすることで実践につなげていきたい。

(4) プロジェクトの様子



① BEP カードを用いた教育（保育園）



②出産劇の様子



③ BEP カードを用いた教育（小学校）



④保護者への性のおはなし



8　フレイルの多面性に着目した生活習慣とフレイルの関連の検討
―フレイル予防からはじまる健康のリ・デザインプロジェクト―

プロジェクトメンバー（学内）　看護学部 教授　立木 隆広 / プロジェクトリーダー、統括、データ解析
健康栄養学部 准教授　島田 郁子 / 研究及び調査計画、調査指揮監督
看護学部 助教　中井 あい / 調査遂行、研究事務局
看護学部 助教　加藤 昭尚 / 調査運営、研究事務局 , データ解析

プロジェクトメンバー（学外）　高知学園大学健康科学部 准教授　廣内 智子 / 測定の精度管理、調査遂行
高知学園短期大学専攻科 地域看護学専攻 講師　高橋 真紀子 / 調査計画、調査運営
愛知医科大学看護学部 講師　上坂 真弓 / 測定の精度管理、調査遂行
社会医療法人健和会 健和会病院 理学療法士　戸崎 精 / 測定の精度管理、調査運営

(1) プロジェクト概要・目的

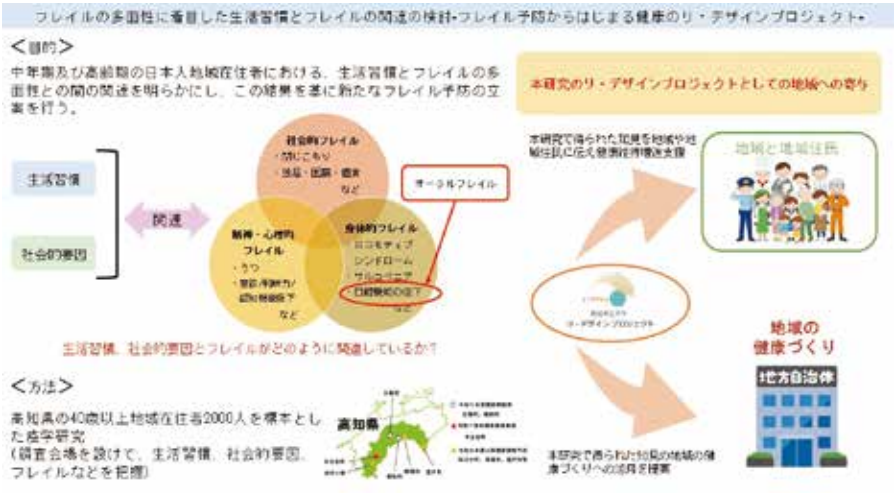
世界的に高齢化が進む現代、フレイル（frailty）は最も重要な健康問題の一つとなっている。近年、フレイルは、身体的フレイルのみならず精神的・心理的フレイル、社会的フレイルといった多面性があるものとして捉える考えが浸透してきている。生活習慣の悪化は、フレイルのリスク要因として注目されている。しかし、生活習慣とフレイルの多面性（Multidimensional frailty）の間の関連についてのエビデンスは必ずしも十分でない。

さらに、フレイルはこれまでに高齢者に起こる健康問題と捉えられてきているが、中年者の間でもある程度存在することが報告されている。すなわち、高齢期のフレイル予防と同時に中年期のフレイル予防も必要とされる時代に突入しており、そこに必要なエビデンスの創出と構築は喫緊の課題となっている。

そこで本プロジェクトでは、中年期と高齢期の地域在住日本人を対象に生活習慣とフレイルの多面性（Multidimensional frailty）との間の関連を検討することにした。さらにこの検討結果を基に新たなフレイル予防の立案を行うことを目的とした。

高知県では、「日本一の健康長寿県構想」の下で幾つかの事業が進められている。その一つとして「健康寿命の延伸に向けた意識醸成と行動変容の促進」があり、その中で取り組んでいるのがフレイル予防の推進である。日本一の健康長寿県構想の第５期 Ver.2 でのフレイル予防の推進としてフレイルを早期発見・介入をあげているが、フレイルの多面性を見落とさずに早期発見・介入することが必要となってくる。本プロジェクトは、この点や今後対峙する問題に必要となる基盤情報を先駆的に検討する挑戦的な研究であり、本研究成果をもって日本一の健康長寿県構想に寄与することも目的としている。

(2) プロジェクト概要図



（3）令和７年度のプロジェクト内容・成果

本プロジェクトは、地域在住日本人において、生活習慣とフレイルの多面性（Multidimensional frailty）との間の関連を明らかにするために、高知県在住の地域在住日本人を対象にして、フレイルの多面性を把握するために身体的フレイル、精神的・心理的フレイル、社会的フレイル、オーラルフレイル、生活習慣、社会的要因などを中心に把握している。

令和７年度は、高知県高岡郡中土佐町の 40 歳以上の地域住民日本人を対象に調査を行った。中土佐町は海岸地域、中心地域、山間地域と幅広い地域で構成されているため、それぞれの地域で調査を行った。対象者は 86 人であった。

本プロジェクトは令和７年度の途中から始動したものである。本プロジェクトの目的を達成するためには、令和８年度以降も他の地域で調査を実施しデータの蓄積が必要となる。

（4）プロジェクトの様子



①調査会場の様子

9　地域共生学研究機構シンポジウム

令和７年度高知県立大学　地域共生学研究機構シンポジウム
「共生社会の未来を描く認知症カフェ」



開催日時　令和７年６月 14 日 (土)　14 時～ 16 時
開催場所　高知県立大学 池キャンパス共用棟大講義室
対　　象　どなたでも
参加者総数　173 人

（1）事業概要

令和７年度第１回の開催は、「共生社会の未来を描く認知症カフェ」をテーマに、「リ・デザインプロジェクト」の土曜の永国寺カフェについて１年間の活動を通して得られた気付き、成果、今後の計画などを広く県民の皆様と共有するためのシンポジウムを開催した。

（2）活動成果・評価

第１部　講演　矢吹 知之（社会福祉学部 教授）

「共生社会の未来を描く認知症カフェ」

認知症カフェを仕掛ける意義や、カフェの持つ「力」や魅力について、「土曜の永国寺カフェ」の活動を例にして講演を行った。

第２部　シンポジウム

登壇者：廣田 淳也 氏（上街・高知街・小高坂地域包括支援センター）
　　高橋 英美 氏（サードプレイスすろー）
　　出嶋 夏奈（社会福祉学部 ４回生）
　　矢吹 知之（社会福祉学部 教授）
進　行：田部 佳枝 氏（高知市基幹型地域包括支援センター）
　　宇都宮 千穂（地域教育研究センター長）

「共生社会の未来を描く認知症カフェの在り方について」

認知症カフェを立ち上げた経緯やメンバーとして参加したきっかけ、運営する中での成果や課題、学生視点での学びなど、それぞれの視点からの意見が語られた。

〇参加者アンケート

「認知症カフェが持つ力、共生社会にどのような影響があるのか学ぶことができた」、「カフェが居場所づくりに留まらず、地域とのつながりやゆるやかな学びを提供し、その積み重ねによって共生社会に向かっていく流れが分かった」、「心の問題を医療でなく、地域で問題に向き合うその場所が、認知症カフェなのかと理解しました」、「学生さんの参加があることで新たな感覚が芽生えた、学生さんの力がすごい」などの感想があり、認知症カフェの活動の意義や運営者の話を聞くことで、参加者自身の活動への振り返りや気付きを得られたことが伺えた。

（3）シンポジウムの様子



①社会福祉学部 教授　矢吹 知之



②会場の様子



③登壇者



④シンポジウムの様子



令和７年度高知県立大学　地域共生学研究機構シンポジウム
「みんなでつくる地域共生社会～地域活動の持続的発展と関係構築の秘訣を探る～」



開催日時　令和７年 11 月７日（金）14 時～ 16 時 30 分
開催場所　高知県立大学 池キャンパス共用棟大講義室
対　　象　どなたでも
参加者総数　68 人

（1）事業概要

令和７年度第２回の開催は、「みんなでつくる地域共生社会～地域活動の持続的発展と関係構築の秘訣を探る～」をテーマに、地域に根ざした活動を推進し、持続可能な地域活動の運営を目指す方を対象に、その具体的な方法論と実践知を共有することを目的として開催した。

（2）活動成果・評価

第１部　講演　松崎 亮 氏（三股町社会福祉協議会 コミュニティデザインラボ 所長）
「「場の力」でつむぐ新しい福祉のカタチ」

孤立化が進む現代には、従来の支援に加え、暮らしの動線上に「新しい縁」を面的に創り出す「多層的な関係性」の構築が必要性となる、住民の「やりたい」と「困った」を掛け合わせたコミュニティデザインラボで行っている「気ままプロダクツ」や「夜学校」を紹介した。人々が繋がることで地域に多様な「場」が生まれ、そこから支援の機能も生まれるプロセスを紹介するとともに、人々の意欲や関心を引き出す「場」を整える重要性について講演した。

第２部　事例発表およびディスカッション

・事例発表
　発表者：健康栄養学部 講師　隅田 有公子（みんなでサロンプロジェクト）
　　社会福祉学部 教授　西梅 幸治（こうちティーンズベース）
・ディスカッション
　登壇者：松崎 亮氏（三股町社会福祉協議会 コミュニティデザインラボ 所長）
　　隅田 有公子（高知県立大学 健康栄養学部 講師）
　　西梅 幸治（高知県立大学 社会福祉学部 教授）
　　濱田 真凛（高知県立大学 社会福祉学部 ３回生）
　　生田 優衣（社会福祉学部 ３回生）
　　田中 美南未（社会福祉学部 ３回生）
　進　行：久保田 聰美（健康長寿研究センター長）

第２部では、本学の「リ・デザインプロジェクト」の、「みんなでサロンプロジェクト」および「こうちティーンズベース」の活動について、プロジェクトメンバーがそれぞれの成果と課題を発表した。

その後のディスカッションでは、会場の参加者から「活動の継続性」に関する質問が挙がった。松崎氏からは、「人間は変化する生き物。頑張って活動を固定化・継続させるよりも、その時々のニーズや興味

に合わせて変化し続けることを許容する文化が大切」、「活動の中で生じる摩擦や困りごとを「しんどい」で終わらせず、次のプロジェクトのヒントとして「面白がる」姿勢が周囲を巻き込む最大のエネルギーとなる」とアドバイスを送るなど、会場全体で学びを深める時間となった。

（3）シンポジウムの様子



①松崎 亮 氏



②健康栄養学部 講師　隅田 有公子



③社会福祉学部 教授　西梅 幸治



④ディスカッションの様子



10　社会的処方研究会

第１回　社会的処方研究会
「健やかで幸せに老いるために－高知県津野町のニーズ調査を参考にして」

※ FD 専門部会と共催で開催



開催日時　令和７年５月 14 日（水）13 時 30 分～ 14 時 50 分
開催場所　高知県立大学 池キャンパス共用棟大講義室
対　　象　学内関係者
参加者総数　57 人

（1）事業概要

令和７年度第１回の開催は、本学と高知県津野町で締結している「地域共生社会に向けた連携協定」に基づき実施している、津野町住民とその家族のウェル・ビーイング向上に向けた研究活動について、分析結果や今後、高齢者の健康やウェル・ビーイングの向上を図るための取り組みを学内で共有することを目的として開催した。

（2）活動成果・評価

講演　甲田 茂樹学長

「健やかで幸せに老いるために　ー高知県津野町のニーズ調査を参考にしてー」

本学と高知県津野町が締結した「住民のウェル・ビーイング向上を目指した連携協定」に基づき、津野町「介護予防・日常生活圏域ニーズ調査」の解析結果を報告した。

解析の結果、ボランティアや趣味のグループ、収入を伴う仕事などの「地域活動」へ積極的に参加することが、身体活動や食事、日常生活動作の健全な維持に寄与し、ひいては住民の健康やウェル・ビーイングの向上に関連することが説明された。

今後は、次期「ニーズ調査」の継続的な分析を通じて、地域活動が住民に与える影響を中長期的に検証するとともに、地域行事等へ本学教職員や学生が参画するなど、現場レベルでの連携をさらに深めることで、住民の皆様の健康維持と幸福感の向上に寄与する取り組みを推進していく。

（3）社会的処方研究会の様子



①学長　甲田 茂樹



②会場全体



第２回　社会的処方研究会
「高知県立大学が取り組む退院支援・訪問看護師育成の 10 年
　～「病院から地域へ」を支える多職種連携による仕組みづくりと人材育成～」



開催日時　令和７年９月 27 日（土）13 時 30 分～ 15 時
開催場所　高知県立大学 池キャンパス共用棟大講義室
対　　象　医療・介護・福祉の関係者、自治体、地域住民
参加者総数　51 人

（1）事業概要

令和７年度第２回の開催は、平成 27 年度から取り組む「退院支援事業」、「中山間地域等訪問看護師育成講座」について、10 年間の事業をとおして得られた成果の共有を目的として開催した。

（2）活動成果・評価

講演①　看護学部 特任教授　森下 安子

「病院と地域がチームで退院を支える ～その人らしい生活の実現に向けて～ 」

高齢化が進む高知県で入退院支援事業が開始された背景に触れながら、地域と病院の多職種が連携する「地域・病院多職種協働型」の入退院支援システムの構築に向けたこれまでの取り組みを説明した。事業に参画した病院で、６年間継続的に取り組んだ結果、在宅復帰率が向上した事例を示すことで、本事業の取り組みの成果を説明した。

講演②　看護学部 准教授　森下 幸子

「訪問看護がつなぐ“暮らし”と“医療”　地域に根ざす人材育成の挑戦～地域とともに創る訪問看護の未来像～」

高知県の訪問看護師不足という課題に対し、平成 27 年度から「中山間地域等訪問看護師育成講座」を開始しており、大学・行政が連携して行っている、実践力を備えた訪問看護師の育成について説明がされた。開講以来、延べ 200 名弱の修了者を輩出した実績について報告した。

講演③　中山間地域等訪問看護師育成講座　修了者　都築 あずさ 氏

家族と共に自宅で過ごした祖父との経験が訪問看護師を目指すきっかけとなったことや、本講座で培った経験、学んだことが自信につながり、地域でやりがいを持って活動している経験談を報告

○参加者アンケート

「在宅を支える看護職や他職種との連携は、とても重要であると実感した」「私の勤務する地域では在宅独居の高齢者が多いのに看護スタッフは不足しており、訪問看護師さんへの期待はますます増えてくると思う。育成の必要性を強く感じます」「高知県の今後、その未来の課題について自分の立場や自分の今後についても考えるきっかけになった」などの感想をいただき、本学の取り組みを県民の皆様と共有する貴重な機会となった。

（3）社会的処方研究会の様子



①看護学部 特任教授　森下 安子



②看護学部 准教授　森下 幸子



③都築 あずさ氏



④会場の様子



第３回　社会的処方研究会
「地域共生社会をデザインする～県大が取り組む共生社会へのアプローチ～」



開催日時　令和８年２月 10 日（火）14 時 40 分～ 16 時 10 分
開催場所　高知県立大学 池キャンパス本部・健康栄養学部棟２階　A216 ／ A217
対　　象　医療・介護・福祉の関係者、自治体、地域住民
参加者総数　27 人

（1）事業概要

令和７年度第３回の開催は、「地域共生社会をデザインする ～県大が取り組む共生社会へのアプローチ～」をテーマに、看護、福祉、文化、データサイエンスといった多角的な視点から、本学教員が地域と連携して取り組む実践活動について報告した。

（2）活動成果・評価

講演①　社会福祉学部 助教　玉利 麻紀
「多様な人が集う場を創出し、メンタルヘルスへの関心を育む ～永国寺はらっぱフェスの取り組み～」

精神疾患や引きこもりの経験を持つ当事者と地域住民が、対等に関わり合える場づくりの実践として、永国寺キャンパス内の広場を活用したイベントや、当事者を「生きている本」として貸し出す「ヒューマンライブラリー」の活動を紹介した。支援する側・される側という関係を固定せず、偏見の軽減や繋がりづくりを目指す取り組みを共有した。

講演②　地域教育研究センター 准教授　高徳 希
総合情報研究センター 講師　根本 大志
「有形・無形文化財のデジタルアーカイブ化を考える」

地域の過疎化により継承が危ぶまれる伝統芸能に対し、演者の身体技法をモーションキャプチャーで数値化する取り組みや、歴史のある農村歌舞伎の舞台や建物を 3D スキャンで精密に記録し、保存・再現する技術が紹介された。有形・無形文化財のデジタルアーカイブ化は、単なる保存にとどまらず、地域住民が自らの文化を再認識するきっかけとなり、次世代への継承や活用について報告した。

講演③　健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行
「データで見つめる人びとの健康 ～地域の専門職と大学の協働～」

中山間地域や学校現場における日常生活・健康に関するデータの分析結果から、「近隣の助け合い」と日常生活機能の関連性や、子どもの SNS 依存傾向による健康への影響などが示された。データに基づいた人々の健康やウェルビーイングへの影響、児童・生徒の生活課題など、データから読み取れる地域の実情などについて説明された。

講演④　看護学部 教授　久保田聰美
「つながる保健室を拠点としたリビングラボ機能の可能性」

令和７年度より始動した、「つながる保健室」の活動について報告した。報告では、来訪者の健康相談

や潜在的ニーズの把握における現状の課題として、健康記録への記載率や、本当に支援が必要な層へのアプローチの難しさが共有された。今後は、主観的な幸福感を可視化するツールの導入や、住民と専門職・地域資源をつなぐ「リンクワーカー」の育成を視野に入れ、大学が地域課題解決の実験の場（リビングラボ）として機能していくための展望を報告した。

○参加者アンケート

「各分野におけるウェルビーイングに関する取り組みを知ることができた」「データ取得→解析→課題解決提起→予算化→実施→解決とうまくスパイラルで回ったら良い」「地域で誰もが抱える健康、生きづらさなどへの具体的な取り組みを傾聴させていただき、参考になりました」などの感想をいただき、本学の地域共生社会の実現に向けた取り組みを共有する貴重な機会となった。

（3）社会的処方研究会の様子



①社会福祉学部 助教　玉利 麻紀



②地域教育研究センター 准教授　高徳 希



③総合情報研究センター 講師　根本 大志



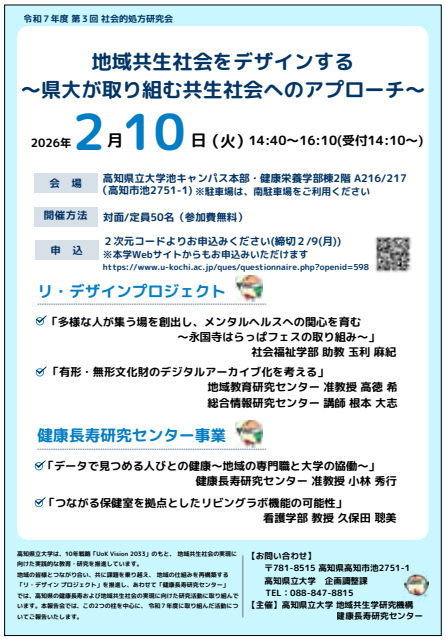
④健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行



⑤看護学部 教授　久保田 聰美



⑥会場の様子



地域教育研究センター紹介ページ

地域教育研究センター

地域教育研究センターは、地域の再生や活性化に資するため、地域社会と連携し、未来を拓く「知の拠点」としての本学の役割を強化するとともに「地域社会志向教育」を実現するための拠点としても役割を果たしてきました。

目標として、

1 地域社会との連携を図るとともに、大学の専門性に基づいた社会貢献を推進する

2「知の拠点」として、県民一般を対象とした多様な公開講座や、県民のニーズに対応した生涯学習の機会を提供する

3 地域における高等教育の充実、未来を担う児童・生徒の学問に対する興味・関心の向上及び進路選択に資するため、県内外の大学及び高等学校等との交流及び連携を積極的に実施する

上記、3つを掲げ、各種の事業を実施しています。

具体的には、高知県や包括連携協定を締結している自治体・団体等を中心に、城学共生連携拡大会議等において情報交換を定期的に行い、今後の課題に関する協議を行うことで、大学の専門性を活かした連携強化を図り、社会貢献を推進しています。

また、県民一般を対象とした多様な公開講座や、遠方の方も視聴できる Web 配信による県民大学公開講座など、県民のニーズに対応した生涯学習の機会を提供しています。

児童・生徒に対しては、学問に対する興味・関心を高める本学教員による出前講座を実施し、高校生に対しては公開講座「県大立志塾」も開催し、高大連携を推進しています。

さらには、「地域に学び、地域で育つ」学生たちを支援する県民大学学生プロジェクト「立志社中」の事業運営や、高知県立大学学生による集落活動センター支援事業など、学生の地域活動、ボランティア活動のサポートを行い、域学共生の理念に沿って地域活性化に貢献しています。

新機構では、従来の取組みに加え、地域共生社会に携わるボランティアやリンクワーカーの教育･育成･訓練に取り組んでまいります。

1．地域社会との連携に関すること
2．生涯教育・リカレント教育の充実に関すること
3．学生の地域活動・地域での学びの推進に関すること
4．大学及び県内の高等学校等との連携に関すること
5．地域共生社会に携わるボランティア・リンクワーカーの育成・訓練に関すること

（1） 包括連携協定先・協力団体との連携強化に向けた取り組み

1 連携推進会議



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時	令和７年７月 31 日（木）13 時 30 分～ 15 時 30 分
開催場所	永国寺キャンパス 地域連携棟４階 B402
対　　象	包括連携協定締結自治体（８市町村）
参加者総数	14 人
教 職 員	地域教育研究センター長　宇都宮 千穂、准教授　秋谷 公博 健康長寿研究センター長　久保田 聰美、准教授　小林 秀行 事務局：三觜 美香、藤波 将司、池知 靖野 他６人（計 13 人）

（1）事業概要

包括連携協定を締結している８つの市町村（高知市、安芸市、香美市、土佐市、佐川町、日高村、津野町、三原村）と、域学共生事業の推進・強化につなげることを目的として実施している。各市町村の実務担当者や地域教育研究センター長、健康長寿研究センター長、域学共生コーディネーター担当者らが一堂に会し、情報共有を行う。

（2）活動成果・評価

地域教育研究センター及び健康長寿研究センターと自治体との連携事例について報告を行い、「ほかの地域は大学や若者とどんな連携をしているの？－効果と課題の共有－」をテーマに出席者と情報共有や意見交換を行い、大学と市町村の相互の関係性や連携のあり方について、より具体的に知っていただく機会となった。

近年はリモートで開催していたが、令和７年度は活発な意見交換を促進するため対面開催で実施、今後の連携強化に向けた有意義な場となった。

（3）会議の様子



①健康長寿研究センター長



②地域教育研究センター長



③会議全体の様子

2　域学共生連携推進拡大会議



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時　令和 7 年 12 月 23 日（火）13 時 30 分～ 15 時 00 分
開催場所　永国寺キャンパス 教育研究棟 4 階
対　　象　高知県、県内市町村、包括協定締結団体、県内保健所・福祉事務所、県内高校、県内社会福祉協議会、集落活動センター、あったかふれあいセンター、一般県民など
参加者総数　45 人
教 職 員　副学長　五百藏 高浩
地域教育研究センター長　宇都宮 千穂、准教授　秋谷 公博、准教授　高徳 希
総合情報研究センター 講師　根本 大志
文化学部 講師　吐合 大祐
看護学部 講師　岩﨑 順子
健康栄養学部 准教授　竹井 悠一郎
事務局：三觜 美香、藤波 将司、紀ノ國 亜妃、保志場 由紀子、池知 靖野、竹内 理香
（計 14 人）

（1）事業概要

本会議は、大学の取り組みや地域に根差した研究をさらに推進し、大学との連携を希望する関係団体等との情報共有や協力関係の構築・強化を図ることを目的として、県内地方公共団体及び関係団体・企業等をはじめとした広く一般の方々を対象に隔年で開催している。

平成 28 年度の「域学共生連携会議」をきっかけとして、第 3 回以降は「域学共生連携拡大会議」として参加対象を拡大し、コロナ禍以降は隔年開催の形で継続してきた。

関係機関と本学との取り組み紹介に加え、教員による地域での連携事例（連携可能な事例）を広く共有する機会としている。

（2）活動成果・評価

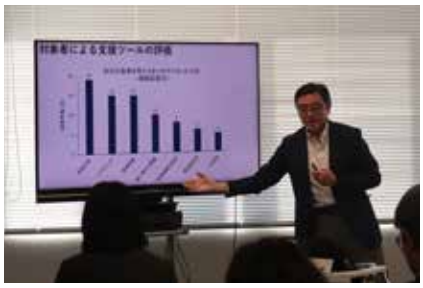
当日は、県内自治体関係課や企業の方々に加え、高校教員、保護者、高校生、他大学及び四国外からの教職員など、多くの皆様にご参加いただいた。

第一部の「連携報告会」では、地域教育研究センター長から高知県立大学と地域の連携について報告した。第二部では、「デジタル」、「若者」、「身体づくり」の 3 テーマにおいて、それぞれ 2 名の教職員による事例（連携可能な事例）を発表した。事例発表後の質疑応答では、活発な意見交換が行われた。

（3）会議の様子









高知県立大学
▲大学ホームページ
令和7年度
域学共生
連携拡大会議
場所：高知県立大学永国寺キャンパス
Renkeinotane
13:30~13:45 第一部 連携報告会
13:50~15:00 第二部 連携の種
デジタル
若 者
身体づくり
第二部では、テーマにわかれ、各2名の講師から
連携事例（連携可能な事例）について発表します
大学研究
×
地域連携
第二部終了後
名刺交換など
いかがですか？
コーヒーコーナーあります
12/23
（火）
永国寺キャンパス
対面
開催
13:30
～
15:00
事前申込制
12/21申込締切
参加費無料
【お申し込み】
右のQRコード、又は
右下の問い合わせ先
からお申し込み
ください。
▲WEB申込
第二部詳細内容（各テーマ30分×2名）
デジタル
・子育て期にある家族を対象とした
ハイブリッド看護 岩崎順子 講師
・21世紀の地域情報デザイン構想 根本大志 講師
若者
・地方自治は地域活性化の万能薬か？
：政策争点と対立 吐合大祐 講師
・実習を通した関係人口の構築について 秋谷公博 准教授
身体づくり
・成長期のアスリートの体づくり支援について 竹井悠一郎 准教授
・日常生活の「歩き方」から考える健康づくり 高徳希 准教授
高知県立大学の取り組みや地域に根差した研究をさらに推進し、県内
自治体及び各関係団体等との情報共有や協力関係の構築・強化を
図るため開催します。
【お問い合わせ】
高知県立大学 地域教育研究センター
〒780-8515 高知市永国寺町2-22
Tel▸088-821-7125
Email▸aeru@cc.u-kochi.ac.jp

3　ご意見番会議



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時	令和８年１月 15 日（木）13 時 30 分～ 14 時 50 分
開催場所	集落活動センターたいこ岩（佐川町尾川地区）
対　　象	佐川町役場職員、大学と関わりのある地域の方々
参加者総数	８人
教 職 員	地域教育研究センター長　宇都宮 千穂、准教授　高徳 希 事務局：三觜 美香、藤波 将司、池知 靖野（計５人）

（1）事業概要

学生と協働した地域団体（集落活動センターなど）を訪問し、地域の関係者から実際の活動の中で良かった点や気になる点、活動の成果や今後の取組への期待などのご意見をいただく場として毎年様々な地域で開催している。

本学と地域が取組への理解を深めるとともに、さらなる連携・協力を推進するために欠かせない機会となっている。

（2）活動成果・評価

令和７年度は、高知県佐川町尾川地区において開催した。

尾川地区は、「立志社中（活輝創生実行委員会）」や「地域学実習Ⅰ」等を通じて 10 年以上にわたり連携を重ねており、継続的な協働関係を築いている地域である。会議では、これまでの取組を振り返りながら、協働の成果や課題、今後の展望について具体的かつ率直なご意見を伺った。本会議により、長年の協働を通じて培われた信頼関係を再確認するとともに、今後の連携をより実効性のあるものとするための課題と方向性を整理する機会となった。

（3）会議の様子





4　包括連携協定締結団体一覧、活動実績



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

(1) 概要

本協定は、各市町村や企業・NPO 法人等の団体と本学が多様な分野で緊密な協力関係を築き、持続・発展的に連携を深めることにより、未来を担う人材の育成や活力ある地域社会の形成・発展に寄与することを目的としている。

(2) 包括連携協定締結団体

	団体名	協定締結日
1	日高村	R5.4.1
2	名桜大学	R2.2.14
3	名古屋市立大学	H30.7.21
4	株式会社四万十ドラマ	H29.3.1
5	特定非営利活動法人 NPO 高知市民会議	H28.8.4
6	三原村	H28.7.12
7	株式会社高知放送	H28.2.17
8	高知市	H27.3.26
9	株式会社高知銀行	H27.1.21
10	安芸市	H26.8.25（H29.8.25 再締結）
11	津野町	H26.3.17（H29.3.17 再締結）
12	佐川町	H26.3.17（H29.3.17 再締結）
13	香美市	H26.3.17（H29.3.17 再締結）
14	高知医療センター	H22.11.17（H23.6.28 再締結）
15	土佐市	H20.10.28（H23.7.26 再締結）
16	公益財団法人こうち男女共同参画社会づくり財団	H18.10.28（H29.2.1 再締結）
17	社会福祉法人高知県社会福祉協議会	H18.10.4

(3) 活動実績（協定締結団体との連携）

団体名	事業名	期間	概要	参加回数等
高知市	小1サポーター	入学当初～11月	高知市立小学校第１学年の学習や生活の支援への学生ボランティアの募集、取りまとめと高知市との調整を行った。	本学学生：９人 参加回数：延べ211回
	学習チューター	令和７年9月～ 令和８年２月	高知市の小・中学生への学習支援への学生ボランティアの募集、取りまとめと高知市との調整を行った。	本学学生：６人 参加回数：延べ62回
	高知市子ども・子育て支援会議委員の委嘱	令和７年８月１日～ 令和９年７月31日	高知市子ども・子育て支援会議委員（学生）の委嘱について高知市との調整を行った。	本学学生：１人 参加回数：4回（R7年度）
安芸市	令和7年度 学習支援員募集	令和７年９月～ 令和８年３月まで	安芸市の小・中学生への学習支援への学生ボランティアの募集、取りまとめと安芸市との調整を行った。	本学学生：１人 参加回数：延べ76回
津野町	「町制施行20周年TSUNOウォーキング」運営スタッフ	令和７年11月９日（日）	津野町の町制施行 20 周年のイベントの運営スタッフ（ボランティア）の募集、取りまとめと津野町との調整を行った。	本学学生：27人 参加回数：１回
三原村	学習支援ボランティア	令和７年９月７日（日） ～９月12日（金）	三原村の小・中学生への学習支援への学生ボランティアの募集、取りまとめと三原村との調整を行った。	本学学生：２人 参加回数：延べ10回 （10日）

(2) 地域教育研究センターの学生ボランティア

1 コミュニティサービスラーニング（ＣＳＬ）サポートデスク



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

活動期間	通年
活動場所	高知県内全域
対　　象	ボランティア活動に興味のある在学生
参加者総数	学生 58 人、延べ 417 回
教 職 員	地域教育研究センター長　宇都宮 千穂 事務局：三觜 美香、土江 裕之、藤波 将司、池知 靖野、紀ノ國 亜妃（計６人）

(1) 事業概要

地域の抱える課題を認識し、課題解決への関心を高めた学生が、専門的な知識や技術など大学での学びの成果を生かして、域学共生の理念に基づき、ボランティア活動を行うコミュニティサービスラーニングを支援するための窓口として、平成 28 年５月から地域教育研究センターに「コミュニティサービスラーニング（CSL）サポートデスク」を設置している。

(2) 活動成果・評価

１．CSL サポートデスク運営会議

第１回　令和７年４月 21 日（月）　対面及びオンライン会議（出席者６人）
（審議事項）ボランティア情報、事務手続変更
第２回　令和７年５月８日（木）　メール審議
（審議事項）事務手続変更
第３回　令和７年５月 30 日（金）　対面及びオンライン会議（出席者６人）
（審議事項）ボランティア情報
第４回　令和７年７月４日（金）　対面及びオンライン会議（出席者６人）
（審議事項）ボランティア情報
第５回　令和７年７月 25 日（金）　対面及びオンライン会議（出席者６人）
（審議事項）ボランティア情報、事務手続変更
第６回　令和７年８月 19 日（火）　メール審議
（審議事項）ボランティア情報
第７回　令和７年９月３日（水）　メール審議
（審議事項）ボランティア情報
第８回　令和７年９月 18 日（木）　対面及びオンライン会議（出席者６人）
（審議事項）ボランティア情報
第９回　令和７年 12 月９日（火）　対面及びオンライン会議（出席者６人）
（審議事項）ボランティア情報、事務手続変更

（3）ボランティア活動実績

県内関係団体から受け付けた18件のボランティア情報を学生に提供し、延べ58人の学生が、延べ417回、大学での学びにつながるボランティア活動に参加した。

No	概要	団体名	参加回数（延べ）	参加者数
1	小1サポーター	高知市教育委員会 学校教育課	211	9
2	生徒の学びサポート事業学習支援員	高知県教育委員会 （高知県立伊野商業高等学校）		0
3	「総合的な探求の時間」での生徒への助言	高知県立岡豊高等学校	19	9
4	学習チューター	高知市教育委員会 学校教育課	62	6
5	放課後学習支援ボランティア	日高村教育委員会		0
6	三原小学校・三原中学校「学習支援」	三原村教育委員会	10	2
7	民具紹介動画出演ボランティア	高知市 民権・文化財課		0
8	瑞応の盆踊りの参加、運営支援（佐川町黒岩）	高知県文化遺産総合活用推進委員会 （高知県歴史文化財課）		0
9	「津野山古式神楽」の夜神楽に参加してみませんか？	高知県文化遺産総合活用推進委員会 （高知県歴史文化財課）	3	1
10	修学旅行の介助	高知市立高知特別支援学校		0
11	学習支援員（安芸第一小学校、安芸中学校）	安芸市・安芸市教育委員会	76	1
12	土佐の伝統芸能を一緒に体験してみん？「都太鼓踊り」 （仁淀川町）	高知県文化遺産総合活用推進委員会 （高知県歴史文化財課）		0
13	「四ツ白の太刀踊り」の踊り手として参加してみませんか？ （佐川町）	高知県文化遺産総合活用推進委員会 （高知県歴史文化財課）	5	1
14	いの町「椙本神社のおなばれ」に参加してみよう！	高知県文化遺産総合活用推進委員会 （高知県歴史文化財課）	4	2
15	津野町貝ノ川「キャンドルまつり」	津野町 まちづくり推進課		0
16	「町制施行20周年 TSUNOウォーキング」の運営スタッフ	津野町 まちづくり推進課	27	27
17	「ボランティアガイダンス2025」における当日スタッフ	NPO高知市民会議		0
18	仁淀川町の「秋葉まつり」におけるボランティア	高知県文化遺産総合活用推進委員会 （高知県歴史文化財課）		0
		計	417	58

（4）活動の様子



①小１サポーター



②津野山古式神楽



③佐川四ツ白の太刀踊り



④ TSUNO ウォーキング

2　高知県立大学学生による集落活動センター活性化支援事業



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

活動期間　通年
活動場所　高知市、本山町、仁淀川町、宿毛市など県内各地
対　　象　集落活動センターの活動に興味のある在学生
参加者総数　学生 59 人、21 回

(1) 事業概要

高知県中山間地域対策課と協力し、集落活動センターの課題や大学連携のニーズ等を取り纏め、集落活動センター側の「大学との接点がない」「地域外の若者の視点や感性を得たい」等の課題・ニーズに対し、大学側の「学生の旅費負担」、「学生の学び・成長の機会」等の課題・ニーズをマッチさせる事業として実施している。

(2) 活動成果・評価

地域教育研究センターは、高知県中山間地域対策課と協働して実施する「高知県立大学学生による集落活動センター活性化支援事業」において、県内の集落活動センターに関する 30 件のボランティア募集情報を学生に提供し、応募のあった 21 件のボランティア延べ 59 人の学生が、県内各地の集落活動センター地域において多様な地域活動に参加した。

	概　　要	参加者人数
1	仁井田のりん家地区　「夏まつり」の運営支援	2
2	集落活動センター汗見川地区　「汗見川清流マラソン大会」運営支援	3
3	集落活動センター汗見川　「ちっとええぜよ汗見川」運営支援	2
4	甲浦集落活動センターなぎ　「きもきもきもだめしイベント（1泊2日）」運営支援	6
5	甲浦集落活動センターなぎ　「きもきもきもだめしイベント（2泊3日）」運営支援	0
6	集落活動センター氷室の里　「特産原木まいたけの植土」作業支援	5
7	中津川集落活動センターこだま　「どろんこ運動会」開催支援及び競技参加	3
8	集落活動センターたのしいな　「オーシャンサマーマーケットin椎名」の運営支援	0
9	集落活動センターだんだんの里　「七夕まつり」の開催支援	2
10	集落活動センター鵜来島地区　「うぐるファミリーフェスティバル」の運営支援	0
11	集落活動センター香美市美良布　「まなぼう×つながろう！香北の夏やすみ」	1
12	集落活動センターミライエ　「子ども食堂・預かり事業ボランティア」の運営支援	2
13	集落活動センターなめかわ　「なめかわサロン（高齢者サロン）」運営支援	0
14	集落活動センターしもなの郷　「Feel the love in NIYODOGAWA 」開催支援	1
15	集落活動センターが集うイベント「ふるさと・えいもん集マルシェ」販売支援	2
16	甲浦集落活動センターなぎ「ハロハロハロウィンイベント」運営支援	0
17	【天候により中止】集落活動センターしらいし・ふなと・奥四万十の郷「つのフェス2025」の出店支援	0

18	集落活動センターしらいし・ふなと・奥四万十の郷「ツノチャマルシェ」の出店支援	2
19	集落活動センター鵜来巣地区の秋まつり「春日神社大祭」(1泊2日)の運営支援	2
20	集落活動センター鵜来巣地区の秋まつり「春日神社大祭」(2泊3日)の運営支援	0
21	集落活動センターだんだんの里「長者deキャンドルナイト」の開催支援	10
22	集落活動センター沖の島「トレッキングガイドマップ」作成支援	2
23	集落活動センターたのしいな「第7回たのしいな文化祭」の運営支援	0
24	集落活動センター下川口家「コスモス祭り」開催支援	5
25	集落活動センター結の里「こんにゃく芋の収穫・こんにゃく作り」作業支援	2
26	集落活動センターやすだ「にんにくの植え付けに伴う草刈り体験」	1
27	集落活動センターが集うイベント「ふるさと・えいもん集マルシェ」販売支援	0
28	山笑ふ横畠集落活動センター「愛校作業(清掃・環境整備)」支援	3
29	集落活動センターしもなの郷「夢の森公園キャンプ場」景観整備のお手伝い	1
30	集落活動センター秋葉の里別枝　「桜ふる里別枝」の開催支援	2
	計	59

(3) 活動の様子



①「きもきもきもだめしイベント」運営支援



②「原木まいたけの植土」作業支援



③「どろんこ運動会」開催支援



④「ツノチャマルシェ」出店支援



⑤「こんにゃく芋の収穫」作業支援



⑥「夢の森公園キャンプ場」景観整備

（3）「県民大学」学生プロジェクト　立志社中

「県民大学」学生プロジェクト　立志社中

地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

活動期間　令和７年５月 12 日（月）～令和８年２月 28 日（土）
活動場所　高知県全域
対　　象　高知県立大学学生
参加者総数　216 人（２月末日時点）

【プロジェクト審査委員】
高知県文化生活部私学・大学支援課長　後藤 欽司 氏
高知県ボランティア・NPO センター所長　仙頭 正輝 氏
津野町まちづくり推進課地域コーディネーター　小笠原 知美 氏
学生部長　長戸 和子
健康栄養学部 教授　近藤 美樹
【立志のたまご審査委員（立志社中運営委員会委員）】
学生部長　長戸 和子
健康栄養学部 教授　近藤 美樹
地域教育研究センター長　宇都宮 千穂
【各チーム担当教員】
社会福祉学部 教授　田中 きよむ（P シスターズ、かんきもん援農部門）
文化学部 教授　ヨース・ジョエル（Pilina）
看護学部 助教　加藤　昭尚（健援隊）
地域教育研究センター 准教授　高徳 希（活輝創生実行委員会、おおとよ探検隊）
看護学部 講師　山中 福子（いけいけサロン活動）
看護学部 准教授　畠山 卓也（応急救護 学生チーム LIFE）
【事務局】
三觜 美香、藤波 将司、保志場 由紀子、竹内 理香
【スキルアップセミナー等講師】
高知市保健所食品生活課　吉永 順一 氏
株式会社センテンス 代表取締役　西條 武志 氏
ルエリア 代表　正木 芙由子 氏

（1）事業概要

ア．立志社中について

高知県は多くの有為な人材を生み、若者たちは世界へと飛び立っていった。日本で、そして世界で通用する人材を本学で育てたいという想いを込めて、坂本龍馬の「亀山社中」（後の海援隊）と、板垣退助らの「立志社」をあわせて、本事業を「立志社中」とした。「社中」には、「仲間」「結社」という意味があり、つまり「立志社中」とは、「将来の目的を定めて、これを成し遂げようとする学生グループ」という意味である。

また、「立志のたまご」とは、次年度に「立志社中」の新プロジェクトとして申請することを目指し、プロジェクトの立ち上げ準備期間を大学が支援するものである。

立志社中には次の３つの目標がある。

・地域の課題に高い関心を持った学生が、地域の方々と協働して取組む。

・学生が地域の方々と一緒に活動することを通じて、学内だけでは学べないことを学ぶ。

・大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

これらの目標を掲げ、地域と関わる演習、フィールドワーク、研究室活動、学生活動等の実績を土台にしながら、地域活性化に貢献する学生主体のプロジェクトを公募、審査し、支援を行うものである。

13 年目となる令和７年度は８プロジェクト（立志社中７、立志のたまご（後期）1)、参加学生数 162 人の学生が地域活動に参画した。（人数は、申請時）



イ．プロジェクトの公募について

（ア）対象プロジェクト

まちづくり、中山間地域の活性化、地域文化の継承・再生、産学連携、地域医療・福祉、小・中・高大連携など､域学共生を目的として､「地域文化の振興･再生や地域の課題解決」のために意欲をもって取組む本学学生グループが、主体的に企画・実施する以下に掲げる取組みであって、かつ、成果が見込まれるプロジェクトを対象とする。

① 学部学科を超えた横断的な取組み

② 行政・企業・県民のネットワークづくり

③ 中山間地域をはじめ地域活性化のための活動拠点づくり

④ まちづくりや地域おこしなど地域経済の活性化につながる取組み

⑤ その他、地域と連携した活性化への取組み

（イ）支援内容

① 各プロジェクト 30 万円を限度とする活動資金の助成（「立志のたまご」は５万円を限度）

② 活動の相談、指導・助言、広報などの活動支援

③ 能力開発、スキルアップのための講座の実施等

（ウ）募集期間

①立志社中：令和７年４月１日（火）～令和７年４月 30 日（水）

②立志のたまご：前期　令和７年４月１日（火）～令和７年５月 27 日（火）

：後期　令和７年８月１日（金）～令和７年９月 19 日（金）

(2) 活動成果・評価

ア．プロジェクトの採択について

（ア）応募件数

①立志社中：７件（うち新規プロジェクト１件）

②立志のたまご（後期）：１件

イ．プレゼンテーション及び審査会の開催

（ア）立志社中

日時：令和７年５月 10 日（土）13 時 00 分～、引き続き審査会を開催

場所：高知県立大学 永国寺キャンパス教育研究棟 1 階 A101 講義室

審査結果公開：令和７年５月 12 日（月）

今年度は、７件（学生総勢 152 人）の応募があり、学生たちはそれぞれの思いを胸に、立志社中の採択を目指して、審査委員、甲田学長、本学学生・教職員の前でプレゼンテーションを行った。









（イ）立志のたまご

日時：令和７年９月 27 日（土）９時 30 分～、引き続き審査会を開催

場所：高知県立大学 永国寺キャンパス地域連携棟１階　B102 地域開放教室

審査結果公開：令和７年９月 29 日（月）

後期募集に１件（学生 10 人）の応募があり、審査委員との面接でプロジェクトにかける思いを伝えた。







（ウ）審査項目

「立志社中」の趣旨及び本学の取組みに沿った提案の中から、以下の審査項目に基づいて審査を行った。

①継続性・・地域等との関わりを持ち、それぞれの地域特性を活かし、地域に根ざした継続的活動プログラムを持っているか。

②独自性・・取組みのテーマや方法がユニークで特色があり、創意工夫がみられるか。

③実現性・・事業計画、運営組織など事業としての実現可能性を持っているか。実行可能な方法や体制、適切な予算で事業立案されているか。

④発展性・・採択を受けることで、団体や活動自身が発展する可能性があるか。

（立志社中）また助成金がなくなった後にも継続的な活動の展望があるか。

（立志のたまご）また将来的に「立志社中」プロジェクトに発展する意欲がみられるか。

（エ）採択件数

立志社中　７件

立志のたまご（後期）　１件

ウ．採択プロジェクト

「県民大学」の取り組み 【2025年度採択チームの紹介】

立志社中 課外活動

学生 × 地域

広がる学生の地域活動

2013年度からスタートした「立志社中」は、地域の課題解決に主体的に取り組む学生を大学が支援する教育プログラムです。創設13年目となる2025年度は8チーム、162人（うち「立志のたまご」1チーム10人含む）の学生が高知県内で活動しています。若さにあふれた企画力と行動力で、学生たちは地域の"元気"創生に力を発揮しています。※人数は採択時



「協働」地域とつながる、未来へつなげる

Pシスターズ

高知市、安芸市、土佐清水市、仁淀川町、津野町、三原村

Pシスターズは、「高知市三里地区」「安芸市東川地区」「土佐清水市竜串地区」「仁淀川町別枝地区」「津野町船戸地区」「三原村」の5つの地域で地域の方々のニーズに合った活動を、地域の方々と学生が協働して取り組んでいます。学生ならではの視点やパワーを活かし、地域と学生だけでなく、地域の住民同士や学生同士のつながりも大切にしながら地域活性化に向け尽力しています。



多文化共生プロジェクト

Pilina

高知市、土佐市

Pilinaとは「絆」や「繋がり」を意味するハワイ語を由来に「ただ目の前にいるあなたとの絆を大切にしたい」という思いから始めた活動です。国籍・文化・育った環境に縛られず全ての人が暮らしやすい高知県を目指していきます。異なる文化やルーツを持つ者同士が尊重し合えるように、多文化交流の機会を広げていきたいです。



健援隊Happinessプロジェクト

健援隊

高知市、香美市

健援隊は、高齢者と小児のグループに分かれ、高齢者のセルフケア向上、減災への意識強化、小児への健康教室、お便りでの健康意識向上、AEDの知識の普及を目的に活動を行ってきました。2025年度は、地域の方々の要望を取り入れて新たな活動を企画し、健康に関する知識の普及と健康文化の醸成を目指していきたいと考えています。地域の方々との交流を通して、互いに幸福感や笑顔をもたらす活動となるように取り組んでいきます。



NEW わがわーるど

活輝創生実行委員会

佐川町

活輝創生実行委員会は、佐川町尾川地区を拠点に、地域に新たな"活情"を生み出すことを目的として活動しています。地域住民の方々との協働を通して継続的な関係を築きながら、地域の魅力を再発見し、広く発信していきます。地域の課題に真摯に向き合い、学生自身も学び・成長しながら、人と地域がともに前向きに歩み続けられる、持続可能な地域づくりの実現を目指しています。



備えてナンボ！イケちゅう防災ライフ！！

いけいけサロン活動

高知市

私たち「いけいけサロン活動」は、大学がある池地域の住民の方と学生の交流が少なかったため、住民の方と集まる場をつくることを目指して結成されました。2025年度は、毎月のサロン活動で信頼関係を築き、災害が起こった時の対応について住民の方と一緒に考えて災害に備えていきたいと思っています。散歩をして池地域の危ない場所を確認し、マップにまとめられるように活動していきます。



アグリケーションで育む"まちの力"

かんきもん援農部門

高知市、安芸市、四万十市

かんきもん援農部門は、安芸市や四万十市の農家の方と交流しながら、実際に農業を行ったり手伝いをしたりしています。2025年度からは以前から活動に協力いただいていた方の敷地で野菜を育て、交流しながら作物を育てる大変さを学ぶ新しいプロジェクトを始めました。これらの活動を通して、地域の現状や課題を把握しつつ、魅力を発信しています。そして、地域の方と学生のアイデアで活性化に繋がるような活動を目指しています。



昔を学ぶ～立川のこれまでをつなげ隊～

おおとよ探検隊

大豊町

おおとよ探検隊は、大豊町立川地区の活性化を目指し、自然・文化・人との出会いを大切にしながら活動しています。個人の能力次第でなんでも挑戦でき、自分のアイデアを形にしやすいのが魅力です。メンバーはプロジェクトごとに分かれ、一人一人が主体的に活動を行います。2025年度は、学部ごとの専門性を活かして、地域の魅力発信や課題解決に取り組むことを目標に掲げ、地域活性化に貢献していきます。



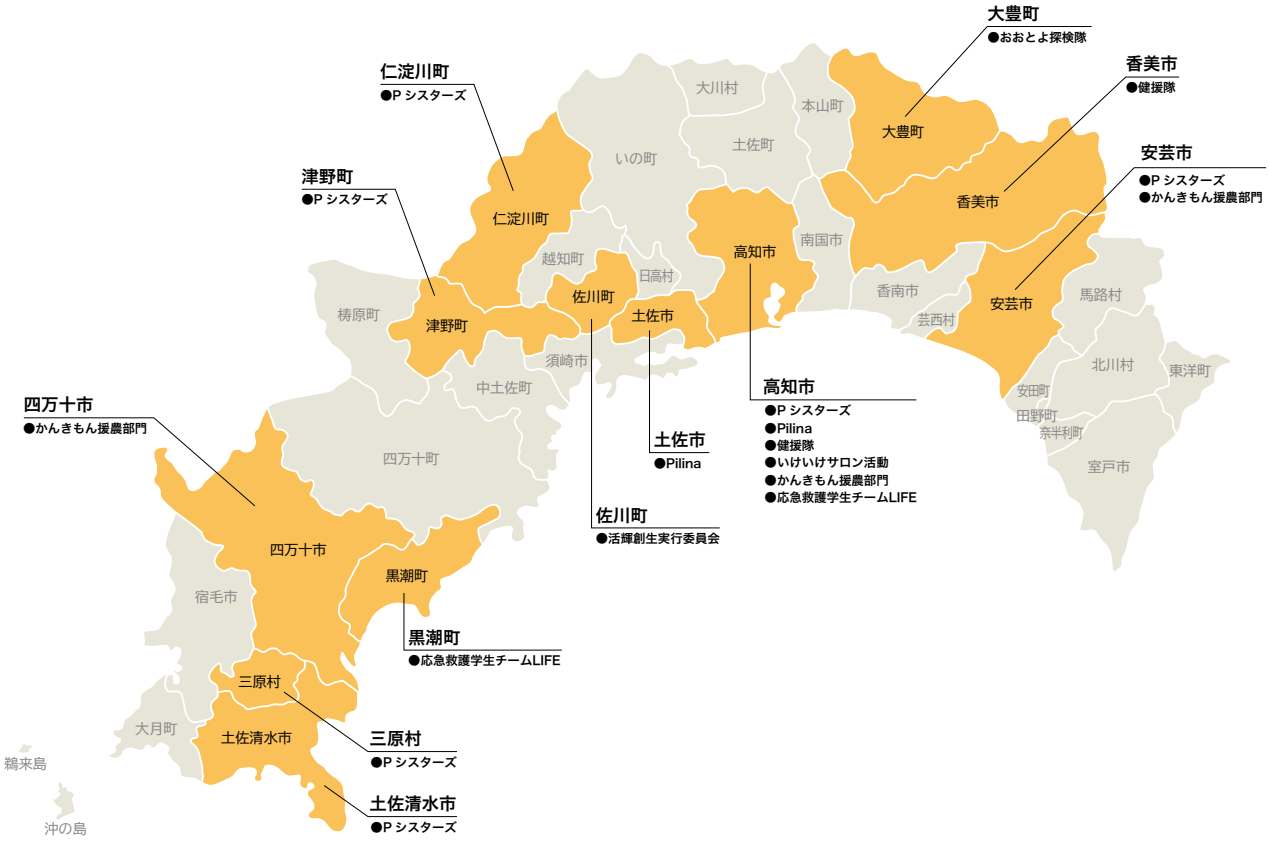
ファーストエイドプロジェクト

応急救護学生チームLIFE

高知市、黒潮町

私たちLIFEは、「いざ！という時に声を出し、一歩踏み出せる人を増やすこと」を目指す学生団体です。救急に興味があれば経験の有無に関わらず誰でも参加できます。「誰か」じゃない、「私が救う」という考えを持ち、学生主体で応急救護を学び、地域での活動を通してその輪を広げています。知識を持っているだけで終わらせず、行動できる力を持った人を増やすことを目指しています。

エ．活動エリア一覧


大豊町
●おおとよ探検隊
香美市
●健援隊
安芸市
●P シスターズ
●かんきもん援農部門
仁淀川町
●P シスターズ
津野町
●P シスターズ
四万十市
●かんきもん援農部門
土佐市
●Pilina
高知市
●P シスターズ
●Pilina
●健援隊
●いけいけサロン活動
●かんきもん援農部門
●応急救護学生チームLIFE
佐川町
●活輝創生実行委員会
黒潮町
●応急救護学生チームLIFE
三原村
●P シスターズ
土佐清水市
●P シスターズ
大川村
本山町
いの町
土佐町
大豊町
香美市
南国市
仁淀川町
越知町
日高村
佐川町
高知市
津野町
土佐市
椎原町
香南市
芸西村
安芸市
馬路村
須崎市
中土佐町
北川村
東洋町
安田町
田野町
奈半利町
室戸市
四万十町
四万十市
黒潮町
宿毛市
三原村
大月町
土佐清水市
鵜来島
沖の島

オ．活動の評価

（ア）中間報告会

日時：和 7 年 11 月 1 日（土）13 時 30 分～ 16 時 00 分

場所：高知県立大学永国寺キャンパス 教育研究棟 1 階 A101 講義室

参加者：学内関係者 64 人、学外者 27 人

高知県の地域課題に取り組む学生たちが思いと実践について、審査委員、本学学生・教職員、学外からの参加者の前で報告を行った。

学内外の関係者で構成された審査委員の皆さまから客観的な評価や助言をいただき、学生たちは今後の活動のヒントを得たようだ。

また、報告会後は交流会が開催され、軽食をとりながら他チームとも交流を深めた。









（イ）活動成果報告会

日時：令和８年３月７日（土）　13 時 30 分～ 16 時 10 分

場所：高知県立大学永国寺キャンパス教育研究棟 1 階 A105 講義室

参加者：学内関係者 64 人、学外者 48 人

活動成果報告会では、後期「立志のたまご」で採択された１チームを含めた計８チームが「立志社中」の一年間の取り組みをまとめ、活動成果と共に自分たちの学びや成長について発表した。報告会の最後には、審査委員の皆さまから総評をいただき、最後に甲田茂樹学長から活動の労いと今後の活動への期待を込めた挨拶があった。

報告会後は、軽食をとりながら交流会を開催。発表を終えてほっとした様子の学生たちが、和気あいあいと楽しむ姿が見えた。









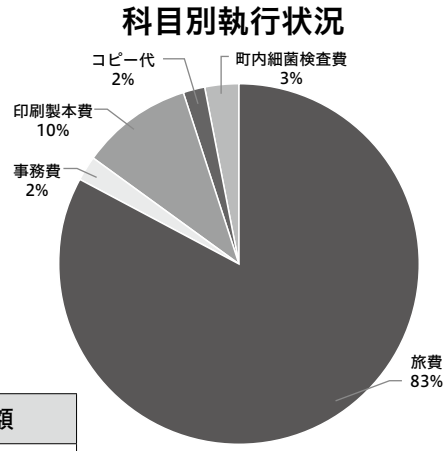
（ウ）会計報告

①使用経費

	チーム名	交付額（利息含）	執行額
立志社中	P シスターズ	287,628 円	150,901 円
	Pilina	32,443 円	19,243 円
	健援隊	232,712 円	154,036 円
	活輝創生実行委員会	295,374 円	80,158 円
	いけいけサロン活動	123,147 円	101,200 円
	かんきもん援農部門	299,073 円	152,686 円
	おおとよ探検隊	300,155 円	248,392 円
合計		1,570,532 円	906,616 円

	チーム名	交付額（利息含）	執行額
立志社中のたまご	応急救護学生チーム LIFE	49,504 円	49,504 円
合計		49,504 円	49,504 円

②科目内訳



カ．その他の活動

（ア）スキルアップセミナーの開催

第１回

テーマ：「地域との関わり方と魅力の伝え方」

日時：令和７年９月 25 日（木） 13 時 00 分～ 15 時 00 分

場所：永国寺キャンパス　地域連携棟１階 B102 地域開放教室

講師：株式会社センテンス 代表取締役 西條 武志 氏

参加学生：８人

内容：地域活動・地域活性化についてアイデアの作り方・物事の伝え方など地域づくりを大切にしている広告会社の代表から多方面に渡り、講義いただいた。

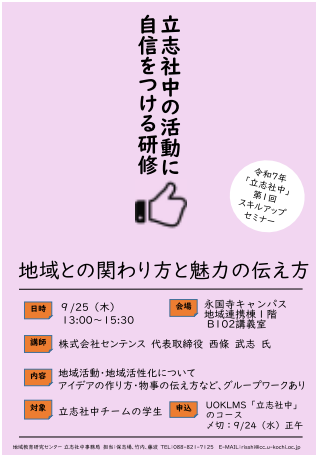
（アンケート結果から抜粋）

・地域との関わり方について、住民の声を聞いたときにフラットな視点を持つというところが印象的でした。今まで、地域活性化やその地域と関わる上でその地域の強みを活かすことは大切だと頭では分かっていても、つい課題を中心に捉えてしまいがちだったなと感じました。これからはその地域の住民の方々が何を考えていらっしゃるのか考えたいなと思いました。

・アイデアをどのように生み出していくかについて話を聞いた時に、既存の何かと何かの組み合わせでアイデアが生まれるという点が印象に残りました。







第２回

テーマ：「インスタグラムを活用した広報について」

日時：令和８年１月 16 日（金） 13 時 00 分～ 15 時 30 分

場所：永国寺キャンパス　地域連携棟２階 B207、B208 講義室

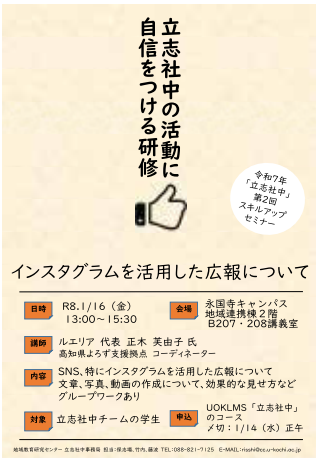
講師：ルエリア 代表 正木 芙由子 氏

参加学生：15 人

内容：今年度各チームでは、インスタグラムを活用して、外部への情報発信を行っている（8チーム中7チーム）。各チームで活動を報告しているが、今回のセミナーをきっかけにさらに魅力的な伝え方を学び、広報することで、「立志社中」について幅広く発信したいと考えている。また、チームメンバーからもSNS広報の仕方を学びたいと要望もあった。SNSを発信するうえで、注意しなくてはならない基本事項や、効果的な魅力の伝え方、写真や動画の撮影の方法、最新機能の利用方法などを講義いただいた。







（アンケート結果から抜粋）

・普段使っているSNSのメカニズムを知り、より良い広報活動に繋げていきたいと思いました。実際に動画作成することで様々ことを学びました。

・ショート動画の最初の３秒ほどで勝負が決まるという内容が印象に残った。その３秒で視聴者に動画を見てもらえるかどうかが変わると思うので、最初の導入に大事だとワークショップを通して実感した。

（イ）LINK topos 2025 への参加

テーマ：「ピース」

日時：令和７年９月９日（火）～９月 11 日（木）

場所：長野県立大学及び長野県内

本大会は積極的に地域活動を展開している全国の公立大学の学生が主体となって企画したもので、情報交換、新たな学びの機会となるとともに、地域貢献の新たな取組みが創出されることを期待して開催されている。

今年度で 13 回目を迎える本大会は、昨年に引き続き、対面開催となった。全国の公立大学から約 90 人の学生が参加、本学からは4人の学生が参加。うち2人は運営学生として参加し、準備から当日運営までたくさんの業務をこなしていた。







（4）「知の拠点」としての多様な生涯学習の機会の提供

1　令和７年度「県民大学公開講座」



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時　令和８年１月 12 日（月）～令和８年３月８日（日）
開催場所　YouTube を利用したオンデマンド講座
対　　象　一般の方
参加者総数　延べ 871 人
教 職 員　健康栄養学部 講師　竹本 和仁、文化学部 准教授　向井 真樹子、
看護学部 准教授 村川 由加理、社会福祉学部 准教授　田中 顕悟

（1）事業概要

地域連携事業として生涯学習の機会を設け、様々な形で県民の皆様にご参加いただいた。令和７年度も YouTube を利用したオンデマンド公開講座「県民大学公開講座」を開催した。「豊かな暮らしにつながる学び」をテーマに、本学の各学部の教員による４講座を、各講座２週間の視聴期間を設けて連続で８週間にわたり配信した。

（2）活動成果・評価

	演題・講師名	開催日	参加人数 延べ人数
第一回	高知県特産品の高付加価値化 ～知らなかったイタドリのいいところ～ 健康栄養学部 講師　竹本 和仁	1/12(月)～1/25(日)	202
第二回	日本語と英語、スウェーデン語の比較からみえる世界 文化学部 准教授　向井 真樹子	1/26(月)～2/8(日)	216
第三回	災害時の医療：トリアージと応急処置 看護学部 准教授　村川 由加理	2/9(月)～2/22(日)	224
第四回	Military Social Work入門 ―その全体像とこれからの社会で必要な理由― 社会福祉学部 准教授　田中 顕悟	2/23(月)～3/8(日)	229

（3）講演の様子



①第一回　県民大学公開講座



②第二回　説明資料



③第三回　県民大学公開講座



④第四回　説明資料



2　第 42 回本山町・本山町老人クラブ連合会・高知県立大学公開講座「夜學 2025」



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時　通年
開催場所　本山町プラチナセンター（長岡郡本山町本山 569-1）
※第 8 回講座のみ、永国寺キャンパスで開催
対　　象　一般の方
参加者総数　延べ 165 人
教 職 員　地域教育研究センター長　宇都宮 千穂
地域教育研究センター 教授　石山 貴章、准教授　高徳 希
文化学部 教授　大井 方子、講師　田中 康代
看護学部 准教授　田代 真理、健康栄養学部 講師　村井 詩子
社会福祉学部 教授　矢吹 知之、准教授　辻 真美、助教　山本 大輔

(1) 事業概要

本山町と本山町老人クラブ連合会、本学の 3 者が共催し、本山町プラチナセンターを会場に全 10 回の公開講座「夜學」を開催した。

(2) 活動成果・評価

全 10 回、延べ 165 人の受講者が参加し、7 講座以上を受講した 6 人に、本学より修了証書を発行した。

	開催日	名称	講師名	参加人数
1	5/22(木)	健康的で幸せに老いるためには	文化学部 教授　大井 方子	19
2	6/19(木)	発達障害って何？	地域教育研究センター 教授　石山 貴章	24
3	7/17(木)※	助けあいの関係づくり ～介護の不安や負担をみんなで軽減しよう～	社会福祉学部 ①准教授　辻 真美 ②助教　山本 大輔	18
4	7/24(木)※	がん患者の在宅療養について	看護学部 准教授　田代 真理	10
5	8/20(水)※	新しい認知症観	社会福祉学部 教授　矢吹 知之	35
6	9/10(水)※	日常の身体活動を見直そう	地域教育研究センター 准教授　高徳 希	13
7	10/8(水)	健康情報や健康食品について考えてみよう	健康栄養学部 講師　村井 詩子	13
8	11/15(土)※	『源氏物語』と日本近代文学	高知県立大学公開講座 主催：文化学部 共催：地域教育研究センター 追手門学院大学 文学部 准教授　村口 進介 文化学部 准教授　田中 裕也 文化学部 講師　中瀬 将志	7
9	11/17(月)	触法精神障害者の処遇	文化学部 講師　田中 康代	9
10	12/4(木)	地域経済からみる観光まちづくり	地域教育研究センター 教授　宇都宮 千穂	17

※日中に開催

（3）講座の様子








第42回 本山町・本山町老人クラブ連合会・高知県立大学公開講座

大学は大人の学校プロジェクト in れいほく

夜學 2025



夜學2024の様子▼

	開講日	開講時間	テーマ	講師
1	5/22（木）	18時半～20時	**健康的で幸せに老いるためには** 津野町で調査研究させて頂いた結果を中心にお話しします。参加者からもお話をうかがうことができれば嬉しく思います。	文化学部 教授 大井 方子
2	6/19（木）	18時半～20時	**発達障害って何？** 本講座では、発達障害の特性理解とサポートについて、私たちにできる支援のあり方を分かりやすく紹介していきたいと考えています。	地域教育研究センター 教授 石山 貴章
3	7/17（木）	13時～14時半	**助けあいの関係づくり** **～介護の不安や負担をみんなで軽減しよう～** <持ち物：動きやすい服装・靴・水分> 『「これでいいのかな？」「みんなどうしているだろう？」困ったときに助けあえるよう、日ごろから顔の見える関係を築きましょう！気軽に集まり楽しく運動！』	社会福祉学部 准教授 辻 真美 社会福祉学部 助教 山本 大輔
4	7/24（木）	13時～14時半	**がん患者の在宅療養について** 在宅でのがん患者の様子や使える社会資源、ケアについて知ろう	看護学部 准教授 田代 真理
5	8/20（水）	13時～14時半	**新しい認知症観** 認知症とともに生きる社会とはどんな地域なのか？認知症の進行や発症を抑制することはできるのか？一緒に考えてみましょう。	社会福祉学部 教授 矢吹 知之
6	9/10（水）	13時～14時半	**日常の身体活動を見直そう** <持ち物：動きやすい服装・靴・水分> いつもの生活から健康につながるちょっとした工夫を考えてみませんか？	地域教育研究センター 准教授 高徳 希
7	10/8（水）	18時半～20時	**健康情報や健康食品について考えてみよう** その健康情報は本当ですか？健康食品を食べれば健康になれる？健康情報や健康食品について知り、自分に合った健康を。	健康栄養学部 講師 村井 詩子
8	11/15（土）	13時半～16時	**『源氏物語』と日本近代文学** <事前申込制> ※本山町役場発着で高知県立大学まで送迎バスを運行予定（大学で開催）	追手門学院大学准教授 村口進介 文化学部 准教授 田中 裕也、ほか
9	11/17（月）	18時半～20時	**触法精神障害者の処遇** 重い精神病を患う人が犯罪に当たる行為を行うとどうなるか。	文化学部 講師 田中 康代
10	12/4（木）	18時半～20時	**地域経済からみる観光まちづくり** 由布院や安心院、なぜ鄙びた農村が観光地になったのか。その理由を探ってみよう。	地域教育研究センター 教授 宇都宮 千穂

場 所　**本山町プラチナセンター**　〒781-3601 高知県長岡郡本山町本山569-1
（第8回講座のみ、高知県立大学永国寺キャンパスで開催）

申込先　本山町プラチナセンター内 本山町教育委員会 社会教育班
電話 0887-76-2084 FAX 0887-76-2078

対 象　どなたでも参加いただけます（れいほく地域外の方もどうぞ！）

その他　7講座以上受講された方には高知県立大学から修了証書が授与されます

無料

協賛：本山町婦人会

3　令和７年度高知県立大学公開講座「『源氏物語』と日本近代文学」
※文化学部との共催事業



文化学部 教授　高西 成介
地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時　令和７年 11 月 15 日（土）13 時 30 分～ 16 時 00 分
開催場所　永国寺キャンパス 教育研究棟１階　A101 講義室
対　　象　一般の方
参加者総数　対面：118 名
教 職 員　文化学部 教授　高西 成介 、准教授　田中 裕也
講師　中瀬 将志
事務局：藤波 将司、紀ノ國 亜妃、竹内 理香
外部講師　追手門学院大学 文学部 准教授　村口 進介 氏

（1）事業概要

高知県立大学文化学部では、その前身の高知女子大学文学部時代から『源氏物語』の研究を脈々と今日まで引き継いできた。こうして積み重ねられた研究成果を、本学の学生のみならず、広く皆様方に理解いただくことは大変重要な意義を持っている。一方で、若者を中心とした古典文学離れ、という現象も起こっており、古典文学や日本の伝統文化を次世代に繋いでいくこともまた、文化学部に課せられた大きな使命であるといえる。

そこで、11 月１日の「古典の日」にちなみ、令和７年度は「『源氏物語』と日本近代文学」というタイトルで公開講座を開催することにした。講演には追手門学院大学の村口 進介氏を迎え、日本文学とその後世への影響について基調講演を行う。続く座談会では、本学の中古文学研究者・中瀬 将志、近代文学研究者・田中 裕也が加わり、『源氏物語』と谷崎 潤一郎をはじめとする近代文学者との関係について議論を深める。本講座を通じて、古典文学が近現代文学へとどのように受け継がれているのか、その豊かな連関を多くの方に感じていただくことを目的としている。

（2）活動成果・評価

第一部　講演　13 時 30 分～ 14 時 50 分
「『源氏物語』の書き方 ―夕顔巻を読む―」
追手門学院大学文学部 准教授　村口 進介 氏

第二部　座談会　15 時 00 分～ 15 時 50 分
村口 進介 氏
高知県立大学文化学部 准教授　田中 裕也
高知県立大学文化学部 講師　中瀬 将志

公開講座「『源氏物語』と日本近代文学」は永国寺キャンパスにて開催し、会場が満席となるほど多くの方が受講してくださった。第一部では、追手門学院大学 文学部の村口 進介准教授が「『源氏物語』の書き方 ―夕顔巻を読む―」をテーマに講演を行った。第二部では、本学文化学部の田中 裕也准教授及び中瀬 将志講師が加わり、村口氏とともに座談会を実施した。

当日は、参加者が講師の対談に熱心に耳を傾ける様子が見られ、会場が笑いに包まれる場面もあるなど、盛況のうちに終了した。参加者からは、講師の話を直接聞けたことへの評価や、新しい読み方を学べたことへの満足の声が寄せられた。また、『源氏物語』が近代文学に与えた影響の大きさへの驚きや、作品が身近に感じられたことで苦手意識が和らいだといった意見もいただいた。

（3）講演の様子



①基調講演の様子



②基調講演の様子



③座談会の様子



4　高大連携事業　出前講座

地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時　通年
開催場所　高知県内小中学高校等
対　　象　高知県内小・中・高校生
参加者総数　延べ 584 人
教職員
文化学部　教授　宇都宮 千穂
看護学部　教授　木下 真里、教授　田井 雅子
講師　岩﨑 順子、助教　依岡 美里、助教　加藤 昭尚、
助教　德岡 麻由、助教　岩井 由里
社会福祉学部 講師　湯川 順子、助教　大熊 絵理菜、助教　玉利 麻紀
健康栄養学部 教授　渡邊 浩幸、教授　小林 淳、准教授　島田 郁子、助教　杉本 拓海
助手　彼末 富貴

(1) 事業概要

学問に対する興味・関心を高め、大学で学ぶことの魅力や楽しさについて知っていただくことを目的として、高知県内の小・中・高等学校を中心に、本学の教員による出前講座を実施している。

(2) 活動成果・評価

児童・生徒対象の出前講座について、申込書の様式等の改善、ホームページへの掲載内容を充実させ、幅広く広報を行った。12 校からの要請を受けて、派遣した教員数は延べ 17 人、受講者数は 584 人であった。

No.	実施日	学校名	対象学年（年生）	受講者数（児童・生徒）	合計	実施者	テーマ
1	6月21日	高知県立高知追手前高等学校	1～3	①35 ②29	64	①看護学部 教授　木下 真里 ②社会福祉学部 助教　大熊 絵里菜	①貧困と病気の関係 ②Social Workerのコミュニケーション術を体験してみよう
2	6月28日	高知中学・高等学校	1～3	①26 ②10	36	①看護学部 講師　岩﨑 順子 ②社会福祉学部 講師　湯川 順子	①助産師の仕事と母性看護 ②高知県の地域の変化ー地域福祉の視点からー
3	7月10日	高知県立高知農業高等学校	3	32	32	健康栄養学部 助手　彼末 富貴	土佐の伝統食について
4	7月11日	高知県立高知農業高等学校	2	36	36	健康栄養学部 教授　渡邊 浩幸	生産量日本一の県民として知りたい生姜のこと
5	7月15日	高知県立安芸高等学校	1～2	①30 ②110 ③21	161	①看護学部 助教　依岡 美里 ②社会福祉学部 助教　玉利 麻紀 ③健康栄養学部 准教授　島田 郁子	①身体の観察からわかることーバイタルサインの意味ー ②ストレスとつきあうコツ ③災害と向き合うには
6	8月1日	朝倉小学校児童クラブ	1～6	第一：39 第二：31 第三：40	110	看護学部 助教　加藤 昭尚 看護学部 助教　岩井 由里	手洗いで本当に手はきれいになるのか？
7	10月15日	高知県立四万十高等学校	1	5	5	健康栄養学部 教授　小林 淳	飲み水の作り方
8	10月24日	高知学芸高等学校	中学3年生 高校1年生	39	39	看護学部 教授　田井 雅子	看護を学ぶということ/看護の専門性

No.	実施日	学校名	対象学年（年生）	受講者数（児童・生徒）	合計	実施者	テーマ
9	11月14日	高知市立高知商業高等学校	1～4年生	1年生：7 2年生：8 3年生：5 4年生：5	25	看護学部 助教　徳岡 麻由	出産・子育てと健康
10	12月12日	高知県立高知若草特別支援学校	高等部3年生	1	1	社会福祉学部 助教　玉利 麻紀	ストレスとつきあうコツ
11	12月19日	須崎市立朝ヶ丘中学校	2	55	55	文化学部 教授　宇都宮 千穂	都市形成史・地域経済学
12	12月22日	高知県立宿毛高等学校	2	20	20	健康栄養学部 助教　杉本 拓海	部活の試合で負けない体作りについて

（3）講座の様子








5　高大連携事業　高校生のための公開講座「県大立志塾 2025」



地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時　令和７年７月 12 日（土）～令和８年２月 14 日（土）
開催場所　永国寺キャンパス教育研究棟１階 A101 講義室　他
対　　象　高知県内の高校生
参加者総数　延べ　94 人
教 職 員　文化学部 教授　金澤 俊吾、看護学部 准教授　畠山 卓也
　　健康栄養学部 准教授　鈴木 麻希子、社会福祉学部 教授　長澤 紀美子
学生スタッフ　学生ファシリテーター、「ジェンダーカフェ」サークル所属学生

(1) 事業概要

高知県立大学地域教育研究センターでは、高大連携事業を重点事業の一つとして位置づけ、大学の教育・研究に触れ、学問に対する興味・関心を深め、学びの楽しさについて知っていただくことを目的に、高知県内の高校生を対象とした「高校生のための公開講座“県大立志塾”」を実施している。

今年度も全４回、各学部の教員がそれぞれ専門性を生かした講座を開催した。本講座の第二部では、高校生と本学学生が提示された課題について協議し理解を深め、解決に向けた方策を見つけるワークショップを行った。

(2) 活動成果・評価

高校生を対象とした県大立志塾では、延べ 94 人の県内学生が参加した。

	開催日	名称	講師名	参加人数
第一回	7/12(土)	ことばの規則性と創造性 ー英語と日本語のさまざまな表現を観察してみようー	文化学部 教授　金澤 俊吾	38
第二回	9/27(土)	住み慣れた街で精神疾患をもつ人と共に生活する	看護学部 准教授　畠山 卓也	28
第三回	12/20(土)	10代の食生活によって実現する将来の骨太生活	健康栄養学部 准教授　鈴木 麻希子	17
第四回	2/14(土)	ジェンダーの思い込み、性のもやもやを考えてみよう ー私たちのSRHR(性と生殖の権利)が尊重されるためにー	社会福祉学部 教授　長澤 紀美子	11

講座終了後のアンケートでは、

（第一回）
・英語や日本語の共通点が人によってとらえ方が異なるという事が分かった。又、英語も日本語も抽象度の大切さと、人にどうとらえてもらうかという事が大切という事が分かった。
・興味のある内容で日本語の独特な使い方に触れて日本語への理解力が上がり、もっと学びたいと思った。

（第二回）
・グループの中で話し合いを重ねたり、周りのグループの意見を聞いたりして精神疾患について学びを深めることができた。
・自分とは異なる意見や価値観を学ぶことができた。さらに自分の知見を広げることができた。

（第三回）
・あまり自分が知らないテーマで新しく学ぶことがたくさんあった。今が骨量を増やすのに最も大切な時期だとわかった。

・私たちの日常生活に直接的に繋がる食事についてより深く学ぶことができた。運動がどのように健康や将来に影響があるかも知れた。

（第四回）

・あいまいだった知識をしっかりつけることができた。世界的に見て、日本のジェンダーについての現状を詳しく知ることができた。

・デートＤＶなどの正しい知識などが身についたと感じた。話を聞いてからグループワークの時間や発表をすることで、深く理解することができた。

といった、声が寄せられました。

（3）講演の様子











6　令和７年度　高知県立消費生活センター×高知県立大学公開講座「消費生活講座」

※高知県立消費生活センターとの共催
文化学部 教授　菊池 直人
地域教育研究センター長　宇都宮 千穂

開催日時	令和７年９月６日（土）～令和７年９月 12 日（金）
開催場所	永国寺キャンパス教育研究棟、及びオンライン配信
対　　象	一般の方々
参加者総数	53 人
教 職 員	授業「現代生活論」 文化学部 教授　菊池 直人（担当教員） 文化学部 准教授　梶原 太一 社会福祉学部 講師　湯川 順子
外部講師	授業「現代生活論」のゲストスピーカー ・岡山大学 教授　佐藤 吾郎 氏 ・京都産業大学 法学部 教授　坂東 俊矢 氏 ・神戸さきがけ法律事務所 弁護士　上田 孝治 氏 ・一般社団法人 EC ネットワーク　原田 由里 氏 ・高知短期大学 名誉教授　細居 俊明 氏 ・流通科学大学 人間社会学部 教授　秋山 学 氏

（1）事業概要

平成 22 年度から高知県立消費生活センターと高知短期大学が実施してきた連携講座「消費生活論」を継承する形で、平成 29 年度からは共通教養教育科目「現代生活論」において連携講座を行っている。本講座は本学の正規科目であると同時に、消費生活センターの「消費生活講座」として一般に開放される公開講座でもある。

令和７年度は、地域教育研究センターも共催として加わり、『高知県立消費生活センター×高知県立大学公開講座「消費生活講座」』を開催した。本学教員に加え、法律や経済など各分野の専門家を外部講師としてお招きし、1 週間にわたり連続講座を行った。



（2）活動成果・評価

消費生活講座申込者数：53 人

健康長寿研究センター紹介ページ

健康長寿研究センター

健康長寿研究センターは 2010 年 4 月に設立し、5 領域の活動ポリシーを軸として、事業を展開してきました。その 5 領域は、1. 県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動（公開講座や健康長寿体験型セミナー・土佐市連携事業）、2. 県民の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動（介護職員喀痰吸引等研修事業・中山間地域等訪問看護師育成講座・入退院支援事業・糖尿病保健指導連携体制構築事業など）、3. 医療センターとの包括的連携を推進する活動、4. 県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動（リカレント教育講座・フィジカルアセスメント研修・行政栄養士研修など）、5. 高知県の健康長寿を研究する活動です。

新機構では、5. の研究の視点を強化し、これまでの健康長寿センターで実施してきた事業や教育・研修の成果や効果を科学的に検証・評価します。さらには、地域共生社会の実現に重要なリンクワーカーやボランティア・市民のリカレント教育や育成に努めてまいります。

1．健康長寿社会を推進する調査・研究及び社会実装の提案に関すること
2．健康長寿を目指す県・市町村との連携に関すること
3．医療機関・社会福祉施設など健康長寿に関連する機関との連携に関すること
4．健康長寿に携わる専門職等の教育・研修に関すること
5．地域共生社会の実現に係る施策・事業の科学的評価に関すること
6．地域共生社会に携わるボランティア・リンクワーカーの育成・訓練に関すること

（1） 健康長寿研究センター事業

1　つながる保健室事業



看護学部 教授　久保田 聰美

活動ポリシー　1　高知県の皆様に対し、健康長寿を啓発する活動
5　高知県の健康長寿および地域共生社会の調査･研究および社会実装に向けた活動

開催日時　【プレ開催】令和７年７月５日 (土)
【第１回】令和７年 10 月４日 (土)
【第２回】令和７年 11 月 30 日 (土)

開催場所　【プレ開催・第１回】高知県立大学永国寺キャンパス
【第２回】高知市立十津小学校

対　　象　高知県内の地域住民

参加者数　77 人

教 職 員　看護学部 教授　久保田 聰美、助教　塩見 理香／社会福祉学部 助教　乾 由美
健康栄養学部 講師　隅田 有公子
事務局：土居 誠（計５人）

(1) 事業概要

「つながる保健室」は、地域住民の健康支援を目的としたコミュニティイベントとして、令和７年度より実施している。本事業は、健康長寿研究センターおよび池キャンパスの３学部が連携し、「高知家地域共生社会」の実現に寄与することを目指し、主な目的は、以下である。

1. 住民同士の交流を深め、健康に関する情報を共有する場を創造する
2. 学生による実践的な学びの場を提供する
3. 健康長寿研究センターの研究成果を地域に還元する
4. 上記を通して、適切な保健・医療・福祉サービスへの「橋渡し」を担う

令和７年度は､高知県立大学リ･デザインプロジェクト「土曜の永国寺カフェ」との共同開催を２回､「みさとフェア」への出張開催を１回の計３回実施した。

また、昨年の直前に中止となった、四万十町での体験型セミナーに関しても、つながる保健室 in 四万十町という位置づけで実施した。四万十町での事業報告については、別途報告書を参照されたい。

(2) 活動成果・評価

1. プレ開催【土曜の永国寺カフェおよびみんなでサロンと同時開催】

日時：令和７年７月５日（土）

場所：高知県立大学　永国寺キャンパス　地域連携棟１階

参加者数：17 名（男性 5 名、女性 11 名、未記入１名）20 代～ 80 代以上

同時開催の事業が２つあったため、血管年齢や脳年齢測定等の機器測定を通して、ゲーム感覚で気軽に参加し、具体的な相談につながる事例が多かった。１名、SpO2 の低い相談者がいたが、主治医もおり、経過観察中であった。

2. 第１回【土曜の永国寺カフェと同時開催】
日時：令和７年 10 月４日（土）
場所：高知県立大学　永国寺キャンパス　食堂
参加者数：22 名（男性 1、女性 9、未記入 12）50 代～ 90 代、80 代以上 50%

土曜の永国寺カフェと同時開催のため、高齢者が多かった。残暑が厳しい時期であったため、脱水傾向のある相談者が多かった。血管年齢測定で要精密検査となる相談者も２名おり、日常生活のふりかえりと同時に主治医相談を促した。

また、カフェのミニ講話「病院と医療の上手な活用法」の時間もあったため、参加者との意見交換や情報共有も深まった。

3. 第２回【みさとフェアにて高知医療センターチームと一緒に参加】
日時：令和７年 11 月 30 日（土）
場所：高知市立十津小学校
参加者数：38 名（男性 6、女性 22、未記入 10）

小学校の土曜参観日の後の時間帯を活用した場であったため､子育て世代の母親からの相談が多かった。相談内容は、血圧、便秘、肥満、貧血、主治医との関係、食生活の相談等、多岐にわたった。

【活動評価】

３回の活動を通して、目的１の「相談の場創り」に関しては、概ね達成できた。

目的２の学生による実践的な学びの場については、社会福祉学部や健康栄養学部の学生の参加は多数あったものの、看護学部の学生の参加がなかった。みさとフェアにおいては、災害看護学生チーム SIT が別の目的で参加していたが、そうしたチームとのつながりも強化していきたい。

目的３．４に関しては、初年度の活動のデータから、相談者のニーズを丁寧に分析し、具体的な相談内容に対応できるチーム編成に活かしていきたい。

上記の課題を解決するためにも、次年度は、参加者の相談内容を構造的に把握し、データの比較分析ができるアセスメントシートを作成していく。

（3）つながる保健室　相談の様子


①脳年齢測定


②血圧測定

2 「転びにくい体を一緒につくろう！！」つながる保健室 in 四万十町

看護学部 助教　塩見 理香

活動ポリシー　1　高知県の皆様に対し、健康長寿を啓発する活動
5　高知県の健康長寿および地域共生社会の調査･研究および社会実装に向けた活動

開催日時　令和７年９月 26 日（金）14 時～ 16 時

開催場所　四万十町十和地域振興局２階大ホール

対　　象　四万十町住民

参加者数　15 人

教 職 員　看護学部 助教　塩見 理香／社会福祉学部 准教授　辻 真美、助教　乾 由美
健康栄養学部 助教　杉本 拓海
事務局：土居 誠、倉橋 孝幸、安並 妙子（計７人）

(1) 事業概要

四万十町十和地域は、四万十町でも県境近くの山間部であり森林が多く、坂道も多い地域である。2023年の人口は1,196人であり、高齢化率も52.4％と四万十町の中でも高齢化が進んでいる。医療資源としても、町内には診療所のみのため、県外（宇和島市）まで通院する住民も多い。そうした背景の下、地域で暮らす高齢者は、生まれ育った地域で長く住み続けたいという希望をもち、住民なりの工夫で健康管理を行っている。坂道の多い山間部で生活する高齢者にとっては、地域で暮らし続けるための最重要課題でもある「転倒予防」をテーマとし、以下の３点を目的とした事業を実施した。

1　高齢者が転倒の要因やリスク要因（筋力低下、視力・聴覚の低下、環境要因）を理解し自分自身の転倒リスクに気づくことができる。
2　体操に参加することで、楽しみながら筋力アップができる。
3　参加者が本講座を通して得た知識を日常生活の中で活用し、健康で安心して過ごせる環境創りにつなげることができる。

事業内容としては、転倒予防に関する基本的な知識を整理した講演会後に具体的な運動（新聞棒体操）の実技と個別の健康相談を実施した。

(2) 活動成果・評価

目的①については、「転倒」の多くが屋外ではなく自宅で発生していることや、わずかな段差、コード類、床に置かれた物などが転倒の原因となること、さらに下肢筋力の低下だけでなく、加齢に伴う白内障や老眼、聴力の低下による身体バランス機能の低下も転倒の要因となることについて講義を行った。参加者からは「そうなんだ」といった反応が見られ、身近に潜む転倒リスクへの気づきにつながった。

目的②については、新聞体操で、無理のない範囲で体を動かすことで「貯筋」ができることを参加スタッフと一緒に楽しみながら運動をすることができた。体操後は、血管年齢測定、栄養相談、握力測定などを行い自分の体力や体調を再認識し、目的③の達成に繋がった。さらに、参加者からは普段実施している健康管理や、十和村のいいところなどについてもお話してくださった。そして、新聞棒作りでは、皆と雑談をしながらサロン活動のような雰囲気で作成することができた。アンケートからも「また、いらしてください」「とても楽しい研修でした」「皆でやると楽しくてよかったです」などのコメントをいただいた。

（3）つながる保健室 in 四万十町の様子



①教員による講演



②新聞棒体操



③新聞棒作成



④血管年齢測定体験



（2） 健康長寿に係る研究活動

1　地域住民の健康・厚生の向上に向けた実証分析と社会実装・県内自治体の伴走型支援に関する研究

健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行

活動ポリシー　5　高知県の健康長寿および地域共生社会の調査･研究および社会実装に向けた活動
開催日時　通年
開催場所　津野町他
対　　象　保健師、行政職員
参加者数　20 人
教 職 員　健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行 / 看護学部 助教　源田 美香
事務局：土居 誠（計 3 人）

（1）事業概要

本学と研究連携協定を締結し、地域共生社会の推進の様々な取り組みを行っている津野町と連携し、地域住民の健康ならびにウェルビーイング向上に向け､関連要因の検討を深める基礎的なデータ分析を行う。また、この基礎的実証分析で得られる知見に基づく社会実装として、県内自治体・地域における在宅療養福祉ならびに生活支援の課題解決に向けた現状分析・評価・解決策の提言とフォローを含む伴走型支援を進める。

（2）活動成果・評価

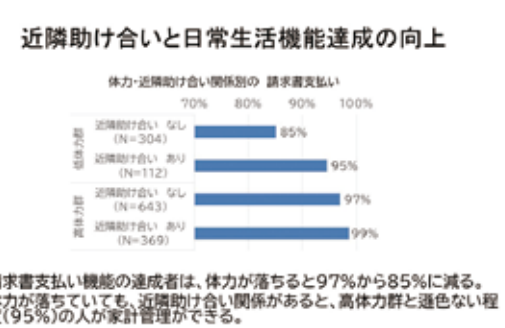
日常生活圏域ニーズ調査の回答者データを分析し、地域共生社会の推進と住民個人の健康・ウェルビーイング実現との関連について基礎的分析を進めた。この分析の過程から、特に中山間地域高齢者の日常生活機能とウェルビーイングの関連を検証するとともに、実証結果を自治体地域包括支援センター、県庁在宅療養推進課に提示して専門職からヒアリングを行い、中山間地域において高齢者が在宅生活を継続する支援施策について情報共有を図った。分析結果の一部は自治体専門職と学会報告を行って、大学と地域で活躍する専門職との間の研究協力体制を構築し、協働を進めた。

【研究成果】

小林秀行 , 源田美香 . 中山間地域高齢者における近隣助け合いとウェルビーイング向上との関連 . 公共選択 82: 22-32, 2026 年 .

岡村晃子 , 源田美香 , 小林秀行 , 池香 . 中山間地域高齢者の近隣助け合いと日常生活機能の関連―「もうちょっと居ろうや」に向けて . 第 71 回四国公衆衛生学会総会 , 2026 年 2 月、高知市 .

（3）分析結果





2　小児健診・健康行動調査に関するデータ分析研究



健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行

活動ポリシー　1　高知県の皆様に対し健康長寿を啓発する活動
開催日時　通年
開催場所　土佐市保健福祉センター、土佐市内小中学校等
対　　象　小学５年生～中学２年生
参加者総数　394 人
教 職 員　健康長寿研究センター 准教授　小林 秀行
看護学部 助教　田之頭 恵里、助教　徳岡 麻由、助教　源田 美香
事務局：土居 誠、福重 彩音（計６人）
学生スタッフ　看護学研究科　１人

(1) 事業概要

子どもの肥満傾向や壮年期の健診受診率の低迷を受け、県内の自治体においては、児童・生徒とその家族が将来にわたって健康的な生活を送れるよう生活改善の機会を提供することを目的に児童・生徒の生活習慣病予防健診が実施されている。本学と土佐市との連携事業の一環として、土佐市の開催する小児予防健診の支援を行う。加えて、前年度より土佐市教育委員会養護部会と連携して、児童・生徒の健康行動調査のデータ分析を行う。

子どもの健康ならびにウェルビーイングの向上に資する地域保健施策の提言や学術研究の推進を図れるよう、児童・生徒や家族の健康観・生活習慣・健康行動と健診データとの関連について実証分析を行う。

(2) 活動成果・評価

小児生活習慣病予防健診の受診者ならびに市内全小中学校の対象学年の児童・生徒に対して、身体面・心理面・社会面の指標や健康行動との関連について質問紙調査を実施した。子どもの健康上の問題について個人をとりまく生活背景・状況を考慮した実証分析を実施した。また、子どもの健康行動に関する国際評価指標日本語版の信頼性・妥当性の検討を進めた。

調査結果については地域の専門職（保健師、管理栄養師、養護教諭）と討議を行い、子どもの健康的な生活の実現にむけた情報共有を行った。また、本調査の報告は教育委員会や学校長会で取り上げられた。分析結果の一部は地域の専門職と学会報告を行って、大学と地域で活躍する専門職との間の研究協力体制を構築し、協働を進めた。

【研究成果】

小林 秀行 , 田之頭 恵里 , 徳岡 麻由 , 源田 美香 . 小中学生の寝だめと健康・ウェルビーイングの関連 . 第 45 回日本看護科学学会学術集会 , 2025 年 12 月 , 新潟市 .

元吉 直子 , 小林 秀行 , 西川 由莉 , 田之頭 恵里 , 源田 美香 . 小中学生の SNS 利用自己管理と健康・生活への影響に関する研究 . 第７１回四国公衆衛生学会総会 , 2026 年 2 月 , 高知市 .

（3）健診の様子



①アンケート回答の様子



②養護教諭らと実証結果を討議

3　Beans Education Project



看護学部 助教　徳岡 麻由

活動ポリシー　1　高知県の皆様に対し、健康長寿を啓発する活動
5　高知県の健康長寿および地域共生社会の調査･研究および社会実装に向けた活動

開催日時　通年

開催場所　各保育園、小中高校

対　　象　小中高校生

参加者数　学校数 11 校　児童生徒延べ 2554 人

教 職 員　看護学部 教授　久保田 聰美、准教授　中井 寿雄、助教　塩見 理香、助教　徳岡 麻由
事務局：土居 誠（計５人）

外部講師　高知工業高等専門学校 助教　脇田 翔平 氏

(1) 事業概要

本事業では、いのちのはじまりを視覚的に体感できるツールとして開発された「Beans Education Project (BEP) カード」を用いて性教育を展開し、高知県内の児童生徒を対象とした包括的性教育の普及に取り組んでいる。

本年度は、高校生の性意識と性的リテラシーの実態を踏まえた保護者向けの性教育教材の開発を目的として、本プロジェクトによる思春期性教育を実施した高等学校より、匿名化された授業評価アンケートの提供を受けて定量的分析を実施し、生徒の性的リテラシーの現状把握を行い、教育効果を検証した。

今後は県内の医療従事者、養護教諭、地域の保健師、社会福祉士、心理士等との多職種連携を進め、生徒の性的リテラシー向上を目的とした地域横断的な教育ネットワークを構築するとともに､開発中の｢BEP カード」の効果検証を推進する。さらに研究結果を基に、生徒の性意識の実態やリテラシーを考慮した保護者向けの教材開発を進め、持続性のある包括的性教育を推進する。そのために地域社会と密に連携した定量的評価を継続的に実施し、実践と研究を一体として実装に結びつけていく地域貢献に資するエビデンスの確立を目指す。

(2) 活動成果・評価

BEP カードを用いた包括的性教育は着実に実施校が増え、誰でも使える簡便さから、性教育を実施している専門職から使用依頼を受けることも増えてきている。また助産師のみならず、養護教諭や学校教員にもカードの認知が広まり、教育効果を実感したという声をいただいている。BEP カードを使用した活動は、視覚を通じていのちのはじまりを実感するという教育効果だけでなく、カードを持ち帰ることで家庭内での性やいのちにまつわるコミュニケーションを促進することに寄与し、家庭とのつながりのある包括的性教育への一助となっている。

さらに本年度は、高校生の性意識と性的リテラシーの実態を踏まえた保護者向けの性教育教材の開発を目的として､本プロジェクトによる思春期性教育を実施した高等学校より､匿名化された授業評価アンケートの提供を受けて定量的分析を実施し、生徒の性的リテラシーの現状把握を行い、教育効果を検証した。

その結果、インターネット上の情報のみで性の情報を取得している人よりも、多様な情報源から性情報を取得している人のほうが、性暴力について相談できる人が存在する可能性が示された。すなわち、性情報をインターネットのみに頼っている生徒は、孤立しやすく、性暴力について相談できる他者がいない可

能性が示唆された。インターネット上の情報には、不確かな情報が含まれていることを考慮すると、生徒には対人による性教育や他者と性に関する情報を共有できる環境の整備の必要性が示唆された。今後はどのような生徒がインターネットのみで情報取得をしているかなど、より詳細な調査が必要である。研究結果は、第 71 回四国公衆衛生学会総会・令和 7 年度四国公衆衛生研究発表会にて口頭発表し、現在国内英文ジャーナルへ投稿中である。

(3) BEP カードを使用した講座の様子



① BEP カード



② BEP カードを使用した教育

4　健康長寿に係る研究等一覧



(1) 事業概要

健康長寿に係る研究や、学会発表等をここに示す。

(2) 活動成果

【学会発表・シンポジウム等】

①第 71 回四国公衆衛生学会総会　令和 7 年度四国公衆衛生研究発表会
令和 8 年 2 月 13 日（金）高知市文化プラザかるぽーと
タイトル：高校生における性暴力の相談相手と性情報源との関連
発表者：看護学部 助教　徳岡 麻由、准教授　中井 寿雄、教授　久保田 聰美

（3） 高知県内の医療・健康・福祉専門職者育成に資する活動

1　高知県中山間地域等訪問看護師育成講座



看護学部 准教授　森下 幸子

活動ポリシー　2　高知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動
6　高知県の地域共生社会に携わるリンクワーカーの育成に関する活動

開催日時　【前期 訪問看護スタートアップ研修】
・令和７年４月 23 日（水）～令和７年７月 23 日（水）（９時 30 分～ 16 時 30 分）
・開講：令和７年４月 22 日（火）
・全域枠修了証書授与：令和７年７月 23 日（水）
・中山間枠（新任スタンダードコース）修了証書授与：令和７年９月 24 日（水）
【後期 訪問看護スタートアップ研修】
・令和７年 10 月８日（水）～令和７年 12 月 24 日（水）（９時 30 分～ 16 時 30 分）
・開講：令和７年 10 月７日（火）
・全域枠修了証書授与：令和７年 12 月 24 日（水）
・新卒枠、中山間枠（新任スタンダードコース）修了証書授与：令和８年３月 17 日（火）

開催場所　高知県立大学池キャンパス 本部健康栄養学部棟 A301 他

対　　象　訪問看護ステーションに勤務する新卒・新任訪問看護師及び病院等に勤務する看護師　他

参加者総数
・講座受講者 12 人：新卒枠１人、中山間枠５人（新任スタンダードコース５人）、全域枠６人（通年２人）
・新任訪問看護師短期研修プログラム受講者：延べ 159 人（実人数 31 人）
・修了者フォローアップ研修受講者：延べ 92 人（実人数 40 人）
・新卒２年目フォローアップ：１人

教 職 員　【高知県立大学】看護学部：教授　田井 雅子、特任教授　森下 安子、准教授　畠山 卓也、准教授　川上 理子、准教授　有田 直子、准教授　田代 真理、准教授　森下 幸子、講師 山中 福子、助教　塩見 理香、助教　竹中 英利子、助教　上村 明咲、特任助教　井上 加奈子 / 社会福祉学部：助教　山本 大輔 / 健康栄養学部：講師　隅田 有公子
事務局：三本 雅宣、倉橋 孝幸、福重 彩音（計 17 人）

外部講師　【高知医療センター】山﨑 みどり 氏、片岡 薫 氏、岡村 かのこ 氏（計３人）
【外部】小野 哲郎 氏（高知県健康政策部在宅療養推進課）、松本 務 氏（あおぞら診療所高知潮江）、中川 宏治 氏（福田心臓・消化器内科 形成外科・皮膚科）・有田 佳史 氏（高知県歯科医師会）、堤 智子 氏（高知県歯科衛生士会）、伊藤 悠人 氏（高知県薬剤師会）、小原 弘子 氏（高知学園短期大学）和田 庸平 氏（訪問看護ステーション なかやま楽校）、下元 佳子 氏（ナチュラルハートフルケアネットワーク）、鈴木 香 氏（高知県社会福祉協議会）（計 10 人）
【修了者フォローアップ研修】竹崎 陽子 氏（高知医療センター）、安岡 しずか 氏（高知中央訪問看護ステーション）、山本 詩帆 氏（近森病院）、窪内 真巳子 氏（ほっとこころこうち相談室）、文 裕恵 氏（あおぞら診療所高知潮江）（計５人）

(1) 事業概要

本講座は、平成 27 年度から県内の中山間地域等の訪問看護師の確保・育成・定着及び小規模訪問看護ステーションの機能強化を目的に、「中山間地域等における新任・新卒訪問看護師育成プログラム」を開発し、大学の教育力・学習環境を活かして、中山間地域等の訪問看護ステーション（以下訪問看護 ST）と協働し、新任・新卒訪問看護師育成に取り組んでいる。事業展開は、高知県医師会、高知県看護協会、高知県訪問看護連絡協議会、高知医療センター、高知県社会福祉協議会、高知県と連携し、大学内では看護学部、社会福祉学部、健康栄養学部の協力のもと、高知県の地域包括ケアシステムの核となる質の高い看護実践力をもつ訪問看護師の育成、中山間地域等の訪問看護推進ならびに連携強化を目指している。また、本講座の研修等は中山間地域等からの受講促進を目的に、対面とオンラインを併用し、欠席時のオンデマンド受講に対応できるよう ICT 活用を推進している。

主な事業内容は、１）新任・新卒訪問看護師育成プログラム企画・運営・評価、２）学習支援者研修会・検討会の開催、３）実地研修（OJT）における同行訪問・コンサルテーション、４）ICT を活用した継続的な学習支援・学習評価、５）福祉保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議の開催、６）参画団体による企画会議（年２回）の開催、７）修了者フォローアップ研修の開催、８）修了者ネットワークの推進、９）修了者のコンサルテーション、10）協力機関との役割調整・支援体制の構築、11）広報活動等である。

運営は、寄附講座責任者（在宅看護学准教授）、教員、事務局（企画調整課）の教職員が、連絡調整会議を月に１回開催し、本講座の企画、運営、実施、評価に関わる全ての検討を行った。

(2) 活動成果・評価

１）訪問看護スタートアップ研修の概要

本研修は、本講座の目的を達成するための研修として位置づけており、目的、目標、カリキュラム、研修の特徴、対象者、講師、自己評価、修了要件は以下のとおりである。

①研修目的

新卒・新任訪問看護師が訪問看護に必要な基本的な知識・技術を習得し、在宅（暮らしの場）において個別性のある看護の提供、地域の多職種連携を促進し、単独で訪問看護ができる実践力を獲得することである。

②研修後の到達目標

医療資源が少ない中山間地域等において医療と生活を統合した看護提供が必要であることを踏まえて、新卒・新任訪問看護師に必要な基本的能力 14 項目（表１）に基づいた学習課題 11 項目（表 2）と研修後の目指す姿（表３）を設定している。

表 1：基本的能力

① 基本姿勢	⑥ 自己啓発	⑪ 在宅看護過程
② 倫理	⑦ エンパワメント	⑫ リスクマネジメント
③ コミュニケーション力	⑧ 家族支援	⑬ 情報管理
④ 人間関係・連携能力	⑨ 在宅看護知識・技術	⑭ 組織運営・管理
⑤ 教育指導	⑩ 感染管理	

表 2：学習課題

① 社会情勢や訪問看護制度に基づく訪問看護の概要・特性・役割の理解
② 在宅療養者の心身状態の的確なアセスメント方法の理解と習得
③ 訪問看護に必要な基本的な訪問看護技術の習得
④ 訪問看護実践に必要なコミュニケーションスキルの習得
⑤ 在宅療養者と家族の状況に応じた療養生活実現のための看護計画の立案と実施･評価
⑥ 訪問看護の場の特性や療養者・家族の個別性に応じた看護の展開
⑦ 多職種協働や継続看護のためのマネジメントの理解とスキルの習得
⑧ リスクマネジメントの理解と実施
⑨ ステーション組織の一員として、組織へのコミットメントと役割遂行
⑩ 訪問看護師として自分を活かすための自己研鑽
⑪ 訪問看護師としての倫理的感受性の獲得

表 3：研修後の目指す姿

1）単独で訪問看護ができる
2）個別的な看護過程の展開と訪問看護
　計画書・報告書が作成できる
3）24 時間の携帯当番を担うことができる
4）チームの一員としての役割を果たすことができる



③研修カリキュラム

学習課題を習得するために、研修カリキュラム（政策・制度、在宅ケアシステム論、訪問看護概論、ケアマネジメント論、訪問看護展開論・対象論・方法論）は 35 科目、138 時間（23 日）の講義・演習で体系化した。さらに地域の理解を深めるために「中山間地域の訪問看護（1.5 時間）」「生活困窮者の支援（1.5 時間）」の特別講義を開催した。1 科目は 1 コマ又は 2 コマ（1 コマ＝ 3 時間）とし、学習の目的、学習目標（到達目標）、内容をシラバスに明記した（表 4）。シラバスは省略。

表４：研修カリキュラム

	科目名	時間
在宅看護と保健医療福祉政策	在宅看護に関わる保健医療福祉政策の動向	3
	在宅看護に関わる看護政策の動向 訪問看護制度と法的枠組み	3
在宅ケアシステム論	在宅ケアシステム	3
	ｽﾃｰｼｮﾝの運営と管理、リスクマネジメント	3
訪問看護概論	在宅療養者を支援する看護概論	3
	中山間地域の在宅療養者を支援する 訪問看護の展開	3
訪問看護対象論	訪問看護の対象者のとらえ方	3
	在宅の対応困難な家族のケア	3
ケアマネジメント論	ケアマネジメント ーケアマネジャーとの連携ー	6
訪問看護展開論	在宅療養者の看護過程	6
訪問看護方法論	訪問看護師に求められるコミュニケーションスキル	6
	在宅におけるフィジカルアセスメント	6
	在宅療養者の日常生活への支援	6
	スキンケア・ストーマケアが必要な在宅療養者の看護	6
	在宅における薬剤管理	3
	在宅療養者の急変時の対応	3
	呼吸療法の必要な在宅療養者の看護	6

	科目名	時間
訪問看護方法論	排泄ケアが必要な在宅療養者の看護	3
	栄養アセスメントと食事の支援	3
	摂食・嚥下の支援が必要な在宅療養者の看護	3
	訪問看護における感染管理	3
	在宅リハビリテーション	6
	輸液管理が必要な在宅療養者の看護	3
	皮膚疾患と褥瘡治療	3
	慢性疾患をもつ在宅療養者の看護	3
	難病疾患をもつ在宅療養者と家族の看護	3
	在宅医療論	6
	医療的ケアを必要とする小児の在宅看護	3
	認知症をもつ人の在宅療養者の看護	3
	精神疾患をもつ在宅療養者の看護	3
	在宅看取りを支えるエンド・オブ・ライフ・ケア	3
	在宅がん緩和ケアの実践	3
	在宅療養者の歯科疾患と口腔ケア	3
	地域と医療の連携	3
	事例展開・特別講義	9

④研修の特徴

本研修は、少人数制、受講者の経験と学習習得状況に応じた個別プログラム、高機能シミュレーターを用いて訪問場面を再現した学習環境、専任教員による継続的なサポート、ICT を活用した研修が大きな特徴である。

具体的には、受講コースは目的に応じて新卒枠、中山間枠（新任スタンダードコース、新任セカンドコース、新任サードコース）、全域枠（通年コース含む）に分かれており、受講者の実践能力に応じてコース選択が可能である。研修は前期、後期の年２回開講し、15 人程度の少人数制である。医療資源等が少ない中山間地域等の特性を踏まえ、フィジカルアセスメントや急変時対応はシミュレーショントレーニングを行い、グループディスカッションやロールプレイ等の演習、事例展開を多く取り入れ、成人学習、経験学習理論を基盤に、主体的な学びを支援している。また、受講者の経験や習得状況に応じて事前学習、補充学習、深化学習を提案・実施し、大学での学びと訪問看護 ST や病院等職場での実践と振り返りが円滑に行えるよう支援を行なっている。令和７年度は遠隔地、仕事との両立、感染への配慮といった受講者ニーズに対応しオンライン・オンデマンド研修（欠席時）を併用した。

⑤研修で用いる主な記録用紙と評価方法

記録用紙は、訪問看護 ST の概要を理解するための「訪問看護ステーションの概要」、在宅看護過程を展開するための「利用者基本情報」、「アセスメントシート」、「訪問看護関連図」、「訪問看護計画書」、「訪問看護手順書」、研修と OJT の進行や評価のための「看護技術チェックリスト」「OJT 評価シート」、「同

行訪問記録」、「振り返り用紙」、単独訪問の見極めを行なうための「単独訪問チェックリスト」を用いた。振り返り用紙は実践（経験）の言語化、客観的な振り返りと論理的な情報や思考の整理につながっている。

研修評価方法は、「自己評価目標達成シート」を用いて、35 科目ごとの学習目標（157 項目）の到達度に関する自己評価を「非常に思う」から「まったく思わない」の５段階で行い、学びや振り返り、今後への活用性は自由記載としている。また新卒・新任者の目指す姿（５項目）、学習課題（11 項目）は研修修了時に５段階評価（自己評価）を行ない、他者評価とのすり合わせは面談を実施している。自己評価は、学習目標に対する自分自身の到達度を明らかにするものであり、適切に評価・記入がされる必要があるため、研修前に記入方法のオリエンテーションをし、受講者が研修の学びから経験を振り返り、これからの自己の課題に気づき主体的に学習に取り組めるよう支援している。

⑥研修の実施体制

研修講師は在宅看護学、慢性期看護学、小児看護学、精神看護学、総合･がん看護学、リハビリテーション、在宅医療、薬剤管理、歯科疾患、栄養管理、地域連携、皮膚創傷、摂食嚥下、感染管理の領域から推薦された専門職で、学内講師は看護学部 13 人、健康栄養学部１人、社会福祉学部１人、学外講師 11 人であった。職種は医師、歯科医師、歯科衛生士、薬剤師、理学療法士、社会福祉士、管理栄養士、専門・認定看護師及び看護師であった（表 5）。

表５：研修講師内訳

所属機関			人数
高知県立大学	専任教員		2
	看護学部	在宅看護学	2
		小児看護学	1
		総合・がん看護学	1
		精神看護学	2
		慢性看護学	2
		老人看護学	1
	社会福祉学部	高齢者福祉学	1
	健康栄養学部	臨床栄養学	1
包括連携	高知医療センター	摂食・嚥下障害看護認定看護師	1
		感染管理認定看護師	1
		皮膚・排泄ケア認定看護師	1
外部	高知県	健康政策部在宅療養推進課課長	1
	あおぞら診療所高知潮江	医師	1
	福田心臓・消化器内科形成外科・皮膚科	医師	1
	高知県歯科医師会	歯科医師・歯科衛生士	2
	高知県薬剤師会	薬剤師	1
	高知県社会福祉協議会	社会福祉士	1
	ナチュラルハートフルケアネットワーク	理学療法士	1
	高知学園短期大学	在宅看護学	1
	訪問看護ステーションなかやま楽校	看護師（管理者）	1

⑦研修対象者

研修対象者は看護師（准看護師含む）で、新卒枠は看護師養成機関を卒業もしくは修了し、県内の訪問看護 ST に採用された者、中山間枠は高知県内中山間地域等の訪問看護 ST に採用され原則２年未満の者、全域枠は高知県内で訪問看護に従事している者及び訪問看護に従事することを希望する者、病院・施設で入退院支援に従事している者とした。（詳細は募集要項等を参照）。

⑧研修スケジュール

中山間枠、全域枠、新卒枠のそれぞれの研修スケジュールを表６、表７、表８に示す。

表６：中山間枠スケジュール

	4 月 10 月	5 月 11 月	6 月 12 月	7 月 1 月	8 月 2 月	9 月 3 月
月	先輩と同行訪問			先輩と同行訪問		
火	AM 前週の振り返り PM ケースプレゼンテーション			AM 前週の振り返り・事例展開 コンサルテーション PM ケースプレゼンテーション		
水	AM 講義・演習 PM 講義・演習			先輩と同行訪問		
木	AM 講義・演習 PM 講義・演習			先輩と同行訪問		
金	先輩と同行訪問			専任教員との同行訪問 振り返りカンファレンスなど		

表７：全域枠スケジュール

	4 月 10 月	5 月 11 月	6 月 12 月	7 月 1 月	8 月 2 月	9 月 3 月
月						
火				希望者は大学での ケースプレゼンテーションに 参加		
水	AM 集中講義・演習 PM 集中講義・演習					
木	AM 集中講義・演習 PM 集中講義・演習					
金						

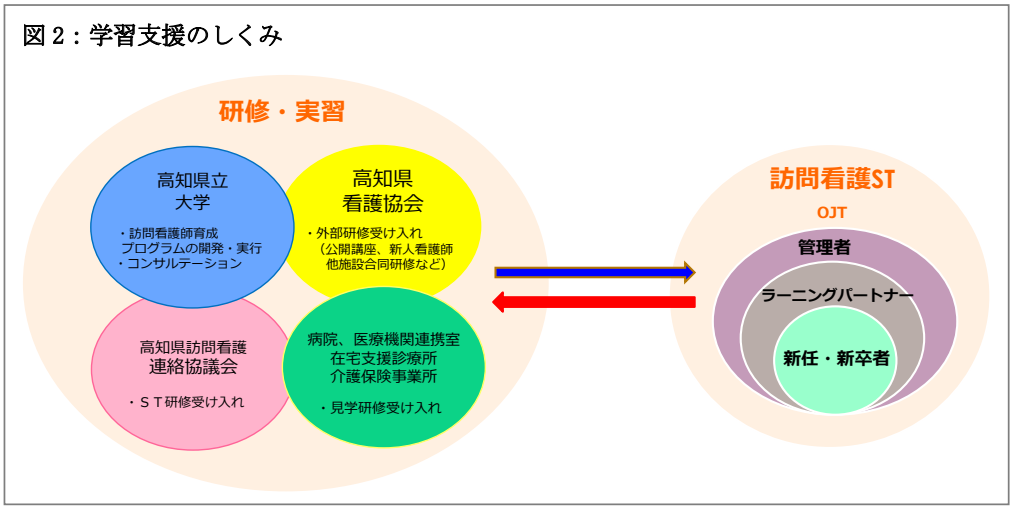
表８：新卒枠スケジュール

		4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
OJT	訪問	同行訪問 →											
		時間差訪問 →											
						複数名訪問 →							
		単独訪問 →											
	その他	職場内新人研修　等	車運転看護記録等			手順書作成	計画書・報告書作成	単独訪問見極め					
大学	研修	4 月開講：講義・演習 週 3 日 →					週 2 日 →	週 1 日 →					
	新卒枠	振り返りカンファレンス（週 1 回：大学、後半以降は週 1 回訪問看護 ST） →											
		技術チェック		0JT・技術チェック			0JT・技術チェック			0JT・技術チェック			0JT・技術チェック
			地域調べ	フィジカルスキルチェック研修①	フィジカルスキルチェック研修②	新卒経験者との研修				フィジカルアセスメント①	フィジカルアセスメント②		フィジカルアセスメント③
			グループリフレクション 知識・技術の補充学習			ケースプレゼンテーション → 受け持ち事例の展開（4~6 例） →							
外部	実習	高知医療センター 手技向上研修		福祉機器の見学				医療センター病棟研修（２年目）14 日間			居宅支援事業所、介護老人保健施設 地域連携室		

⑨学習支援のしくみ

学習支援は５人以下の小規模な訪問看護 ST においても新卒・新任訪問看護師の育成が促進されるよう、各組織のなかで役割を分担した。教員は訪問看護 ST の管理者や学習支援者（ラーニングパートナー）と連携し、講義・演習、OJT（実地研修）を通して支援する（図 2）。

図２：学習支援のしくみ



⑩学習支援者の役割と支援方法

訪問看護 ST の管理者及び学習支援者の役割と支援方法は、表 9、10 のとおりである。

表９：訪問看護 ST 管理者の役割と支援方法

訪問看護ステーション　管理者	
役割	**支援方法**
・ステーション全体で新任看護師を支援できる環境を整備する ・ラーニングパートナーの勤務と学習を両立できる体制を整える ・新任訪問看護師育成に対するモチベーションを維持するためのスタッフの支援を行う ・新任訪問看護師育成プログラムの計画、実施、評価の統括を行う	・訪問看護師育成プログラムの月ごとのスケジュールを作成する ・訪問事例の選定と同行訪問・時間差訪問の計画を立てる ・学習課題の解決、進捗状況の把握、スケジュール調整を行う ・プログラムの進捗状況や新任看護師の学びをステーション内で共有する場を設ける ・新任看護師の学習支援と学習環境調整を行う

表 10：学習支援者（ラーニングパートナー）の役割と支援方法

訪問看護ステーション　学習支援者（ラーニングパートナー）	
役割	**支援方法**
・個々の新任看護師を受け持ち、育成にあたる ・社会人、組織人、先輩訪問看護師として、ロールモデルとなる	・利用者ごとのケア方法の確認と、同行訪問時の指導、振り返り、記録の確認をする ・経験や技術の習得状況を確認し、支援する ・OJT 評価シートを用いた面接、振り返りカンファレンスを行う ・コミュニケーションを通したメンターシップをはかる ・学習支援の進捗状況を他のスタッフと共有する ・新任看護師の学習を促し、学習環境調整を行う

⑪実地研修（OJT）

中山間枠受講者（以下、新任者）および新卒枠受講者（以下、新卒者）は、研修期間中は週１日、大学において、訪問看護同行記録や振り返り用紙を記入、個人面談を行い、実践した看護の振り返りから課題を抽出し行動目標の立案を行った。実地研修中には、教員が訪問看護 ST に出向き、新卒者の単独訪問への同行や管理者や先輩看護師とともに月１回～２週に１回、１回 30 分間程度の振り返りカンファレンスを開催した。

２）受講実績と目標達成度

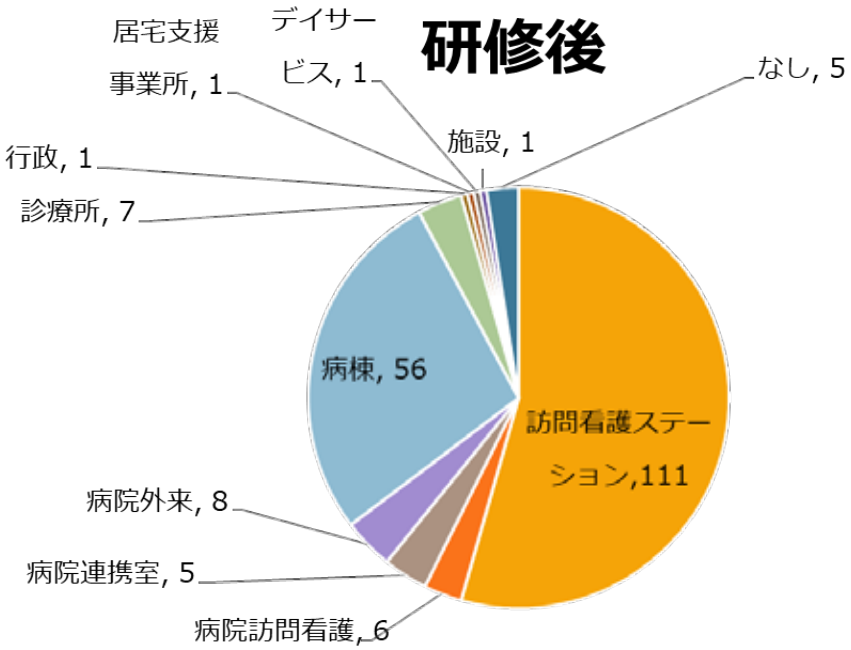
①受講者数及び内訳

令和７年度の研修受講者は、前期・後期合わせて、新卒枠１人、中山間枠５人（新任スタンダード５人）、全域枠６人の合計 12 人であった。平成 27 年からの研修受講者数は 205 人となり、新卒枠 19 人（訪問看護 ST13 事業所、うち１人辞退）、中山間枠 54 人（訪問看護 ST20 事業所）、全域枠 132 人（訪問看護 ST24 事業所、病院・診療所等 25 施設）で、中山間地域からの受講は 61 人となった（表 11）。受講者の年齢は 20 ～ 69 歳（平均 39.3 歳）、男性 13 人、女性 192 人であった。看護師経験年数は０～ 38 年（平均 13.7 年）、訪問看護師経験月数は０～ 78 ヶ月（平均 3.3 ヶ月）であった。受講開始時の所属先は訪問看護 ST112 人、病院・診療所・行政等 87 人、所属なし６人であった。所属先等の地域（保健所管内別）は安芸 14 人、中央東 52 人、高知市 82 人、中央西 26 人、須崎６人、幡多 25 人であった。また、研修修了後の就業調査では訪問看護 ST の就業が継続されていた。

表 11：受講者の内訳

	新卒枠 (12ヶ月)人件費補助金活用		中山間枠 (3～6ヶ月)人件費補助金活用		全域枠 (3ヶ月・通年)				合計(名)
所属	訪問看護ステーション		訪問看護ステーション		訪問看護ステーション		病院・診療所ほか		
地域別	中山間地域	以外	中山間地域	以外	中山間地域	以外	中山間地域	以外	
H27 後期			5	1	1	1	2	1	11
H28 前期		1	3	2	0	1	0	4	11
H28 後期			3	0	1	2	3	5	14
H29 前期	2	4 *1名コース変更	1	0	0	0	3	5	15
H29 後期			0	0	2	4	2	5	13
H30 前期	1	2	0	0	1	3	0	5	12
H30 後期			0	0	3	2	0	4	9
R1 前期	1	1	2	2	0	0	1	2（通年2）	9
R1 後期			2	2	1	1	0	5	11
R2 前期	1	1	2	0	0	1	0	4（通年１）	9
R2 後期			1	1	0	0	1	3	6
R3 前期	0	0	2	2	0	1	0	4（通年１）	9
R3 後期			0	0	0	3	0	5	8
R4 前期	0	2*1名辞退	0	2	0	1	0	4（通年１）	9
R4 後期			1	1	1	2	3	4	12
R5 前期	0	1	1	3	0	2	0	5	12
R5 後期			2	1	0	0	0	3	6
R6 前期	0	1	2	2	1	1	0	3（通年１）	10
R6 後期			1	2*1名コース変更	0	0	1	3	7
R7前期	0	1	1	2	0	1	0	2（通年2）	7
R7後期			0	2	0	2	0	1	5
枠合計	5	14	29	25	11	28	16	77	205
	19		54		39		93		

図 3：新卒者の修了後の就業状況



②高知県中山間地域等看護師育成プログラムの評価

令和 7 年度受講者 12 人の訪問看護スタートアップ研修 35 科目 157 項目の学習目標の到達度を「とても思う」から「まったく思わない」までの 5 段階で評価した自己評価点の平均は 4.0 ± 0.77（標準偏差）であった。また、新卒枠 1 人、中山間枠スタンダードコース 5 人の修了時の目指す姿（5 項目）及び学習課題（11 項目）の自己評価は、ほぼ全員が「かなりできた・まあまあできた」と捉えており、大学での研修や振り返り、現場での OJT を通して単独訪問を実践し、訪問看護 ST の一員としての役割を担い訪問看護に携わることができていた。

平成 27 年から令和 7 年度までの 11 年間のプログラム運用を通じて、新卒・新任訪問看護師及び訪問看護 ST が捉える「学び・成長・成果」と「学習支援における課題」が明らかとなった。

学びの過程では、日々の訪問看護の実践と振り返りを通じた「気づき・判断・実践・評価」のサイクルにより、【訪問看護師としての実践能力を獲得】していた。また、定期的な知識・スキルの評価は【自分なりにできるという自信】につながり、訪問件数の増加や困難な経験（知識・スキル不足、時間管理、ヒヤリハット等）を、自分で模索し先輩や仲間の支えで乗り越えることで、【困難を乗り越える力】を習得していた。また、受け持ち事例を通じて生活者視点や家族支援を学び、【訪問看護師としての看護観の醸成】や【目標とする訪問看護師像の確立】、さらには中山間地域で生活することを支えるための【地域連携の理解と関係構築】へと発展していた。特に新卒者の成長は、訪問看護 ST 全体の学習意欲の波及や看護実践の拡大に寄与していた。

学習支援の課題（表 12）において、新卒者は教育と実践の乖離、看護技術習得への焦り、先輩・指導者によって方法が異なることへの戸惑い、コミュニケーションの困難、自己評価と他者評価の不一致による目標の喪失感など、様々な課題を抱えていた。臨床経験のある新任者も同様に、コミュニケーションや臨床判断、医療と生活を統合した個別的な看護展開、多職種連携など、これまでの経験が通用しない場面に直面しており、経験や価値観感を再構築し、新たな職場へ適応するための支援が必要であることが示唆された。

事業所の管理者や学習支援者も、新卒・新任者を深く理解し、個々に応じた育成を行うために、自分の看護観や臨床経験を再考しながら育成にあたる必要がある。管理上は利用者・家族、関係者への説明、シ

フト調整、安全確保、人件費負担といった課題も存在する。これらの課題に対して、受講者の特性や成長に合わせた目標設定、訪問看護 ST の教育体制への支援、新卒者や修了者のフォローアップ研修、大学によるリフレクションや自己学習支援の強化、人材を育てる地域づくりへの支援に重点的に取り組む必要がある。

表 12：学習支援の課題

事業所の運営管理上の課題	・勤務調整の困難とスタッフの負担増大 ・労務管理上の問題への対応 ・時間外勤務の発生 ・効率的な訪問スケジュールと同行訪問の調整 ・情報共有のしづらさ ・事業所内の雰囲気の変化 ・利用者との人間関係の変化 ・安全上の配慮（ケア・交通・事故） ・新卒育成への責任感（スタッフとしての受け入れ）
受講者が抱く困難	・教育と看護実践との違い（主体的な学びへの戸惑い） ・知識技術習得の焦り ・自己評価と他者評価の不一致 ・研修目的と受講者が求めるもののズレ ・他者と比較することによる自信の低下 ・仕事と研修の両立・精神や体調面の不安 ・先輩との考え方の違い、コミュニケーションの難しさ ・ステーションでの居場所、役割の獲得
学習支援体制の課題	・教育支援への期待と実際の不一致 （実践現場のスピード感、期待するスキル獲得とのずれ他） ・受講者の学習到達度、学習課題に関する情報共有不足 ・訪問看護 ST 管理者や学習支援者との学習目標、方法の合意形成

3）学習支援者研修会・検討会の開催

新卒・新任者の所属する訪問看護 ST の管理者や学習支援者を対象に、学習支援者研修会・検討会を計７回開催した（表 13)。

学習支援者研修会では、新卒・新任者の経験や学びを促進するための考え方や方法等をテーマに取り上げ、訪問看護 ST での学習支援の状況、課題の共有や意見交換を行った。第１回は、新卒訪問看護師育成の考え方と本研修の学習支援について、第２回は経験学習を促進するリフレクション、第３回は学習支援に活かすコーチング・コミュケーションスキル、第４回以降は学習支援の評価、今後の課題や対応、訪問看護 ST での学習支援の課題、OJT の進め方、学習支援体制の工夫等について共有した。新卒・新任者ともに、看護教育課程でコロナ禍を経験し領域によっては病棟実習が経験できず、対象理解や主体的な患者とのコミュケーションや接遇に課題がみられた。看護師としての臨床経験を有する新任訪問看護師は、疾病管理だけでなく対象者やその家族が、「地域」で暮らしているという視点をもって理解し、個別性のある看護や多職種連携を実践することが求められる。そのため新たな職場環境への適応にジレンマを抱えることも少なくない。個々の訪問看護の実践経験や独自の視点を活かしながら、在宅看護の考え方や対応方法を再構築していくために、大学で実践を振り返り、ケースプレゼンテーションなどで在宅看護のアセスメントや介入方法の視点などを話あうことが重要であることが共有された。

表 13：学習支援者研修会・検討会の開催

	日時・開催方法	内容	参加者数
第 1 回	令和 7 年 4 月 8 日（火） 17 時 30 分～19 時 対面：近森病院管理棟	①高知県中山間地域等訪問看護師育成事業費補助金について ②研修：新卒・新任訪問看護師の育成について ③訪問看護スタートアップ研修の学習支援のしくみ、訪問看護ステーションの役割と準備について ④訪問看護スタートアップ研修を活用した新卒訪問看護師育成の実際 ⑤意見交換	学習支援者 4 人 教　　員 2 人 高　知　県 2 人
第 2 回	令和 7 年 5 月 26 日（月） 17 時 30 分～19 時 永国寺キャンパスとオンライン併用	①研修 1 か月の状況‐学習支援と評価、課題や対応 ②研修：経験学習を促進するリフレクション ③現場と大学における新卒訪問看護師を育成するための課題と対策	学習支援者 5 人 教　　員 2 人 高　知　県 2 人 事　務　局 2 人
第 3 回	令和 7 年 7 月 24 日（木） 18 時～19 時 オンライン	①研修 3～4 か月後の状況―新卒・新任者育成の課題や対応 ②研修：学習支援に活かすコーチング ③新卒・新任者の OJT の進め方	学習支援者 5 人 教　　員 2 人
第 4 回	令和 7 年 9 月 17 日（水） 18 時～19 時 30 分 永国寺キャンパスとオンライン併用	①研修 5～6 ヶ月目の状況（実践・評価・課題） ②現場と大学の協働による新卒･新任訪問看護育成の課題や対応	学習支援者 4 人 教　　員 2 人 高　知　県 1 人
第 5 回	令和 7 年 11 月 11 日（火） 18 時～19 時 オンライン	①研修 1 か月の状況‐学習支援と評価、課題や対応 ②現場と大学における新卒訪問看護師を育成するための課題と対策	学習支援者 5 人 教　　員 2 人
第 6 回	令和 8 年 1 月 20 日（火） 18 時～19 時 オンライン	①新任者 1 か月、新卒者 9～10 か月の状況―学習支援と評価、課題や対応 ②現場と大学における新任･新卒訪問看護師を育成するための課題と対策	学習支援者 5 人 教　　員 2 人
第 7 回	令和 8 年 3 月 24 日（火） 17時30分～19時 対面：永国寺キャンパス	①大学での学習支援のまとめ（実績・評価・課題） ②現場と大学における新任･新卒訪問看護師を育成するための課題と今後の支援について	学習支援者 3 人 教　　員 2 人 高　知　県 2 人

4）新任訪問看護師短期研修プログラムの取り組み

本プログラムは、令和 6 年度より 19 科目を前期･後期で公開講座とし、令和 7 年度は 23 科目に拡大し、延べ 159 人(実人数 31 人)の受講があった。受講者の看護職経験は 1 年 7 か月～ 51 年(平均 18 年 3 か月)、訪問看護経験は 0 ヶ月～ 6 年 6 ヶ月（平均 1 年 6 か月）で、受講動機は、「訪問看護の知識・技術の習得」や「スキルアップや学び直し」、「困難事例への対応のため」等であった

5）新卒者・修了者フォローアップ研修

新卒 1 年目は、「新卒訪問看護師のキャリア」をテーマに先輩や仲間と交流を持つ機会をつくり、定期的なフィジカルフォローアップ研修を継続し、コミュニケーション、フィジカルアセスメントのスキル、臨床判断と実践力を高める研修を継続した。新卒 2 年目は病院機能の理解、看護技術習得を目的に、高知医療センターの手技向上研修、病棟研修に参加し、大学では事前の看護技術練習や振り返りを支援した。

修了者フォローアップ研修は、参加数は延べ 92 人（実人数 40 人）であった。研修は訪問看護ラダー体系にそった継続研修、最新実践研修などテーマ、講師を検討し、オンラインを併用し、訪問看護キャリアを支援する学びの体系化に取り組み、研修内容はフットケア、糖尿病とセルフケア支援、24 時間と緊急訪問、入退院支援における訪問看護の調整、ACP と看取り支援・エンゼルケアをテーマに、在宅看護・慢性期看護専門看護師、皮膚排泄ケア・緩和ケア特定認定看護師など経験豊富な講師から実践的な講義・演習を受け、アンケートでは満足度も高く今後に活かすための学びに繋がっていた（表 14)。新卒 1 年目には新卒フィジカルアセスメントフォローアップ研修を 3 回開催した（表 15)。

表 14：新卒 2 年目・修了者フォローアップ研修の開催日程

	日時	研修方法	研修テーマ・内容	実績
第 1 回	令和 7 年 5 月 24 日（土） 13 時 30 分～16 時 30 分	対面研修 （演習）	「高めよう在宅看護技術～フットケア～（演習）」 講師：あおぞら診療所高知潮江/ 皮膚・排泄ケア特定認定看護師　文　裕恵 氏	14 人
第 2 回	令和 7 年 7 月 11 日（金） 18 時～19 時 30 分	オンライン／ オンデマンド	「在宅におけるリスクマネジメント」 講師：高知県立大学看護学部/在宅看護専門看護師 井上 加奈子	15 人
第 3 回	令和 7 年 9 月 11 日（木） 18 時～19 時 30 分	オンライン／ オンデマンド	「訪問看護の 24 時間体制と緊急訪問への対応」 講師：高知県訪問看護連絡協議会会長/在宅看護専門 看護師　安岡 しずか 氏	20 人
第 4 回	令和 7 年 11 月 20 日（木） 18 時～19 時 30 分	オンライン	「糖尿病をもつ在宅療養者のセルフケア支援」 講師：高知医療センター慢性疾患看護専門看護師 竹崎 陽子 氏	9 人
第 5 回	令和 8 年 1 月 16 日（金） 18 時～19 時 30 分	オンライン／ オンデマンド	「入退院支援における訪問看護の調整」 講師：近森病院/在宅看護専門看護師　山本 詩帆 氏	20 人
第 6 回	令和 8 年 2 月 7 日（土） 13 時 30 分～16 時 30 分	対面研修 （演習）	「在宅における ACP と看取り支援、エンゼルケア」 講師：緩和ケア特定認定看護師/在宅看護専門看護師 窪内 真巳子 氏	14 人

表 15：新卒 1 年目フィジカルアセスメントフォローアップ研修の開催日程

	日時	内容	参加者数
第 1 回	令和 7 年 7 月 15 日（火） 14 時～15 時 30 分 看護棟 C112	新卒フィジカルアセスメントスキルチェック ・内容：長期寝たきり療養者のバイタル測定 ①療養者・家族へ説明、配慮ができる ②正しく体温・脈拍・呼吸・血圧測定が出来る ③全身の観察ができる	1 人
第 2 回	令和 7 年 12 月 2 日（火） 13 時 30 分～15 時 看護棟 C211	新卒フィジカルアセスメント① ・内容：寝たきりで肺炎となっている療養者への対応 ①アセスメントに必要な情報を収集できる ②収集した情報を用いてアセスメントができる ③アセスメント結果から必要な対応を考えることができる	1 人
第 3 回	令和 8 年 1 月 27 日（火） 13 時 30 分～15 時 看護棟 C211	新卒フィジカルアセスメント② ・内容：胸痛がある療養者への対応 ①アセスメントに必要な情報を収集できる ②収集した情報を用いてアセスメントができる ③アセスメント結果から必要な対応を考えることができる	3 人

6）修了者ネットワークの推進

令和 7 年度は、社会的処方研究会（9 月 27 日（土）13 時 30 分～ 15 時、池キャンパス大講義室にて開催）の本講座報告終了後、修了者交流会を開催し、修了者 4 人と教員等が現状報告など意見交換や交流を行った。

7）修了者対象のコンサルテーション

毎週月曜の午後を修了者対象のオフィスアワーとし、適宜、電話、メール、面談等で相談対応を行った。相談件数は 8 件で、内容はキャリア相談、事例相談などであった。

8）福祉保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議の開催

令和 7 年度は、安芸、中央東、幡多の各ブロックで開催した。各保健所管内における各市町村の在宅医療・訪問看護の現状と課題、及び訪問看護師育成への期待や要望について情報共有と意見交換を行った（表 16）。

【現状と課題】

中山間地域における少子高齢化と医療介護の人材不足は深刻であり、医療機関、訪問看護 ST においても人材確保が困難な状況にある。訪問看護の現場では、ゴミ出し等の生活支援のニーズへの対応が求められる一方で、人材不足から入浴介助等の基本的なサービス提供さえ限定的にならざるを得ない例もあり、行政や職種を超えた連携が必要不可欠となっている。また、かかりつけ医の不足や高齢化により受診困難例が増加しており、これに伴い、夜間・休日等の 24 時間対応における訪問看護師の負担も増大している。地域によっては、距離的な制約からリハビリや精神科訪問看護の導入が困難なケースや、ぎりぎりまで在宅療養を継続しても、在宅での看取り体制が不十分なために、終末期には病院入院を選択せざるを得ない事例が増加している。

【訪問看護師育成への期待や要望】

訪問看護の質を高めるために、利用者の生活や地域特性の理解、コミュケーション、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）や意思決定支援、緊急時の判断力、情報伝達スキル、多職種連携、災害対応、家族支援、制度の理解など、多岐にわたる教育の期待が寄せられた。また病院看護から在宅へ移行する看護師の離職防止に向けた支援の必要性も指摘された。

教育方法については、場所や時間を選ばず学べるオンライン･オンデマンド研修の継続のニーズは高い。新卒育成については、指導者の負担軽減や、新人同士の情報交換や交流などの提案もいただいた。

表 16：訪問看護推進ブロック会議の開催日程

ブロック	日時・場所	内容	参加者数
幡多	令和 7 年 11 月 21 日（金） 14 時 30 分～16 時 30 分 幡多福祉保健所	（1）高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の報告 （2）幡多福祉保健所管内の在宅医療、訪問看護の現状と課題について（報告と確認） （3）新任・新卒訪問看護師教育について	委　員　8 人 教　員　1 人 事務局　1 人
安芸	令和 7 年 11 月 28 日（金） 14 時 30 分～16 時 30 分 安芸市防災センター	（1）高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の報告 （2）安芸福祉保健所管内の在宅医療、訪問看護の現状と課題について（報告と確認） （3）新任・新卒訪問看護師教育について	委　員　8 人 教　員　2 人 事務局　1 人
中央東	令和 7 年 12 月 12 日（金） 14 時 30 分～16 時 30 分 中央東福祉保健所	（1）高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の報告 （2）中央東福祉保健所管内の在宅医療、訪問看護の現状と課題について（報告と確認） （3）新任・新卒訪問看護師教育について	委　員　2 人 オブザーバー2 人 教　員 1 人 事務局　1 人

9）参画団体による企画会議の開催

本講座の運用にあたり、高知県医師会、高知県看護協会、高知県訪問看護連絡協議会、高知医療センター、高知県社会福祉協議会、高知県の関係協力団体による企画会議を年 2 回開催した。本講座の事業報告、新卒・新任訪問看護師育成の課題や対策、新卒訪問看護師手技向上研修、インターンシップ、令和 7 年度訪問看護実態調査の報告、次年度事業計画について協議し、高知県の訪問看護推進や人材育成について意見交換が行われ、次の課題について方策を検討した。

表 17：企画会議の開催日程

	日時・場所	内容	参加者数
第 1 回	令和 7 年 9 月 16 日（火） 18 時 30 分～20 時 30 分 高知県立大学池キャンパス	（1）高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の報告 （2）新卒 2 年目・修了者フォローアップ研修について （3）新任訪問看護師短期研修プログラムについて （4）新卒訪問看護師手技向上研修について （5）インターンシップ受け入れ状況について （6）令和 8 年度について （7）企画会議に関わる関係機関の役割	委員 8 人 オブザーバー 2 人 事務局 2 人
第 2 回	令和 7 年 11 月 19 日（水） 18 時 30 分～20 時 30 分 高知県立大学池キャンパス	（1）高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の報告 （2）新卒訪問看護師手技向上研修について （3）令和 7 年度訪問看護実態調査について （4）令和 8 年度について	委員 8 人 オブザーバー 2 人 事務局 3 人

① 受講者の確保について

近年の受講者減少を受け、現行の訪問看護スタートアップ研修全体を見直し、カリキュラム・科目数の見直し、オンライン開講科目の拡充、短期研修プログラム及びフォローアップ研修の科目数の拡充等を行うことで、より受講しやすい形への移行を協議した。また、令和7年度高知県訪問看護実態調査の結果を踏まえ、中山間地域の訪問看護STだけでなく、高知市とその周辺の訪問看護STや新規開設STからの受講を促進するために、講座やコースの名称変更等について協議した。

② 新卒・新任訪問看護師の育成および手技向上研修について

新卒者1年目プログラムは、大学の研修・振り返りと訪問看護STでのOJTと振り返り、定期的な学習評価を行いながら継続することを確認した。2年目については看護技術の向上、病棟での看護を学ぶ研修を高知医療センターの協力を得て実施していくことを確認した。在宅では基本的な看護技術獲得について実践を重ねる場が少なく、大学での事前学習、高知医療センターでの実践、振り返りを継続することを確認した。3年目以降の医療機関実習は実習の目的、目標を明確にする必要性があることが指摘された。また、訪問看護STの教育力向上については、大学とSTが連携を図り、学習支援者研修会･検討会で新卒･新任者育成の課題と対応を検討することにより支援を継続することが確認された。

③ プログラムの自己評価、振り返り、学習支援からのカリキュラム評価

平成27年度以降、研修の学習目標に対する目標達成評価シートを統計的分析、振り返りや学習支援内容の質的分析を実施し、平成30年度から研修内容を35科目、138時間に変更した。令和2年度からは地域共生社会へ向けた施策の流れから全体のカリキュラムを見直し、科目数及び時間数は据え置き、訪問看護方法論により地域の理解を促すために、特別講義「生活困窮者の支援」「中山間地域の訪問看護」を開講した。以後、人材確保の困難、業務との両立、長期研修参加の難しさなどから、オンライン・オンデマンド研修のニーズが根強く高い。令和8年度に向けて、必要な科目と内容、時間数の見直しを行うと共にオンライン科目を拡大することを協議した。また、平成27年以降の目標達成自己評価シートの分析から、目指す姿（5項目）及び学習課題（11項目）は到達しているとの自己評価がほとんどである。一方で他者評価は、今年度までは面談による評価のすり合わせを行っていたが、今後は研修の適切性、活用可能性を確保するために効果的な他者評価を検討し組みあわせていく必要があることが確認された。

④ 新任訪問看護師短期研修プログラムの充実

令和2年度より中堅期の訪問看護師を対象に12科目を公開講座とし、徐々に対象科目を拡大した。令和7年度は23科目に対して、延べ受講者数は159名と増加傾向にある。短期プログラムの受講をきっかけに全域枠のコース受講につながった例も複数あり､今後も学び続けるために継続することが確認された。

⑤ 各関係団体の役割について

高知県は県全体への広報活動と共に新卒訪問看護師の情報収集を行い、看護学生へのガイダンスは高知県と高知県立大学が実施している。訪問看護STの新卒者の雇用希望調査、インターンシップ受け入れ、看護学生と新卒訪問看護師を雇用する訪問看護STとのマッチング支援は高知県訪問看護総合支援センター（高知県訪問看護連絡協議会）が実施している。臨床経験者については高知県ナースセンターが求人との個別マッチング支援を強化し、就職につながっている。高知医療センター、高知県医師会、高知県社会福祉協議会の役割についても継続することを確認した。

⑥ その他

本講座は高知県訪問看護師育成体系や日本訪問看護財団のラダーに基づき、新卒・新任訪問看護師育成に取り組んでいるが、ラダーの見直しの必要性も課題として提案された。

表 18：関係団体の役割

組織・機関	役　割
高知県医師会	1）新卒訪問看護師の在宅療養支援診療所、地域連携実習の受け入れ 2）訪問看護師育成の教育プログラムへの助言
高知県看護協会	1）看護協会主催の新人、継続研修の参加を促し、新任・新卒者雇用訪問看護 ST と共に訪問看護師育成を支援 2）研修会等のあらゆる機会等を通じて訪問看護育成に関する啓発の実施 3）ナースバンク登録看護師にも訪問看護 ST 選択の可能性の確認や相談、研修の案内等の実施 4）看護学生のインターンシップの受け入れ 5）新任・新卒訪問看護師の就職受け入れを希望する訪問看護 ST のナースバンクへの求人登録を支援し、すでに出ている求職票のなかからマッチングへの支援を実施する
高知県訪問看護総合支援センター	1）新任・新卒訪問看護師確保のための看護教育機関等への啓発や広報活動の実施（病院説明会、就職ガイダンス、パンフレット配布など） 2）新任・新卒訪問看護師の就職受入れ可能な訪問看護 ST に関する情報の集約と情報提供（HP 掲載） 3）高知県が把握した、訪問看護 ST に就職を希望する看護学生のニーズを受けて、受入れ可能な訪問看護 ST の情報提供とマッチング支援を実施 4）看護学生のインターンシップの受入れ窓口（高知県訪問看護連絡協議会） 5）希望に応じて他の訪問看護ステーションからの研修受入れ
訪問看護 ST	1）新任、新卒看護師を訪問看護 ST に雇用し、中山間地域等訪問看護師育成補助金事業、訪問看護スタートアップ研修参加の検討 2）訪問看護師育成のための学習環境を整備し、訪問看護 ST も学習支援者として OJT を推進 3）訪問看護師育成プログラムの評価、検討
高知県社会福祉協議会	1）中山間地域での在宅医療、訪問看護推進のための助言 2）訪問看護師育成の教育プログラムへの助言 3）研修への講師派遣協力
高知医療センター	1）訪問看護スタートアップ研修へ講師派遣等の協力・支援 2）新卒等に必要な研修の受け入れ（退院支援など）協力 3）訪問看護師育成の教育プログラムへの助言 4）フォローアップ研修への協力・支援
高知県	1）訪問看護推進に関する広報（パンフレット配布や県広報媒体への掲載等） 2）高知県中山間地域等訪問看護師育成事業費補助金事業の実施 3）看護教育機関への訪問看護師育成・確保に関する事業説明の実施、新卒での訪問看護従事希望者の情報収集
高知県立大学	1）新任・新卒訪問看護師育成のための訪問看護師育成プログラムの開発と運用、評価及び修正 2）訪問看護 ST での OJT 促進のための学習支援者研修会を開催、6 ヶ月～1 年間の継続的な学習支援体制の構築 3）新卒訪問看護師確保にむけた必要な就職促進の支援（看護学部）

10）今後の課題と対応

令和８年度の本講座は、研修受講者の確保と学習ニーズへの対応し、研修の科目数の見直し、オンライン科目の拡充等を行った。そのためプログラムの妥当性を評価するために、目標達成自己評価と他者評価を組みあわせ、より個人と事業所の学習支援の効果を高めていけるよう取り組んでいく。

11）その他

①パンフレット・チラシの作成と広報

令和７年度版の各種広報物①～⑤を県内の医療機関、訪問看護 ST、地域包括支援センター、地方公共団体、看護学校等に配布した。

①高知県中山間地域等訪問看護師育成講座パンフレット
②訪問看護スタートアップ研修募集要項
③新卒訪問看護師パンフレット
④Ｉターン・Ｕターンパンフレット
⑤病院・施設で働く看護師募集チラシ



②研究成果の公表等

・森下幸子, 井上加奈子, 森下安子, 久保田聰美:中山間地域等における新卒・新任訪問看護師育成プログラムの評価, 第45回日本科学看護学会学術集会(示説), 新潟, 2025年12月6日

・井上加奈子, 森下幸子, 森下安子, 久保田聰美:中山間地域等新卒・新任訪問看護師育成プログラムの現状と課題～新卒看護技術自己評価に焦点を当てて～, 第45回日本科学看護学会学術集会(示説), 新潟, 2025年12月6日

(3) 訪問看護スタートアップ研修の様子



①開講式の様子



②修了式の様子



③講義の様子



④演習（フィジカルアセスメント）

2　高知県介護職員喀痰吸引等研修事業



看護学部 准教授　川上 理子

活動ポリシー　2　高知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動

開催日時　＜第１回＞
令和７年７月５日（土）９時 30 分～ 16 時
令和７年７月６日（日）９時～ 16 時
＜第２回＞
令和７年 10 月４日（土）９時 30 分～ 16 時
令和７年 10 月５日（日）９時～ 16 時
＜第３回＞
令和７年 12 月 20 日（土）９時 30 分～ 16 時
令和７年 12 月 21 日（日）９時～ 16 時
＜第４回＞
令和８年２月 20 日（金）９時 30 分～ 16 時
令和８年２月 21 日（土）９時～ 16 時

開催場所　高知県立大学看護学部棟 C209・C220

対　　象　介護福祉士、障害者（児）サービス事業所及び障害者（児）施設等（医療機関を除く。）で福祉サービスに従事している介護職員、特別支援学校の教員、保育士等（以下「介護職員等」という。）、特定の者に対してたんの吸引等の行為を行う必要のある者

参加者数　第１回：４人　第２回：１人　第３回：１人　第４回：１人　計 ７人

教 職 員　看護学部 准教授　川上 理子、助教　竹中 英利子、助教　源田 美香（計３人）

(1) 事業概要

在宅医療の推進により、介護や医療的ケアが必要ながらも在宅療養を選択する方を支えるため、たんの吸引等の実施が可能な介護職員等の養成が求められている。本学では、高知県からの依頼により、平成 23 年から介護職員等によるたんの吸引又は経管栄養（以下「たんの吸引等」という。）実施のための研修を行っている。

今年度も本学で基本研修を開催した。基本研修は、各回２日間で、講義研修 (８時間) と実技研修 (１時間) で構成されている。講義内容は、重度障害児・者等の地域生活等に関する講義、たんの吸引等を必要とする重度障害児・者等の障害及び支援に関する講義、緊急時の対応及び危険防止に関する講義、経管栄養に関するものである。各回とも全講義研修終了後に筆記試験を実施し、合格となる 90 点以上 (100 点満点) の受講者に実技研修を行った。実技研修では、モデル人形（高研吸引・胃瘻モデル：LM-097B）を用いて喀痰吸引（鼻・口・気管切開部）と経管栄養注入（液体栄養・半固形栄養）を行い、手順の確認とイメージ化を行った。

(2) 活動成果・評価

講義研修では、安全に喀痰吸引･経管栄養を実施するための基礎的知識について、テキストだけでなく、モデル人形や動画を用いて理解が深まるように工夫した。また、吸引器や人工呼吸器、カフアシスト、気

管切開カニューレ、胃瘻チューブなど実物に触れる機会を設けた。特に吸引器は、療養者によって使用機種が様々であることを想定し、携帯式、足踏み式、吸入機能付きなど複数の機種を実際に見て、特徴を理解できるように努めた。実技研修では、モデル人形を用いて、喀痰吸引（鼻・口・気管切開部）と経管栄養（液体栄養・半固形栄養）を経験した。受講者は、実際に関わる療養者をイメージしながら熱心に学習され、たんの吸引等が生命維持に関わる行為であるだけでなく、療養者の尊厳を守り、望む場所で生活できる可能性を広げるものであると学んだ。また、家族や医療者、その他療養者を支える多職種との連携も学んだ。

2日間の講義研修を終えた受講者7人のうち7人が筆記試験に合格し、実技研修を受け、基本研修を修了することができた（合格率100%）。

今年度は受講者数7人と例年より少なく（令和6年度10人、令和5年度27人）、第2回～第4回はそれぞれ1人ずつの参加であった。受講者の所属する事業所は、訪問介護など訪問型、放課後等デイサービスといった通所型、看護小規模多機能居宅介護といった複合型と多岐にわたり、吸引等の対象者も小児から高齢者と幅広い年齢であった。そのため、吸引等の医療的ケアを行える人材は様々な場所で求められていると考える。高知県では、介護に関わる人材不足が深刻となっており、通常業務の負担が増えることが予想される中、研修に参加しやすくなるよう、日程や地理特性を考慮して開催場所を検討しながらの継続が必要と考える。

3　入退院支援事業



看護学部 特任教授　森下 安子

活動ポリシー	4　高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動
開催日時	通年
開催場所	高知県内全域
対　　象	高知県内の病院、施設、福祉保健所、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所等
参加者数	654 人
教 職 員	健康長寿研究センター長　久保田 聰美／看護学部 特任教授　森下 安子、助教　竹中 英利子、助教　源田 美香／社会福祉学部 教授　西内 章、講師　井上 夏子、助教　乾 由美 健康栄養学部 講師　隅田 有公子 事務局：土居 誠、福重 彩音（計 10 人）
外部講師	伊藤 悠人 氏（管理薬剤師）、阿部 恭宜 氏（薬剤師）、下元 佳子 氏（理学療法士）（計３人）
学生スタッフ	看護研究科　大学院生（計２人）

(1) 事業概要

入退院支援事業は、中央西福祉保健所の依頼を受け平成 22 年度から地域病院協働型入退院システム構築に取り組んだ実績から発展し、平成 28 年度からは高知県の基金事業として位置づけられている事業である。

本事業は平成 28 年度に本学が策定した「地域・病院・多職種協働型の退院支援の仕組み作りガイドライン（以下、ガイドライン）」（ガイドラインは改定、洗練化を行っており、現在は Ver.3 である）の普及・啓発を推進するとともに、ガイドラインを活用して病院の入退院支援体制の構築及び、入退院支援・退院調整における院内外の横断的な調整役を担う「相談支援事業」や地域のコーディネーターとなる人材育成や病院内外が協働する入退院支援を推進する管理者、看護管理者育成などの「研修事業」、および自施設で入退院支援体制の改善に取り組むことを目指す「モニタリング事業」の３事業を展開してきた。今年度からは、一定各保健所管内の病院で「相談支援事業」を実施したため、「研修事業」と「モニタリング事業」の２事業の実施となった。

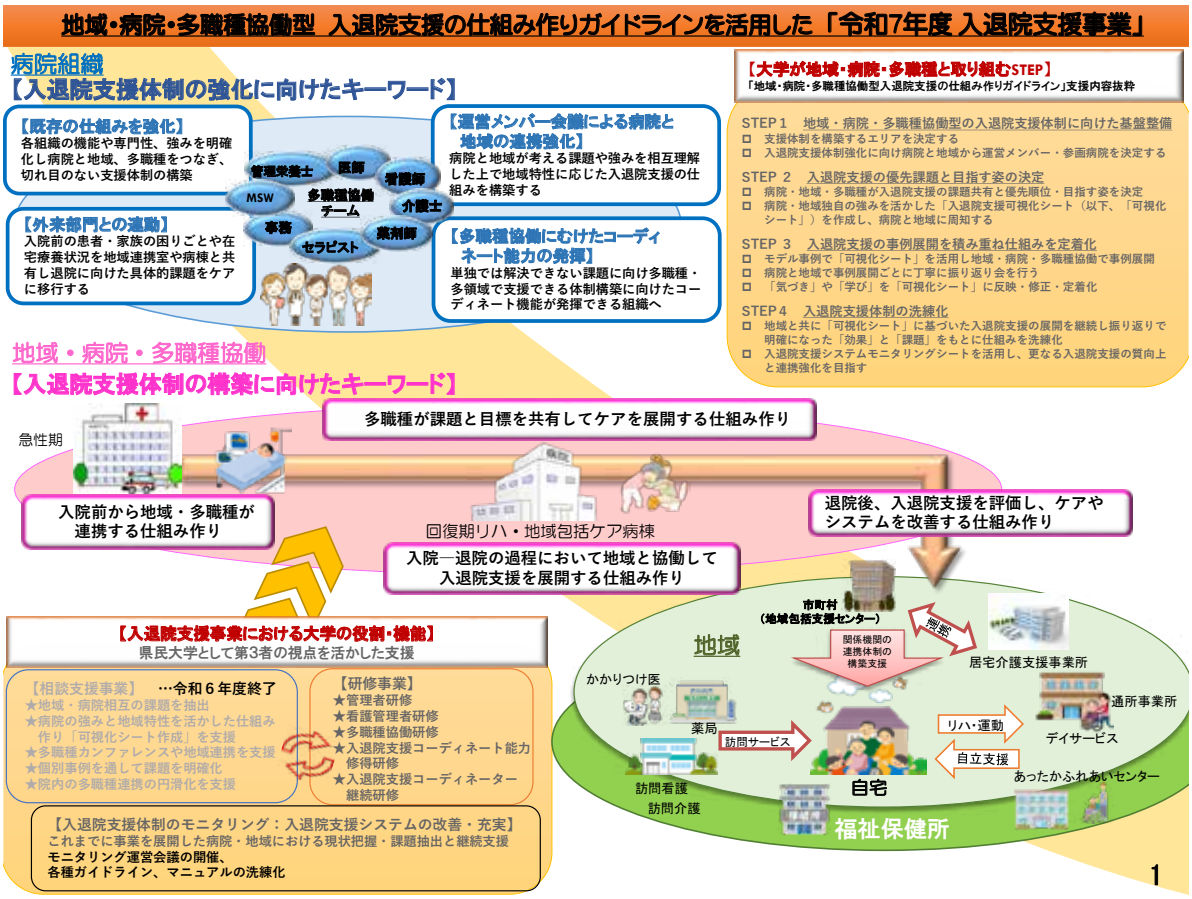
研修事業では、対面にて【管理者研修】【看護管理者研修】【多職種協働研修（全５回）】【入退院支援コーディネート能力修得研修（全３回）】を実施、高知市の会場で【入退院支援コーディネーター継続研修】を実施した。

また、昨年度まで入退院支援事業に参加した事業参加病院や地域が事業終了後の入退院支援推進に向けた実践活動を共有する事で、更なる発展と、今後の課題解決に繋げることを目的とした大交流会を継続して開催したが、これらの医療機関、地域の取り組みを広く県内で共有し、他の医療機関や、地域で参考にしていただくことを目的とした「活動報告会」として開催した。

さらに、各施設の現状を大学として客観的に評価し、フィードバックするモニタリング運営会議を 14 の医療機関で開催し、課題解決やさらなる発展に向け、支援を行った。令和５年度の事業参加病院である高知病院と高知西病院においては、可視化シートを活用した事例展開について振り返り会をモニタリング運営会議として開催し、可視化シートの洗練化を行った。令和６年度の事業参加病院である近森オルソリハビリテーション病院では、モニタリング運営会議を開催し、地域・病院・多職種協働の入退院支援可視化シートを完成させた。

（2）活動成果

≪全体図≫


地域・病院・多職種協働型 入退院支援の仕組み作りガイドラインを活用した「令和7年度 入退院支援事業」
病院組織
【入退院支援体制の強化に向けたキーワード】
【既存の仕組みを強化】
各組織の機能や専門性、強みを明確化し病院と地域、多職種をつなぎ、切れ目のない支援体制の構築
【外来部門との連動】
入院前の患者・家族の困りごとや在宅療養状況を地域連携室や病棟と共有し退院に向けた具体的課題をケアに移行する
管理栄養士
医師
看護師
MSW
多職種協働チーム
介護士
事務
薬剤師
セラピスト
【運営メンバー会議による病院と地域の連携強化】
病院と地域が考える課題や強みを相互理解した上で地域特性に応じた入退院支援の仕組みを構築する
【多職種協働にむけたコーディネート能力の発揮】
単独では解決できない課題に向け多職種・多領域で支援できる体制構築に向けたコーディネート機能が発揮できる組織へ
【大学が地域・病院・多職種と取り組むSTEP】
「地域・病院・多職種協働型入退院支援の仕組み作りガイドライン」支援内容抜粋
STEP 1 地域・病院・多職種協働型の入退院支援体制に向けた基盤整備
支援体制を構築するエリアを決定する
入退院支援体制強化に向け病院と地域から運営メンバー・参画病院を決定する
STEP 2 入退院支援の優先課題と目指す姿の決定
病院・地域・多職種が入退院支援の課題共有と優先順位・目指す姿を決定
病院・地域独自の強みを活かした「入退院支援可視化シート（以下、「可視化シート」）を作成し、病院と地域に周知する
STEP 3 入退院支援の事例展開を積み重ね仕組みを定着化
モデル事例で「可視化シート」を活用し地域・病院・多職種協働で事例展開
病院と地域で事例展開ごとに丁寧に振り返り会を行う
「気づき」や「学び」を「可視化シート」に反映・修正・定着化
STEP 4 入退院支援体制の洗練化
地域と共に「可視化シート」に基づいた入退院支援の展開を継続し振り返りで明確になった「効果」と「課題」をもとに仕組みを洗練化
入退院支援システムモニタリングシートを活用し、更なる入退院支援の質向上と連携強化を目指す
地域・病院・多職種協働
【入退院支援体制の構築に向けたキーワード】
急性期
多職種が課題と目標を共有してケアを展開する仕組み作り
入院前から地域・多職種が連携する仕組み作り
回復期リハ・地域包括ケア病棟
入院―退院の過程において地域と協働して入退院支援を展開する仕組み作り
退院後、入退院支援を評価し、ケアやシステムを改善する仕組み作り
【入退院支援事業における大学の役割・機能】
県民大学として第3者の視点を活かした支援
【相談支援事業】 …令和６年度終了
★地域・病院相互の課題を抽出
★病院の強みと地域特性を活かした仕組み作り「可視化シート作成」を支援
★多職種カンファレンスや地域連携を支援
★個別事例を通して課題を明確化
★院内の多職種連携の円滑化を支援
【研修事業】
★管理者研修
★看護管理者研修
★多職種協働研修
★入退院支援コーディネート能力修得研修
★入退院支援コーディネーター継続研修
【入退院支援体制のモニタリング：入退院支援システムの改善・充実】
これまでに事業を展開した病院・地域における現状把握・課題抽出と継続支援
モニタリング運営会議の開催、
各種ガイドライン、マニュアルの洗練化
地域
市町村（地域包括支援センター）
関係機関の連携体制の構築支援
連絡
居宅介護支援事業所
かかりつけ医
薬局
訪問サービス
通所事業所
デイサービス
リハ・運動
自立支援
自宅
あったかふれあいセンター
訪問看護
訪問介護
福祉保健所
1

1　研修事業

【管理者研修】令和７年６月 16 日（月）10 時～ 16 時 30 分　参加人数：37 人　開催場所：高知城ホール

内容（テーマ等）
・高知県の挨拶（高知県健康政策部在宅療養推進課 課長補佐　中田 和美 氏） ・入退院支援の推進における病院や病棟改革に向けた管理者の役割機能について 1　高知県地域医療構想に基づく入退院支援事業の位置づけ（高知県健康政策部在宅療養推進課 チーフ　大崎 亮彦 氏） 2　入退院支援事業の概要と年間スケジュールについて（入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） 3　入退院支援における管理者の役割について（高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美） 【事業参加病院から　入退院支援について】 1　高知医療センターは継続して入退院支援強化に取り組んでいます （ゲストスピーカー：高知医療センター 副院長兼地域医療センター長　令和４年度事業参加病院） 2　管理者として入退院支援の仕組み作り～事業参画後６年目を迎えて～ （ゲストスピーカー：リハビリテーション病院すこやかな杜 総看護師長　令和元年度事業参加病院）

≪到達目標≫

入退院支援における病院や病棟改革の推進に向け、管理職の役割や機能を理解できる

●令和６年診療報酬改定や地域保健医療計画が意味する方向性をもとに、地域における自院の立ち位置を見極める視点を持つ

●入退院支援の質が病院の質を左右する要件であるという認識を持ち、自院とその地域における入退院支援システム構築に向けた推進力となれる

●地域連携・退院調整部門だけでなく、現場の中間管理職と協働しスタッフを巻き込み、組織全体（多部門・多職種）の取り組みへと発展するためのリーダーシップが発揮できる

≪アンケート結果≫

■自施設の地域・病院・多職種による入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

・「入退院支援における管理者の役割について」：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・事業参画病院から『入退院支援について』：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪アンケート抜粋≫

・多職種、多施設の方と意見交換ができ、いろんな視点を知ることができた。

・これまで一スタッフとして退院支援に関わってきたが、改めて管理者的視点で講義やグループワークをすることでスタッフの意識を変革していくための方策について考えることができた。まずは、入院時に必要な情報の内容や入退院支援担当者との連携の仕方について現場に伝えていければと思う。

・今回の研修を通して、他の医療機関の方々の意見や考えを伺い、自施設の課題が明確化できたと思う。



①高知医療センター発表の様子



②リハビリテーション病院すこやかな杜発表の様子



③グループワークの様子

【看護管理者研修】令和７年７月 28 日（月）10 時～ 16 時 30 分　参加人数：38 人　開催場所：高知城ホール

内容（テーマ等）
1　入退院支援事業の概要説明～看護管理者研修の位置づけ～地域・病院・多職種協働型　入退院支援の仕組みづくりガイドラインVer.3（入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） 2　入退院支援における看護管理者の役割（高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美） 【ゲストスピーカーからの取組み報告】 1　入退院支援事業　看護管理者研修　令和４年度からの取り組み（高知医療センター看護局 次長　令和４年度事業参加病院） 2　入退院支援を通じた「繋ぐ」支援ーこれまでの課題とこれからの連携ー（ケアプランセンターえん 主任介護支援専門員）

≪到達目標≫

入退院支援における病院や病棟改革の推進に向け看護管理者の役割や機能を理解できる

●診療報酬が意味する方向性をスタッフに説明・周知できると共に退院後の生活を見据えたうえで、地域との協働を具体化できる

●身体・精神・社会的背景を統合したアセスメントおよび包括的ケアの提供体制構築の必要性を理解する

●病床機能分化と地域連携を視野に入れた看護管理を理解できる

●入退院支援の質と看護の質の関係性を理解し現場にフィードバックできる

≪アンケート結果≫

■看護管理者として自施設の地域･病院･多職種協働による入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

･「入退院支援における看護管理者の役割」:「とてもそう思う」「そう思う」94.1%

・ゲストスピーカー２名からの報告：「とてもそう思う」「そう思う」97.0%

・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」94.2%

≪アンケート抜粋≫

・事例により、自分達を客観的に見る事ができ、連携の重要性を再確認できた。それぞれの立場になる事で、スムーズな連携ができると実感した。目指す姿を管理者として示していきたい。

・看護管理者の現場の声を聞くことが出来た。多職種それぞれの役割や職種の理解に繋がったと思う。多職種の顔と顔の見える関係の大切さも体感出来た。相談窓口機能の充実や、多職種の関係構築の研修会などコーディネート機関としての支援に活かしていきたい。

・入院時情報提供書の活用と入退院支援の可視化シートを普及させていきたい。また、カンファレンスについても、各科週１回多職種が集まり行っているため、内容や進行などを検討し、有意義なカンファレンスにできるよう取り組みたい。現在カンファレンス記録のテンプレートも修正中のため、今回の研修で学んだ事を活かしたい。



①高知医療センター発表の様子



②ケアプランセンターえん発表の様子



③参加者発表の様子

【多職種協働研修】

■第１回・第２回　令和７年７月 14 日（月）９時 30 分～ 16 時 30 分　参加人数：67 人　開催場所：高知城ホール

■第３回・第４回　令和７年８月 20 日（水）９時 30 分～ 16 時 30 分　参加人数：64 人　開催場所：高知城ホール

■第５回　令和７年９月 11 日（木）13 時 30 分～ 16 時 30 分　参加人数：63 人　開催場所：高知城ホール

回	内容（テーマ等）
第1回	1　入退院支援事業の概要と「多職種協働研修」の位置づけ（入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） 【入退院支援における多職種協働の実際と必要性】 1　入退院支援における薬剤師の関与と多職種連携（外部講師 管理薬剤師　伊藤 悠人 氏） 2　理学療法士の立場で多職種協働を考える（外部講師 理学療法士　下元 佳子 氏）
第2回	1　入退院支援～地域・病院・多職種が協働で支援しよう！～（入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子）
第3回	【今、どうして「多職種協働（IPW）」が必要なのか？】（社会福祉学部 教授　西内 章） ・自分の職業は何をする人？他の職業との違いは？ ・多職種協働（IPW）の考え方を知る ・チームの特徴を分析し振り返ってみよう ・事例を用いたグループワーク～多職種チームで話し合い行動できるために～
第4回	【多職種連携・協働のためのコミュニケーション～地域・病院・多職種で支えるために～】 （社会福祉学部 講師　井上 夏子） ・各々の施設間の「壁」を乗り越えるためのコミュニケーションの必要性を理解する ・医療機関と地域の事業所間にある「壁」から生ずるジレンマを体験する ・事例を用いたグループワーク～信頼と共感に基づくチーム形成～
第5回	・模擬カンファレンスを見て・感じて・考える～リアルカンファレンス～情報共有から目標共有へ　つなぐ鍵はどこに？ （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美） 【テーマ】退院に向けた患者・家族の参画について考える

≪到達目標≫

「地域との協働」、「多職種協働」、「入退院支援の仕組みづくり」をキーワードに、地域連携部門の看護師・MS に限らず、病棟やセラピスト、薬剤師、管理栄養士、栄養士、事務系職種など入退院支援に関わる病院スタッフと地域の多領域の専門職の役割を理解し実践につなげる

●状況設定・事例分析・グループワークを通して、それぞれの病院の機能と地域の状況に合わせた入退院支援が多職種でできるようになる

●お互いの専門性や立場を理解し、顔がみえるだけでなく、何を大切にし、どんな役割を遂行しているのか分かり合える関係づくりを目指せる

≪第１回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院・多職種協働で入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

・「入退院支援での薬剤師の関与と多職種連携」：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・「理学療法士の立場で多職種協働を考える」：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第２回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院・多職種協働で入退院支援を考える上で役立ちましたか？

・「入退院支援～地域・病院・多職種が協働で支援しよう！～」:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク :「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第１回・第２回　アンケート抜粋≫

・薬剤師さんの多職種連携での内容は知らない事ばかりだったので、病院へフィードバックしたい。また、理学療法士さんの思いについても知ることができて良い学びになった。

・その人らしい生活のために患者さん、家族を中心として私達がどのような働きかけが必要なのかまだ初歩段階だが分かってきた。退院までの事しか分かっていなかったが、その後の薬剤師さんの働きかけについて学び、入院時から出来そうな事もあった。実践していけるよう、病院に持ち帰り提案したい。

・薬剤師さんの役割を改めて学び、相談することもできたので良かった。下元先生にも、具体的にゴールを共有する多職種協働のヒントをいただけた。



①管理薬剤師　伊藤 悠人 氏による講義の様子



②理学療法士　下元 佳子 氏による講義の様子



③グループワークの様子

≪第３回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院多職種協働による入退院支援を考える上で役立ちましたか？

・「今、どうして『多職種協働（IPW)』が必要なのか」:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・個人ワーク・グループワーク :「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第４回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院多職種協働による入退院支援を考える上で役立ちましたか？

・「入退院支援におけるコミュニケーション」:「とてもそう思う」「そう思う」96.1%

・個人ワーク・グループワーク :「とてもそう思う」「そう思う」92.1%

≪第３回・第４回　アンケート抜粋≫

・ロールプレイでは楽しく学ぶ事ができ、IPW の必要性、役割を考えることができた。コミュニケーションの必要性、方法を学び、業務に役立てたい。

・カンファレンスに必要な職種にどんな職種が参加しているのか知ることが出来た。カンファレンスに必要な多職種とのコミュニケーションの取り方、考え方を理解するともう少しスムーズに会が回りそうな気がする。

・看護師が多いグループではあったが、色々な意見を聞くことができ、良い学びになった。IPW において、カンファレンスに出席する際の姿勢について現場にフィードバックし建設的な話し合いができるようにしていきたい。


①社会福祉学部 教授　西内 章による講義の様子


②社会福祉学部 講師　井上 夏子による講義の様子


③参加者発表の様子

≪第５回　アンケート結果≫

■これからの地域・病院・多職種協働による入退院支援を考える上で役立ちましたか？

・情報共有から目標共有へ　つなぐ鍵はどこに？」:「とてもそう思う・そう思う」92.5%

・「模擬カンファレンスを見て・感じて・考える」のグループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」92.5%

≪第５回　アンケート抜粋≫

・カンファレンスをするにあたっての事前準備の重要性を学んだ。より良いカンファレンスをするために情報共有や課題を明確化し、本人、家族の意向を確認するタイミングなどの大切さを学んだ。退院後の生活を見据えたケアをしていくことの重要性、日々の看護に繋げていきたい。

・多職種と協働して支援することの重要性を学んだ。カンファレンスはただ行うだけでなく、必要な支援に活かせるようにしていかなくてはならない。

・他職種、他施設での入退院支援やカンファレンスの実際や取り組みを知ることができ視野が広がった。本日のリアルカンファレンを見て、当院でも取り組んで行きたい内容があり、フィードバックしていけたらと思う。


①看護学部 教授　久保田 聰美による講義の様子


②リアルカンファレンスの様子

【入退院支援コーディネート能力修得研修】

■第１回　令和７年　９月 29 日（月）９時 30 分～ 16 時 30 分　参加人数：37 人

■第２回　令和７年 10 月 27 日（月）９時 30 分～ 16 時 30 分　参加人数：33 人

■第３回　令和７年 11 月 14 日（金）９時 30 分～ 16 時 30 分　参加人数：32 人

■開催場所：第１回　高知城ホール

：第２回・第３回　高知県立大学池キャンパス

回	内容（テーマ等）
第1回	1　入退院支援事業の概要説明～入退院支援におけるコーディネート能力修得の位置づけ～（入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） 2　地域・病院・多職種協働の場においてコーディネート能力とは？（高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美）
第2回	1　機能する多職種チームを作るには？～ご機嫌なチームを作ろう！～ 2　ご機嫌なチーム形成のためのコミュニケーション～信頼と共感に基づくチームづくりを目指して～ （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美・社会福祉学部 助教　乾 由美）
第3回	1　コーディネーターに必要なスキル～可視化シートをカンファレンスに活かそう！～ （高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美） ・多様な価値観を尊重するとは ・カンファレンスとは ・場のマネジメントスキル 【ゲストスピーカーからの取組み報告】 1　チームで統一したケアを実践するために～排泄自立支援に向けて～ （ゲストスピーカー：田野病院 主任看護師　平成29年度事業参加病院） 2　当院におけるコーディネーターの活動～コーディネーター会を通じて～ （ゲストスピーカー：大井田病院 理学療法士　平成29年度事業参加病院）

≪到達目的≫

病院内外での横断的な支援及び、地域・病院・多職種協働型の入退院支援を推進するコーディネート能力を修得することができる

●病院と地域では入退院支援に対する考え方にズレが生じやすいことを理解し、相互関係を深めることができる

●それぞれの専門職において、個々の教育課程や専門性の違いから価値観の違いが生じる場合がある事を理解した上で、チームアプローチの必要性を理解できる

●入退院支援を可視化することで、経験年数や力量が違っても入退院支援の質が標準化され、円滑な地域連携につながることを理解できる

●入院直後から、地域とつながり、退院後の生活を見据えた支援方法を地域と一緒に検討する必要性を理解できる

≪入退院支援コーディネート能力修得研修参加者の推薦の目安≫

●支援における病院・地域双方の課題をある程度理解し、課題解決に向けた取り組みの必要性を認識し変革することを受け入れることができる

●多職種スタッフから信頼があり多領域の専門性を活かそうとする視点をもっている

●自分自身の職種の専門性も大切にしながらも、そこに縛られず柔軟性を持ってチームの中で対応することができる

●管理職と連携してケアを継続し、変革していく役割を担う立場にある（主任、リーダークラス）

≪第１回　アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働において求められるコーディネーターの役割・機能」について、組織の多職種による入退院支援を考える上で役立ちましたか？

・講義：「とてもそう思う」「そう思う」100%
・グループワーク：「とてもそう思う」100%

≪第１回　アンケート抜粋≫

・様々な職種、環境、立場の方が参加されており、色んな意見があるということ、自施設にはない取り組みをしている現状を知れた事が大きな収穫であった。有効的なカンファレンス開催のために、少しでも活発な意見交換が出来るよう、ファシリテーターとしての役割が果たせるようにしていきたい
・多職種連携という意味で、それぞれの職種の仕事内容、大切にしていることを理解し、説明できるようになることで、職種の強みを活かし、連携、つながりを深めることができると感じた。又、そうすることが、本当の意味での連携となり、家族、本人に寄り添う、その人らしさに繋がると考える。
・各施設や職種の現状や専門性等を生の声で聴くことができ、良かった。自分の病院に持ち帰り、フィードバックを行いたい。



①看護学部 教授　久保田 聰美による講義の様子



②グループワークの様子

≪第２回　アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働で入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

・「機能する多職種チームの作り方」の講義・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%
・「入退院支援におけるコミュニケーションスキル」の講義・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第２回　アンケート抜粋≫

・～ご機嫌なチームを作ろう！～という言葉がまず心に刺さった。共感力、問いかける力、俯瞰力の中で、自分には問いかける力が足らないのではと感じた。自分の強み、弱み・相手の強み、弱みを知り、トータル的にコーディネートできるようになりたい。
・今回の研修で自分自身を俯瞰してみる良い機会となった。カンファレンスや退院支援でも自分だけではなく、患者、家族、周囲の関わる職種全体を俯瞰してみることでよりよいゴール設定やカンファレンスにつなげていきたい。



①社会福祉学部 助教　乾 由美による講義の様子



②グループワークの様子

≪第３回　アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働で入退院支援を考えるうえで役立ちましたか？

・「コーディネーターに必要なスキル」:「とてもそう思う」「そう思う」100%

・ゲストスピーカーの講義：「とてもそう思う」「そう思う」100%

・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪第３回　アンケート抜粋≫

・コンフリクトマネジメントを学び、多職種と意見の相違や対立があったとしても、それをマイナスと捉えず、相手を理解し、より強いチームワークを作るための良い機会であると考えたいと思う。又この研修で学んだファシリテーションスキルを今後のカンファレンスでも生かしたい。

・司会やタイムキーパーの役割は帰ってすぐに出来ると思う。ここで課題がいろいろとみつけることが出来たので、出来ることからやってみたいと（意識する）思う。可視化シートがある事をこの会があるまで知らなかったので、まずは使用していきたい。

・カンファレンスを行う上で大切なファシリテーターの役割についても学ぶことができた。各職種で持っている情報をいかにして共有できるか可視化シートなどを利用して具体的に入退院支援ができるように今回の研修を役立てたい。



①田野病院発表の様子



②大井田病院発表の様子

【入退院支援コーディネーター継続研修】令和７年 12 月 12 日（金）10 時～ 16 時
参加人数：13 人　開催場所：高知県立大学池キャンパス

内容（テーマ等）
1　コーディネーター継続研修の位置づけ（入退院支援事業責任者 看護学部 特任教授　森下 安子） 2　入退院支援において地域・病院・多職種の連携についてともに考えよう（高知県立大学 健康長寿研究センター長 看護学部 教授　久保田 聰美） 3　グループワーク～困難事例を通して皆さんの地域の入退院支援について考えよう～ アドバイザー（藤寿会南国居宅支援事業所　主任介護支援専門員、居宅支援事業所しもぢ　主任介護支援専門員、ケアプランセンターえん　主任介護支援専門員）

≪到達目標≫

入退院支援コーディネート能力修得研修後の自施設での活動を振り返り、仲間と共に成長と課題を共有する事で、地域ごとの研修終了者のネットワークを構築するとともに、地域や病院の入退院支援システムの改善に取り組む能力の向上を目指す

≪アンケート結果≫

■地域・病院・多職種協働における入退院支援の改善に向け、参考になりましたか？
・午前中の講義：「とてもそう思う」「そう思う」100%
・グループワーク：「とてもそう思う」「そう思う」100%

≪アンケート抜粋≫

・強みと目標設定に各専門職で行動レベルを認識する大切さをより学ぶことができた。チームの環境がより具体性を増した。
・回復期病院の方と同じグループだったので、共感できる意見も多く、グループワークが楽しかった。弱みと強みは背中合わせで、弱み⇔強み変化していくということも気づくことができた。
・事例を通して職種間で気になるポイントに違いがあることを感じ、自院で退院支援を行うにあたり、各職種の視点で気になるポイントは何か、意見を聞いていきたいと思った。



①看護学部 教授　久保田 聰美による講義の様子



②参加者発表の様子

2　モニタリング事業

≪具体的な支援内容≫

モニタリング運営会議の開催

①これまでに事業を展開した病院・地域における現状把握・課題抽出と継続支援

②入退院支援体制モニタリングシートの活用支援（モニタリングシート及び活用マニュアルの洗練化）

③事例検討会

【モニタリング運営会議】開催場所：各施設

＜近森オルソリハビリテーション病院＞

概要	開催日時	参加人数
可視化シートの作成について	令和7年5月29日（木） 15時～16時	2人
可視化シートの作成について	令和7年12月24日（水） 11時～12時	2人

＜高知病院＞

概要	開催日時	参加人数
モデル事例：退院前カンファレンス	令和7年4月21日（月） 14時～15時	10人
事例展開の振り返り会運営方法について	令和7年5月20日（火） 11時～11時40分	12人
事例展開の振り返り会	令和7年7月1日（火） 16時～18時	20人

＜高知西病院＞

概要	開催日時	参加人数
事例展開について	令和7年4月4日（金） 10時～11時	4人
事例展開の振り返り会運営方法について	令和7年11月6日（木） 10時～11時	4人
事例展開の振り返り会	令和8年1月7日（水） 10時～11時	16人

＜田野病院＞

概要	開催日時	参加人数
今年度の取組と課題について	令和8年1月28日（水） 10時～11時	4人

＜大井田病院＞

概要	開催日時	参加人数
可視化シートの改善について	令和８年１月26日（月） 14時～15時	３人

＜幡多けんみん病院＞

概要	開催日時	参加人数
今年度の取組と課題について	令和8年3月11日（水） 15時～16時	１人

＜くぼかわ病院＞

概要	開催日時	参加人数
今年度の取組と課題について	令和8年3月23日（月） 11時～12時	11人

＜リハビリテーション病院すこやかな杜＞

概要	開催日時	参加人数
事例検討会	令和７年10月22日（水） 14時～16時	45人

＜あき総合病院＞

概要	開催日時	参加人数
今年度の取組と課題について	令和8年3月12日（木） 13時～14時	１人

＜図南病院＞

概要	開催日時	参加人数
今年度の取組と課題について	令和8年3月5日（木） 15時～16時	２人

＜いずみの病院＞

概要	開催日時	参加人数
今年度の取組と課題について	令和8年1月16日（金） 15時～15時30分	１人

＜細木病院＞

概要	開催日時	参加人数
今年度の取組と課題について	令和8年3月4日（水） 13時30分～15時	3人

＜高知医療センター＞

概要	開催日時	参加人数
事例の振り返り会	令和７年９月30日（火） 14時～15時	20人
可視化シートの洗練化	令和８年１月27日（火） 14時～15時30分	18人

3　事業報告会

【活動報告会】令和８年３月９日（月）13時～16時　　参加人数：91人

開催場所：高知県立大学池キャンパス

内容（テーマ等）
令和７年度入退院支援事業　活動報告会～高知家で創る切れ目のない入退院支援体制～ ■在宅医療の推進に係る入退院支援事業の今後の展望について ■入退院支援事業の概要説明 ■病院・施設からの取り組み報告 ・いずみの病院（令和３年度事業参加病院） ・高知医療センター（令和４年度事業参加病院） ・あいあーる訪問看護ステーション（令和７年度研修事業参加病院） ・高知県立あき総合病院（令和２～３年度事業参加病院）



①会場参加者の様子



②高知県健康政策部在宅療養推進課
主事　土居 優奈 氏



②入退院支援事業事業責任者　森下 安子



④いずみの病院 看護部長



⑤高知医療センター 患者支援センター 科長



⑥高知県立あき総合病院
看護師



⑦あいあーる訪問看護ステーション 看護師

【可視化シート作成能力等の検証】

可視化シート作成能力等の検証は、入退院支援コーディネーター継続研修（以下、継続研修）の受講者を対象に実施した。検証方法は、継続研修受講時に本学が作成したアンケート調査を実施し、入退院支援コーディネート能力修得研修受講前と現時点の能力との比較を行った。調査項目は、可視化シートを作成するうえで必要な能力とし「所属する施設の入退院支援に関する、病院・地域双方からの課題を把握できる」「病院、地域双方の立場を尊重しながら連携促進に向けた働きかけができる」「多職種相互の専門性や強みを引き出しながら、事例に応じたチームを作ることができる」「地域・病院多職種がどのような役割を担い、自分がどう動けばいいか意識しながら、入退院支援の仕組みを考えることができる」「自分たちの病院・地域独自の「入退院支援の仕組み」の改善に取り組むことができる」「事例に応じて、地域・病院・多職種とのカンファレンスを行いながら、退院後を見据えた支援が行えるようサポートできる」「退院後も継続する課題を入院中から地域、または次の療養先と共有できる」（仕組みを組織として検討できる）の７項目であり、５段階評価とした。結果、７項目いずれも、「できる」「まあまあできる」と回答した割合について、入退院支援コーディネート能力修得研修受講前と現在と比較してみると、「所属する施設の入退院支援に関する、病院・地域双方からの課題を把握できる」では、7.7％から 92.3％、「病院、地域双方の立場を尊重しながら連携促進に向けた働きかけができる」は 7.7％から 76.9％、「多職種相互の専門性や強みを引き出しながら、事例に応じたチームを作ることができる」は 7.7％から 46.2％、「地域・病院多職種がどのような役割を担い、自分がどう動けばいいか意識しながら、入退院支援の仕組みを考えることができる」では、7.7％から 92.3％、「自分たちの病院・地域独自の「入退院支援の仕組み」の改善に取り組むことができる」では、0％から 46.2％、「事例に応じて、地域・病院・多職種とのカンファレンスを行いながら、退院後を見据えた支援が行えるようサポートできる」は 23.1％から 100％、「退院後も継続する課題を入院中から地域、または次の療養先と共有できる仕組みを組織として検討できる」15.4％から 46.2％と、各項目、大幅に増加しており、可視化シート作成能力の向上を確認することができた。自由記載からは、可視化シートの改善にすでに取り組んでいることを記載した受講者が 4 名いた。また、多職種協働の取り組みを積極的に行っていると記載した受講者が 11 名いた。以上の事から、地域・病院・多職種協働型入退院支援に取り組んでいると言え、入退院支援コーディネート能力修得研修の受講の効果が明らかになった。なお、フィードバックに関しては、グループワーク並びに最終コメントの際に、能力が 50％以下だった「病院・地域双方からの課題の把握」及び「事例に応じて、地域・病院・多職種とのカンファレンスを行いながら、退院後を見据えた支援をする」に関して、アドバイザーで参加した主任介護支援専門員から具体的な連携方法等について助言してもらい、大学からは改めて地域・病院・多職種協働の入退院支援のタイミング、展開方法についてフィードバックを行った。

【研修事業】

今年度も、「管理者研修」「看護管理者研修」「多職種協働研修」「入退院支援コーディネート能力修得研修」「入退院支援コーディネーター継続研修（高知市会場）」を計画通り実施した。研修参加者数は管理者研修・看護管理者研修で 75 名、多職種協働研修延べ 324 名、入退院支援コーディネート能力修得研修延べ 102 名、入退院支援コーディネーター継続研修 13 名であった。各研修後のアンケート結果をみると「役立ったか」、「参考になったか」という各質問項目で、「とてもそう思う」「そう思う」が 90 ～ 100％と評価が高く、地域・病院・多職種協働による入退院支援の実践へつなげる事ができた学びとなり入退院支援システムを構築する人材育成につながったと考える。「管理者研修」「看護管理者研修」では、管理者として院内での連携の重要性や他施設の課題や取り組み等の共有ができ、今後の自部署での入退院支援の取り組む方向性等の共有ができ入退院支援の人材育成につながっていると言える。「多職種協働研修」「入退院支援コーディネート能力修得研修」では、多職種との連携の重要性や専門職が協働する事で多角的な視点からの支援の必要

性、課題解決に向けグループワークを行いながら、理解し実践に繋げていける場となった。「入退院支援コーディネート能力修得研修」では、自施設での可視化シートや課題、今後の展開方法等を事前課題とし、多職種の役割の再認識、また、コーディネーターとしての役割を学び入退院支援の中心的役割として現場での活動へつなぐことができた研修となった。「入退院支援コーディネーター継続研修」は、主任介護支援専門員をアドバイザーとして各グループに入っていただき、ケアマネジャーと病院の更なる連携促進に向けた課題や解決に向けた取り組みについて検討できる内容とした。グループで検討していく中で、日々の業務の振り返りや更なる課題に向けて介護支援専門員との連携能力の修得の場となった。今回、継続研修受講者を対象に可視化シート作成能力等の検証を行い、受講前と現在と比較して「できる」「まあまあできる」と回答した割合が大幅に増加しており、可視化シート作成能力が向上したといえ、入退院支援コーディネート能力修得研修の効果が明らかになった。

【入退院支援体制のモニタリング事業】

今年度はモニタリング運営会議を14病院に対して行った。モニタリング運営会議では、病院・地域スタッフが参加する事例検討やモニタリングシート結果の分析等を行い、地域・病院・多職種協働型退院支援システムの稼働状況について評価を行っている。このようにステップ4に該当する、継続的な支援の結果として、平均在院日数や在宅復帰率の改善などの成果が見られた病院があった。各医療機関で作成した可視化シートについては、事例展開の振り返りを行うなど定期的にも見直しを行っている施設が8医療機関（細木、大井田、くぼかわ、幡多けんみん、すこやかな杜、医療センター、高知西、高知）、可視化シートがスタッフに定着していることを確認し新人教育への活用が中心になっている施設が4医療機関（田野、図南、あき総合、いずみの）あり、形は異なるが多くの医療機関において地域病院多職種入退院支援システムが継続して稼働していることを確認することができた。なお、近森オルソリハビリテーション病院は可視化シートが今年度完成したため、次年度事例展開を行い、洗練化に取り組んでいく。モニタリング運営会議では、新たな課題について相談があり、助言を行った。今後も「モニタリング運営会議」を継続して実施し、これまでの取り組みと成果をフィードバックするとともに、課題とその解決策を共に検討し、PDCAサイクルを回し、システムの洗練化や更なる入退院支援の質向上と連携強化に取り組むことは重要であり、次年度も継続して実施していく。

また、相談支援事業で関わった医療機関の入退院支援システムの更なる発展と、今後の課題解決に繋げる事を目的とし、実施していた「大交流会」は、「活動報告会」に位置づけを変更し、モデル基幹病院の先駆的な取り組みをより多くの医療機関、地域に向け、情報発信を行った。また、活動報告会では、多職種協働研修、コーディネート能力修得研修受講後、自らの施設においてその学びをどのような取り組みに活かしたのかについても報告してもらい、発表後は報告テーマごとに分かれてのディスカッションを行った。参加者間で具体的な取り組みや課題を共有することができ、情報共有の大切さや病院側と地域側の交流の場となり、今後も開催を希望する意見も多く聞かれた。活動報告会は、システムの発展、拡充に向けた自組織での具体的な取り組みにつながる機会ともなっており、有効であったと考える。

4 「社会福祉学部リカレント教育講座 ―ようこそ！知のフィールドへ―
【テーマ】命・危険と向き合う人々と家族の心と体を支えるために
～アメリカの Military Social Work の知見をヒントに～



社会福祉学部 准教授　田中 顕悟

活動ポリシー　4　高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動
開催日時　令和７年 12 月 13 日（土）10 時～ 12 時
開催場所　高知県立大学池キャンパス　大講義室
対　　象　専門職、高校生、どなたでも
参加者数　８人
教 職 員　社会福祉学部 准教授　田中 顕悟、准教授　辻 真美、講師　清家 庸佑、助教　乾 由美（計４人）

（1）事業概要

本講座は、本学社会福祉学部主催により、社会福祉専門職及び本学学部卒業生に対して、実務経験を基盤とした再教育の場として、学びの深化および専門知の発展を図ること、あわせて一般市民や高校生に対して広く社会福祉への理解と関心を深めてもらうことを目的として実施した。本講座は、実践の中で培われた経験を理論的に捉え直し、さらなる学修や研究への関心を喚起することで、将来的な大学院進学も視野に入れた学びの入口となることを意図している。

今年度のリカレント教育講座では、田中 顕悟准教授を講師として、アメリカのソーシャルワーク分野では確立した領域で講師の研究テーマでもある Military Social Work の知見をヒントに、命・危険と向き合う人々と家族の Well-being 向上について、参加者の皆さんと共に学んだ。

【第１部：講話】
アメリカの Military Social Work の知見をヒントに、命・危険と向き合う人々と家族の Well-being 向上について考える

【第２部：ワークショップ】
Military Social Work に関する書籍展示
講師の研究や、社会福祉学部への質問コーナーを設けディスカッション

（2）活動成果・評価

地域で活躍されている福祉専門職、高校生や、本学在学生、教員と幅広い参加があり講座終了後のアンケートでは「新しい視点を得ることが出来ました。どの領域にもある“文化”の尊重について、見つめ直すことが出来ました」「命や危険と向き合う人の支援をおこなう際、その人の生き方や誇り、個人の希望やジレンマの理解が必要であることを学んだ」「本日の内容は、医療介護福祉に従事する専門職のメンタルヘルスを考えるうえでも通じるものがたくさんあると感じた。職場全体で職員１人１人の Well-Being について考えられる風土が広がると良いと思った」「なかなか触れる事ができない分野のお話で興味深かったです。社会福祉に興味が沸きました」などの感想があり、参加者より終了後のアンケートでは「とても満足」８８％、「満足」１３％と高評価であった。今後も本学部の「知」を活用した学びの機会を提供できるよう企画立案し、本事業の目的を果たしていきたいと考える。

（3）講座の様子



①会場全体の様子



②ワークショップ
Military　Socialwork に関連する資料や書籍の説明



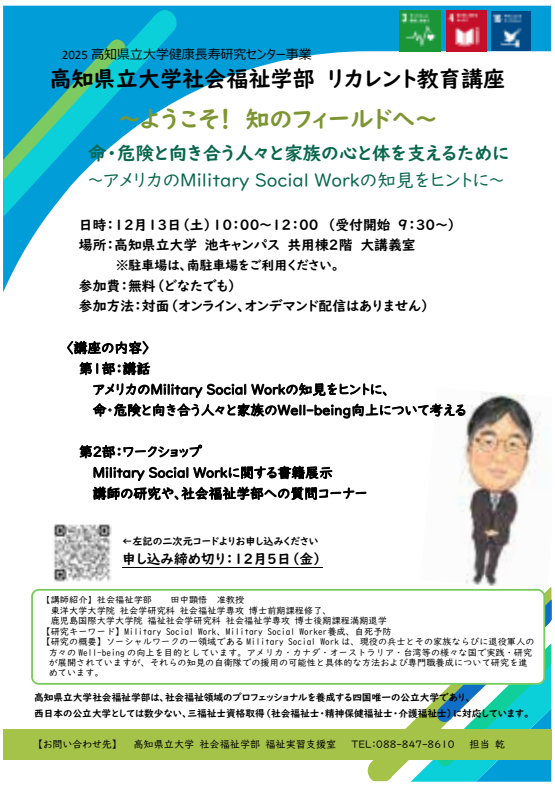
③ワークショップ
アメリカでの Military Socialwork 活動について紹介



④ワークショップ
動画教材の視聴

【アンケート集計結果】

- 本日の講義でのソーシャルワークの対象は、軍や自衛隊に勤めている人や家族だったが、医療・介護で従事している人たち本人に対する支援にも通じるものが沢山あると感じた。職場全体で１人１人のウェルビーイングを考えさせられるとよい。
- 「自分がどのような立場で接するべきか」というのを考えさせられた。「尊厳を守る事」に重点をおくにはケアが必要なのか難しいなと思った。
- 今まで触れる機会がなかった分野だが、とても興味深い内容で社会福祉について興味が湧いた。
- 命や危険と向き合う人の生き方や誇り、その人個人の希望や精神とのジレンマが支援の難しさに繋がっていると分かった。
- 環境を変えることができなくてもその人とその人が大切にしている家族の日常が守られるよう、後悔しない選択が出来るように支援することが私にできることであり、他分野でも大切にすべき視点を学ぶことができた。今回の講義で知りたいことを全て知ることができたので特にはなかったです。とても興味深く、面白かった
- 新しい視点を得られました。でもどの領域に通ずるものである文化をみつめることができました。
- Military Social Work についてもう１回理解できた。今後、卒論に向けて勉強していきたい。
- 日本での実践や研究への応用や、今後の展望について興味があり知りたいと思った。
- 大変分かりやすい講義であった。アットホームな講座だった。



5　新任期行政栄養士研修会



健康栄養学部 講師　村井 詩子

活動ポリシー　4　高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動
開催日時　令和７年６月 25 日（水）13 時 30 分～ 16 時
令和７年 12 月２日（火）13 時 30 分～ 16 時
開催場所　高知県保健衛生総合庁舎
対　　象　採用１～２年目の行政栄養士７人、他
参加者数　16 人
教 職 員　健康栄養学部 講師　村井 詩子

（1）事業概要

近年、ライフコースに応じた健康づくりの推進が求められているが、高知県では、特に少子高齢化や過疎化等の進行により、住民のニーズや地域の栄養・食生活を含めた健康課題は複雑化している。行政栄養士は、これらの健康課題に対して求められる役割が大きくなっている一方で、業務は、栄養・食生活支援、低栄養予防対策、食中毒対策から食品衛生管理など多岐にわたる。これらの業務や健康課題の解決に取り組む中で、行政栄養士には、公衆栄養におけるマネジメント力が求められている。そのため、高知県では、平成 31 年３月に「高知県行政栄養士人材育成ガイドライン」を作成し、行政の役割である成果の見える施策づくりを担える行政栄養士の人材育成を計画的に行っている。

本事業では、高知県健康政策部保健政策課と連携し、新任期（採用1～2年目）の行政栄養士に対して研修会を開催し、行政栄養士が地域の健康課題や業務上の課題を把握し、優先課題の抽出、課題解決に向けた事業計画の立案、事業の実施、評価を行うために必要なマネジメントに関する知識や技術を習得することを目的として講義や演習を行っている。

（2）活動成果・評価

高知県内で令和7年度と令和6年度に採用された行政栄養士７人を対象として、「高知県行政栄養士人材育成ガイドライン」に基づき、年２回の研修会を実施した。前期は、行政栄養士として、地域の食環境や食生活等を含めた健康課題の整理、および優先課題を抽出する方法を習得することを目的として、公衆栄養マネジメントについて講義と演習を行った。後期は、国や高知県の健康政策や現状について概説し、地域診断の手法を用いた評価方法と計画立案について演習を行った。また、前期以降に取り組んだ事業の計画や評価について受講者間で助言や意見交換を行い、様々な視点から各自の課題について考えることができた。

両研修会とも、事前課題としてパワーポイントを用いた資料作成を依頼し、研修会時に発表を行うことで、事前・事後学習を通して業務上の課題について多角的に捉える視点を養うことができた。

前期事後アンケートから、参加者全員が計画立案の手順について理解できたという回答から、公衆栄養におけるマネジメントに関する知識の習得に繋がったと考える。また、後期事後アンケートからは、自身の業務と県や市町村の政策との関連についての理解や、担当業務の課題に対する事業計画の立案について理解が深まったという回答から、実際の業務の事業評価の方法に関する技術の習得に繋がったと考える。

（3）研修会の様子



①講義時の様子

6　高知県新任期保健師研修会



看護学部 准教授　小澤 若菜

活動ポリシー　4　高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

開催日時　【プリセプター能力育成研修】
令和７年５月 23 日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
令和８年３月 25 日（水）14 時～ 16 時 30 分
【１年目研修・個別支援】
令和７年８月５日（火）13 時 30 分～ 16 時 30 分
令和７年 11 月７日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
【２年目研修・地区診断】
令和７年６月６日（金）13 時 30 分～ 16 時 00 分
令和７年 12 月 15 日（月）13 時 30 分～ 16 時 30 分
【３年目研修・PDCA サイクル①】
令和７年８月１日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
令和７年 12 月 22 日（月）13 時 30 分～ 16 時 30 分
【４年目研修・PDCA サイクル②】
令和７年６月 13 日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
令和８年２月 19 日（木）13 時 30 分～ 16 時 30 分

開催場所　高知県保健衛生総合庁舎１階大会議室、
高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟２階 A216 会議室　他

対　　象　高知県、高知県内の市町村に所属する１年目～４年目の保健師、プリセプター

参加者総数　209 人　（受講者のみカウント）

教 職 員　看護学部 准教授　小澤 若菜、助教　岩井 由里、助教　小味 慶子（計３人）

外部講師　高知大学医学部看護学科：教授　野村 美紀 氏、講師　齋藤 美和 氏
高知学園短期大学地域看護学専攻：教授　廣末 ゆか 氏、准教授　大西 昭子 氏、
講師　髙橋 真紀子 氏（計５人）

(1) 事業概要

高知県新任保健師支援プログラムの一環として、新任期保健師（１年目～４年目）に対する研修会（リカレント教育・ケア検討会）を、高知県健康政策部保健政策課と協働で企画し、実施した。

(2) 活動成果

１年目の保健師を対象とした研修では「個別支援」、２年目の保健師を対象とした研修では「地区診断」、３年目の保健師を対象とした研修では「PDCA サイクル①」を、４年目の保健師を対象とした研修では「PDCA サイクル②」をテーマに取り組んだ。

令和５年３月に改訂した保健師人材育成マニュアル Ver. 3．1 に基づき、新任期保健師に必要な能力を高めるために、ZOOM 研修と集合研修により、講義とグループワークを中心に企画・実施した。

なお、前年度、研修課題の到達に難しさを感じていた１年目と３年目保健師の研修では、初回と２回目

の研修をそれぞれ対面による集合研修で行い、課題への取組方の支援や相談を直接行えるように工夫した。

また、外部講師として協力いただく教員と事前に打ち合わせを行い、当日スムーズに実施できるよう準備した。

当日欠席した受講者には、個別にコンサルテーションを行い、課題達成に向けた助言を行った。

さらに、前期と後期の研修の間には、福祉保健所ごとに行われる、それぞれの時期に求められる能力を獲得していくためのフォローアップ研修に、講師として参画し、講義や個別にコンサルテーションを行い、課題達成に向けた助言を行った。

【プリセプター・管理者研修】

第１回プリセプター能力育成研修

日　時：令和７年５月 23 日（金）13 時 30 分～ 16 時 30 分
参加者：44 人
場　所：高知県保健衛生総合庁舎１階大会議室
内　容
●「高知県保健師人材育成ガイドライン Ver.3.1」について
　１）高知県保健師人材育成ガイドライン Ver.3.1 の概要
　２）新任期保健師支援プログラムの活用方法
●講　義「『新任期保健師支援プログラム』行動目標の立案」
講　師：小澤 若菜（看護学部 准教授）
●情報交換・グループワーク
＜プリセプター・管理者＞
講　義「管理者・プリセプターの役割」
講　師：小澤 若菜（看護学部 准教授）
　　実践報告「新任期保健師人材育成に取り組んでみて」
　　意見交換「管理者・プリセプターの役割、育成方法について」
＜新任者＞
情報交換会「保健師として働き始めて」
ファシリテーター：岩井 由里（看護学部 助教）
　　小味 慶子（看護学部 助教）

第２回プリセプター能力育成研修

日　時：令和８年３月 25 日（水）14 時～ 16 時 30 分
参加者：13 人
場　所：Web 形式
内　容
●保健師人材育成の取組について
　１）令和７年度事業実績報告
　２）令和８年度事業計画
●グループワーク・意見交換

【1年目研修・個別支援】

第1回新任期保健師研修会

日　時：令和7年8月5日（火）13時30分～16時30分
参加者：28人
場　所：高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟2階A 216会議室
内　容
●講　義「地区活動の一環としての家庭訪問を考える」
講　師：小澤 若菜（看護学部 准教授）
●グループワーク
●事例の解説・講義「プロセスレコードの書き方」
講　師：小澤 若菜（看護学部 准教授）

第2回新任期保健師研修会

日　時：令和7年11月7日（金）13時30分～16時30分
参加者：27人
場　所：高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟2階A 216会議室
内　容
●高知の保健師のめざす姿
講　師：松岡 智加（高知県健康政策部保健政策課　保健推進監）
●グループワーク
●まとめの講義
講　師：小澤 若菜（看護学部 准教授）

【2年目研修・地区診断】

第1回新任期保健師研修会

日　時：令和7年6月6日（金）13時30分～16時
参加者：26人
場　所：Web形式
内　容
●講　義「きいて、みて、ありのままの地域をとらえよう」
講　師：小澤 若菜（看護学部 准教授）
●グループワーク
●講　義「ポートフォリオを作ろう！」
講　師：小澤 若菜（看護学部 准教授）

第2回新任期保健師研修会

日　時：令和7年12月15日（月）13時30分～16時30分
参加者：25人
場　所：高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟2階A 216会議室
内　容
●グループワーク
●グループワークのまとめ

【3年目研修・PDCAサイクル①】

第1回新任期保健師研修会

日　時：令和7年8月1日（金）13時30分～16時30分
参加者：40人
場　所：高知県保健衛生総合庁舎1階大会議室
内　容
●講義「PDCAサイクルとは何か」
　講師：小澤 若菜（看護学部 准教授）
●グループワーク
●グループワークのまとめ

第2回新任期保健師研修会

日　時：令和7年12月22日（月）13時30分～16時30分
参加者：41人
場　所：高知県立大学池キャンパス本部・健康栄養学部棟2階A 217会議室
内　容
●グループワーク
●グループワークのまとめ

【4年目研修・PDCAサイクル②】

第1回新任期保健師研修会

日　時：令和7年6月13日（金）13時30分～16時30分
参加者：30人
場　所：Web形式
内　容
●講　義「PDCAサイクルにおける評価の視点」
　講　師：小澤 若菜（看護学部 准教授）
●グループワーク
●グループワークのまとめ

第2回新任期保健師研修会

日　時：令和8年2月19日（木）13時30分～16時30分
参加者：28人
場　所：高知県保健衛生総合庁舎1階大会議室
内　容
●グループワーク
●グループワークのまとめ

（3）活動評価

高知県内保健師1年目から4年目までを対象として「個別対応から地域の課題を捉える、個別支援に終わらず、個の問題を集団・地域の課題へと発展させる」ことを目的に、保健師として必要な能力を段階的に獲得することができるよう、OJTとOff - JTを組み合わせたプログラムとして企画・実施した。

参加者は、前期研修終了後、それぞれの自治体で自身が研修で学んだ内容をもとに課題に取り組み、プリセプターからの指導や、実践をふまえた課題を整理したのち、後期研修で１年間の取り組みについて発表を行った。なお、後期研修では今年度の取組が次年度に活かせるようにグループでの意見交換や県福祉保健所保健師や教員からのフィードバックを行った。

本研修のグループワーク、講義を通して、個別支援の展開、自己の振り返り、個から地域へ展開する地域看護の視点、PDCA サイクルに基づく事業展開方法等について、学ぶ機会を提供した。また、研修に参加できなかった受講者に対しては事前課題に対し書面にて、教員が個別にコメントを返すことで、受講生の日々の取組の継続・発展に寄与できるように取り組んだ。本研修は、受講する保健師が、自らの実践活動を整理して展開できるよう支援し、また各段階に応じた能力を獲得することができるよう展開している。したがって、研修自体を実践活動のひとつとして位置付けることができるよう、受講者個々の現場での経験にもとづく支援に取り組んだ。

受講者は、プログラムへの参加をとおして、自身の保健師活動を振り返る機会となるとともに、必要な知識や方法論をもとに保健活動の展開方法を学び深める機会となった。

今後、高知県の人材育成研修担当者と県福祉保健所との役割や連携のあり方、前期研修と後期研修のあいだのフォロー体制や方法を検討し、本研修が受講生にとって、より学びを深める機会となるよう取り組む予定である。

実践者をとおして県民の健康課題の解決に貢献するためにも、今後も引き続き新任期保健師の人材育成に、関係機関と協働した参画ができるよう考えている。

（4） 地域貢献に関する活動

1　生活習慣病予防のための料理教室

健康栄養学部 講師　隅田 有公子

活動ポリシー	3　高知県の医療機関、社会福祉施設等との健康長寿を推進する活動
開催日時	令和 7 年 11 月 29 日（土）10 時～ 13 時
開催場所	高知県立大学池キャンパス健康栄養学部棟 1 階調理実習室
対　　象	高知県民
参加者数	14 人
教 職 員	健康栄養学部 講師　隅田 有公子、講師　竹本 和仁、 助教　井治 賢希、助教　小山 智久、助教　杉本 拓海、助教　山岡 伸（計 6 人）
外部講師	高知医療センター　坂本 一美 氏、濱田 侑李 氏、小田中 叶子 氏（計 3 人）
学生スタッフ	4 人

（1）事業概要

食塩の過剰摂取は高血圧や胃がん等、生活習慣病の発症リスクとなる。高知県民の食塩摂取量は男性 9.7g、女性 8.4g（令和 4 年高知県県民健康・栄養調査）で、日本人の食事摂取基準（2025 年版）の目標量と比べても男女ともに 2g ほど多く摂り過ぎている。また、減塩は高血圧症や心血管疾患、脳血管疾患等の動脈硬化性疾患や慢性腎臓病といった様々な疾患の食事療法の基本となる。令和 6 年度、高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会 健康栄養連携部会で減塩レシピ集を作成した。令和 7 年度は高知県民への減塩の啓発、減塩を要する患者の食事療法の一助となることをねらいとし、作成した減塩レシピを用いて生活習慣病予防のための料理教室を開催した。

（2）活動成果・評価

当日は、初めに高知医療センター栄養局の管理栄養士が健康づくりに欠かせない減塩の基礎知識や日常生活で取り入れやすい減塩の工夫について講義を行った。講義後、減塩レシピ集を用い、参加者とスタッフが昼食と夕食メニューを調理し、味わいながら実践的に減塩の工夫について学ぶ調理実習を行った。

料理教室後に実施したアンケート（回収率 100%）では、生活習慣病予防のための食事の重要性が「よく理解できた」（86%）、「まあまあ理解できた」（14%）、また、メニューの味は「美味しかった」（36%）「まあまあ美味しかった」（50%）、本日の生活習慣病予防のための料理教室は「参考になった」（93%）、「まあまあ参考になった」（7%）と評価をいただいた。また、「とても参考になりました。家でも実施してみようと思いました。」「自分の味覚を確認できて、大変参考になりました。今後の食生活にいかしていきたいです。」といったご感想をいただき、参加者にとって学びの得られる内容となっていたと考える。

今後も高知医療センター栄養局と高知県立大学健康栄養学部で協働し、県民の健康増進を目指した食・栄養の取り組みを進めたい。

（3）料理教室の様子



①講義の様子



②調理実習の様子



③できあがった料理（昼食メニュー）



④できあがった料理（夕食メニュー）

生活習慣病予防のための

料理教室

管理栄養士による
講義と調理実習の教室です。



生活習慣病予防のための食事を知りたい方、塩分量を抑えたおいしい料理の作り方を知りたい方などにお勧めの教室です。また、日頃の食事についてもお気軽にご相談ください。

2025年11月29日（土）
10：00～13：00（受付9：30開始）

会　場：高知県立大学 池キャンパス 健康栄養学部棟１階 調理実習室
参 加 費：500円/1人（材料費等）
＊当日集金させていただきます
持 ち 物：エプロン、三角巾等、ハンカチ、筆記用具
定　員：20名

申込み方法：下記のいずれか
★高知医療センター　管理栄養士または総合受付にお声掛けください。
★高知県立大学　お電話もしくはファックスでお申し込みください。
TEL：088-847-8594　平日9：00～17：00（担当：高知県立大学 健康栄養学部 学部事務 大西）
FAX：088-847-8594　裏面に必要事項を記入の上お申込みください
申込期限：2025年11月25日（火）まで　定員に達し次第締め切ります
お車でお越しの方は大学の駐車場（申込用紙参照）をご利用ください

主催：高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会健康栄養連携部会
共催：高知県立大学健康長寿研究センター

2　高知県キャリア教育推進事業　集合研修

福祉で未来を探求！高校生のための Event 講座 1
社会福祉の事を分かりやすく学ぶ



社会福祉学部 准教授　辻 真美

活動ポリシー	2　高知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動
開催日時	令和 7 年 7 月 26 日（土）9 時 30 分～ 16 時 30 分
開催場所	高知県立大学　池キャンパス
対　　象	高校生及び保護者・教員
参加者総数	237 人（うち同伴者 116 人）
教 職 員	社会福祉学部:教授　長澤 紀美子、教授　西内 章、教授　田中 きよむ、教授　杉原 俊二、教授　矢吹 知之、教授　西梅 幸治、准教授　河内 康文、准教授　福間 隆康、准教授　遠山 真世、准教授　加藤 由衣、准教授　田中 顕悟、准教授　辻 真美、講師　井上 夏子、講師　行貞 伸二、講師　田中 眞希、講師　湯川 順子、講師　清家 庸佑、助教　稲垣 佳代、助教　上杉 麻理、助教　大熊 絵理菜、助教　玉利 麻紀、助教　乾 由美、助教　山本 大輔 事務局：倉橋 孝幸（計 24 人）
学生スタッフ	社会福祉学部 1 回生：計 17 人 社会福祉学部 3 回生：計 6 人

（1）事業概要

高校生とその保護者に対し、福祉・介護分野におけるキャリア像を明確に示すことで、長期的な展望をもち、介護人材の確保につなげることを目的にイベントを実施した。大学教員や学生に加えて、当事者であり大学院修了生でもある外部講師の方が、大学教員とトークセッション形式で自身の体験や本学での学び、研究成果を発表し、参加者が専門職の役割やキャリアについて学ぶ機会を提供した。

（2）活動成果・評価

【活動成果】

アンケート集計結果から参加者の 98%が「とても良かった」、「良かった」としており、プログラムは高い満足度を得る結果となった。自由記述においても「福祉･介護のイメージが良くなった」といった意見が見られた。アンケート結果の自由記述を一部紹介する。

・福祉についてどのようなことを学ぶのか、具体的な話を聞けて理解を深めることができた。
・県立大学の取り組みを聞くことで、福祉の本質を知ることができた。
・以前から福祉の仕事で人の力になりたいと思っていたが、今日のお話を聞いて、地域の方と力を合わせて地域をよりよくしていきたいと改めて強く思った。

【活動評価】

本事業のプログラムは 10 年目を迎え、本年度も「オープンキャンパス 2025」と同時開催で実施し、県外の地域からの参加もあった。本プログラムを通じて、大学の雰囲気や教員と学生の関係を直接感じられる機会となり、参加者の進路選択に貢献できたと考える。アンケート集計結果から、学内の雰囲気や授業内容などを知ることができ、福祉に対するイメージがより広く、深く変化し、福祉や本学部への関心が高まったことがうかがえた。これらの結果から、プログラム全体の構成に対して高い満足度が得られたと考える。

（3）集合研修の様子



①社会福祉学部説明会



②体験授業



③教員・先輩との談話室



④介護体験コーナー



福祉で未来を探求！高校生のための Event 体験 2
カフェで学ぶ福祉と認知症



社会福祉学部 准教授　辻 真美

活動ポリシー	2　高知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動
開催日時	令和７年９月６日（土）13 時～ 16 時
開催場所	高知県立大学　永国寺キャンパス
対　　象	高校生及び保護者・教員
参加者総数	19 人（うち、同伴者６人）
教 職 員	社会福祉学部 教授　矢吹 知之、准教授　辻 真美
	事務局：倉橋 孝幸、土居 誠（計４人）
学生スタッフ	学生は永国寺カフェのスタッフとして参加

（1）事業概要

高校生とその保護者に対し、福祉・介護分野におけるキャリア像を明確に示すことで、長期的な展望をもち、介護人材の確保につなげることを目的にイベントを実施した。今回の集合研修は、本学永国寺キャンパス食堂で毎月開催しているオランダスタイルの本格的な認知症カフェ「土曜の永国寺カフェ」（企画:土曜の永国寺カフェ実行委員会）を会場に行われた。プログラムでは、参加者同士の交流を深めるカフェタイムに加え、高知市成年後見サポートセンターによる「簡単解説・成年後見制度」のミニ講和が行われた。

（2）活動成果・評価

【活動成果】

アンケート集計結果からは、回答者のほぼ全員が「福祉・介護への興味を持った」、「福祉・介護の勉強をしたくなった」ことが示された。

一部、自由記述を紹介する。

・矢吹先生とゲストの方とのトークのような形で進め、講話が終わったら質問を受け付ける、という形でとても分かりやすかったです。一般的な授業の形とは違っていて、とても魅力的に感じました。
・一緒のテーブルに座った方々と認知症のことから世間話まで、様々なことを話すことができて、とても楽しかったです。
・認知症の方のご家族のお話を聞くことができて良い体験になりました。
・初めて認知症カフェに参加して、色んな世代の方とお話できて、どのような話題をふればよいかなど良い体験ができました。

【活動評価】

参加した高校生や保護者は、リラックスした雰囲気のなか、他の参加者とともにカフェタイムやミニ講話の時間を楽しんだり、講師の話に真剣に耳を傾けたりしていた。そういった参加者の様子やアンケート結果からは、永国寺カフェを会場とした今回の企画が、高校生にとって貴重な経験となり、福祉・介護への関心を深める機会となったことが伺える。スタッフとして参加している大学生も、参加者の誘導や飲み物の提供、会話のサポートなどを行い、参加者間のコミュニケーションを円滑にする役割をさりげなく果たし、終始あたたかい雰囲気の中で、盛況のうちに終了した。

（3）集合研修の様子



①ミニ講和



②カフェタイム



③カフェの様子



④振り返りの様子



福祉で未来を探求！高校生のための Event 体験 3
県立大生と行く最新の福祉体験ツアー



社会福祉学部 准教授　辻 真美

活動ポリシー	2　高知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動
開催日時	令和 7 年 10 月 18 日（土）12 時 25 分～ 16 時
開催場所	高知県立大学池キャンパス及びイオンモール高知
対　　象	高校生及び保護者・教員
参加者総数	19 人（うち、同伴者 2 人）
教 職 員	社会福祉学部 准教授　辻 真美
	事務局：土居 誠（計 2 人）
学生スタッフ	社会福祉学部 3 回生：計 6 人
	社会福祉学部 4 回生：計 4 人

（1）事業概要

高校生とその保護者に対し、福祉・介護分野におけるキャリア像を明確に示すことで、長期的な展望をもち、介護人材の確保につなげることを目的にイベントを実施した。

今回の集合研修は、福祉と福祉の仕事に触れることができる体験型イベント‘ ふくしフェア 2025’への参加ツアーを企画した。案内役の学生スタッフや大学教職員とともに、最新の福祉を見て、触れて、体験するなかで、人がよりよく生きることやともに支え合うことの大切さを学ぶ機会とした。

（2）活動成果・評価

【活動成果】

アンケート集計結果からは、回答者のほぼ全員が「福祉・介護への興味を持った」「福祉・介護の勉強をしたくなった」「福祉・介護の仕事をしたくなった」ことが示された。

一部、自由記述を紹介する。

・ふくしフェアに参加してみて、福祉をもっと身近に感じることができました。
・今回のツアーで一番印象に残ったのは電動車いすと機械を使う介護です。100kg をこえる人でも持ち上げることができると知り、とても驚きました。
・ふくしウルトラクイズでは、今まで知らなかった知識に触れることができてよかったです。大学生の皆さんとの会話も楽しめました。
・ノーリフティング体験やとろみ体験、実際に手話をやってみるなど、普段はできない体験が多くできたことにより、福祉の世界により近づけたと思います。
・県立大学の先輩方が案内してくれ、とても安心してツアーを終えることが出来ました。先輩方がリードしてくれ様々な体験をすることができたのでよかったです。

【活動評価】

アンケート結果から分かるように、高校生が体験を通して学ぶことで、より分かりやすく印象に残る体験となり、福祉・介護への興味・関心が高まったのではないかと考える。世間全般にある福祉・介護のマイナスイメージを払拭するためには、このような最新の福祉機器に直接見て、触れる体験型の講座が効果的であると感じる。今後もさまざまな関係機関と連携し、体験を通した学びの場を提供したい。

（3）集合研修の様子



①手話体験



②認知症 VR 体験



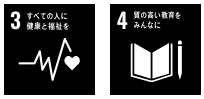
③ノーリフティングケア体験



④振り返り学習



福祉で未来を探求！高校生のための Event 体験 4
新２・３年生のための入門講座



社会福祉学部 准教授　辻 真美

活動ポリシー	2　高知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動
開催日時	令和８年３月 21 日（土）13 時～ 15 時
開催場所	高知県立大学　池キャンパス
対　　象	高校生及び保護者・教員
参加者総数	24 人（うち、同伴者７人）
教 職 員	社会福祉学部 准教授　辻 真美、助教　山本 大輔、助教　乾 由美（計３人）
外部講師	高知市保健福祉部 基幹型地域包括支援センター 谷脇 志穂 氏、高知市三里地域包括支援センター 西野 美知子 氏、高知市社会福祉協議会 高橋 彩 氏（計３人）
学生スタッフ	社会福祉学部１回生：計５人 社会福祉学部２回生：計２人

(1) 事業概要

高校生とその保護者に対し、福祉・介護分野におけるキャリア像を明確に示すことで、長期的な展望をもち、介護人材の確保につなげることを目的にイベントを実施する。今回のイベントでは、大学教員や学生が大学での学びの実際を報告することに加え、現場で活躍する専門職が仕事内容や役割について語ってもらい、さらに、福祉・介護の学問的な入門講義を行う予定である。これらをとおして、参加者に福祉・介護への理解を深めていただく機会を提供する。

(2) 活動成果・評価

【活動成果】

アンケート集計の結果、受講後の福祉・介護のイメージについて、回答者の全員が良いイメージになったことが分かった。また、受講後の福祉・介護への興味についても同様に全員が興味を持ったと回答された。

一部、自由記述を紹介する。

・みんなが自分事として捉え、つながっていくことが重要であることがわかった。
・福祉の仕事は、誰かと誰かの生きる希望となれるすてきな仕事だと思いました。
・福祉は、人と人とが関わり助け合うことであると、改めて理解が深まった。
・認知症の人が、どのように社会参加をしているのかを知り、第二、第三の家族という周りの人のあり方についても考えさせられた。
・社会福祉は、みんなが笑顔で生きるために必要なものだと思いました。
・私も県立大学の認知症カフェに参加して、交流したいと思った。

【活動評価】

アンケートの結果については、福祉・介護に対して具体的なイメージを持たない高校１・２年生を対象としたことが影響していると考えられる。このことから、介護人材の確保やイメージ向上のためには、早期の段階から継続的なアプローチが重要であるといえる。なお、本講座は、高知市が実施する認知症サポーター養成講座および高知市社会福祉協議会と連携して実施した。今後も、多くの関係機関と連携を図りながら取り組みを続けていく必要がある。

（3）集合研修の様子



①オープニング「10 年先の未来を学ぼう」



②認知症サポーター養成講座



③学内見学ツアー



④学内見学ツアー



高知県キャリア教育推進事業　訪問講座



社会福祉学部 准教授　辻 真美

活動ポリシー　2　高知県の医療・健康・福祉の政策課題を解決する活動

開催日時
① 2025 年 8 月 19 日（火）13 時 30 分～ 15 時 30 分
② 2025 年 8 月 28 日（木）16 時～ 17 時
③ 2025 年 9 月 11 日（木）16 時 40 分～ 17 時 40 分
④ 2025 年 9 月 24 日（水）16 時 10 分～ 17 時 30 分
⑤ 2025 年 9 月 25 日（木）10 時 50 分～ 12 時 40 分
⑥ 2025 年 9 月 25 日（木）13 時～ 14 時
⑦ 2025 年 9 月 26 日（金）16 時 10 分～ 17 時
⑧ 2025 年 9 月 29 日（月）16 時～ 17 時 30 分
⑨ 2025 年 9 月 30 日（火）16 時～ 17 時
⑩ 2025 年 9 月 30 日（火）16 時～ 17 時
⑪ 2025 年 10 月 15 日（水）15 時 45 分～ 16 時 45 分
⑫ 2025 年 10 月 20 日（月）15 時 50 分～ 16 時 50 分

開催場所　高知県内高等学校 12 校（①高知商業高校、②高知国際高校、③高知小津高校、④須崎総合高校、⑤大方高校、⑥高知丸の内高校、⑦中村高校、⑧岡豊高校、⑨春野高校、⑩高知農業高校、⑪土佐女子高校、⑫安芸中学・安芸高校）

対　　象　高校生及び保護者・教員

参加者総数　総数 155 人（うち、高校生 116 人）

教 職 員　社会福祉学部 教授　西内 章（④⑦）、准教授　辻 真美（⑧⑨⑫）、講師　行貞 伸二（③⑥）、講師　田中 眞希（①⑩）、講師　清家 庸佑（②⑪）助教　乾 由美（②⑤⑪）、助教　山本 大輔（⑧）（計 7 人）

外部講師　藤本 里映 氏（住友生命保険相互会社）（①）、柿内 靖 氏、亀谷 賢汰 氏（黒潮町地域包括支援センター）（⑤）、芦辺 百音 氏（社会福祉法人 高知市社会福祉協議会）（⑧）、岡 未来 氏（社会福祉法人 仁淀川町社会福祉協議会）岡村 知良 氏（社会福祉法人三寿会 特別養護老人ホーム 湯の里（⑨）、徳平 愛 氏（医療法人白菊会 白菊園病院）（⑪）（計 7 人）

学生スタッフ　社会福祉学部 1 回生：12 人、2 回生：5 人、3 回生：4 人、4 回生：7 人（計 28 人）

（1）事業概要

福祉･介護への理解を深めることを目的に､高知県内の高等学校を訪問し､大学教員が理論､外部講師（卒業生）が福祉・介護現場での仕事内容や福祉・介護職の役割、学生スタッフが大学での学びの実際を説明した。また、開催にあたっては、各高校の担当者と事前に打ち合わせを行い、高校側の目的や意図、参加者の福祉・介護への興味・関心などの状況に合わせて内容を工夫して行った。

（2）活動成果・評価

【活動成果】

アンケート集計結果はおおむね好評であった。以下、自由記述を一部紹介する。

・人とのコミュニケーションにおいて、自身の会話の力が向上するだけでなく、相手の心情やどう受答えすればよいのかという複数の視点に気づけるのだと知り、改めて様々な人と関われる福祉の仕事は、人とつながれるすてきな仕事なのだと感じた。
・特に印象に残ったことは、福祉は教科書通りにはいかないということです。「学ぶことはたくさんあって、それが実習で全く応用できない時もあるけど、それがおもしろいところ」ということを聞き、さらに福祉に興味を持ちました。これからも福祉のことについて学んでいきたいと思いました。
・福祉について、あまり興味がなかったが、その道に進むという選択肢ができた。
・地域の方々と関わるのは、やっぱり素敵だなと思った。自分自身、誰かのためになる仕事に興味があったから、進路の選択肢に入れたいなと思った。

【活動評価】

本事業は今年度で 10 年目を迎え、県内の高校からのニーズも高まり、新規も含めて 12 校で実施することとなった。高校側の担当者の方々には、事業の目的や意図をより深く理解いただき、事前の打ち合わせから高校の状況や要望を丁寧に伝えていただいた。そのおかげで、各高校のニーズに応じた内容や時間帯などを工夫して実施できた。前述のアンケート結果からも、本事業は福祉・介護への理解を深め、ポジティブなイメージを醸成し、さらには仕事への魅力や価値を伝える上で有効であったと考える。

また、学生スタッフや外部講師にとっても、母校を先輩・後輩、教職員とともに訪問することは、自己を振り返るよい機会となっているようだ。事業の継続とともに、参加者の満足度をさらに高められる内容となるよう努めたい。

（3）訪問講座の様子



①高校生と卒業生とのグループワーク



②卒業生による講義



③卒業生の意見を引き出している様子



④学生と教員による講義

3　高知市三里地区サロン活動の継続支援プロジェクト
～地域と大学で育てる災害に強いコミュニティ～



社会福祉学部 准教授　辻 真美

活動ポリシー　6　高知県の地域共生社会に携わるリンクワーカーの育成に関する活動
開催日時　①令和 7 年 9 月 10 日（水）9 時 30 分～ 12 時
②令和 7 年 10 月 24 日（金）13 時 30 分～ 15 時
開催場所　①高知県立大学　池キャンパス
②千松園
対　　象　地域のサロン活動における次世代を担うリーダー・リンクワーカー、支援者および地域住民
参加者数　① 31 人
② 22 人
教 職 員　看護学部 助教　塩見 理香（②）／社会福祉学部 准教授　辻 真美（①②）、
講師　清家 庸佑（①②）、助教　乾 由美（①）／健康栄養学部 准教授　島田 郁子（①）、
事務局：宮脇 広道（①）、由比 由紀（①）、高芝 有美（①）
①計 7 人、②計 3 人（①②の合計 10 人）
外部・アルバイト生　高知市三里包括支援センター 1 人（①②）、高知市社会福祉協議会 1 人（①②）、三里地域介護サービス事業所連携団体 1 人（①②）、千松園 1 人（②）（計 4 人）
学生スタッフ　社会福祉学部 4 人（①）、社会福祉学部卒業生 1 人（②）、社会福祉学部 10 人（②）
①計 7 人、②計 15 人（①②の合計 22 人）

（1）事業概要

【背景】

介護予防の取り組みとして、2002 年より高知市で始まった「いきいき百歳体操（以下、体操）」は、今年で 23 年目を迎える。サロン活動は介護予防だけではなく、地域で暮らす高齢者にとって大切な居場所や他者との交流の場となっていたが、コロナ禍でサロンが閉鎖され、閉じこもりになりがちな高齢者が増加、不活動やフレイルへの懸念が地域支援者から聞こえてきた。これを受けて、健康長寿センター（現・健康長寿研究センター）は自宅や地域で運動ができるよう「おうちで健康長寿体験型セミナー」の動画を作成し、配信を行った。

その後、地域の集いの場が徐々に再開されていくなかで、参加者の減少やリーダーの後継者不足、活動のマンネリ化で、今後、活動の減退や停止のおそれがあるなどの課題が、住民や三里地域包括支援センターから寄せられ、令和 4 年より、サロン活動の活性化を目的として、三里地区にて転倒予防体操教室を開始した。

今年度実施した地域包括支援センターと高知市社会福祉協議会との意見交換の場では、昨年度の三里地区サロン活動継続支援プロジェクトの活動により、三里地区にあるサロンが一つも閉鎖することなく継続した活動ができていると肯定的な内容が共有された。一方で、三里地区は南海トラフ地震が発生した場合、津波被害が想定されており、高齢者の中には、避難を諦めている方がいるとの課題が共有された。

そこで、日頃から、サロン活動や集いの場に集まることで、有事の際の助け合いや逃げる足の筋力、体力づくり（転倒予防体操・新聞棒体操など）ができるため、今後もサロン活動や地域の集いの場を続けて

いく必要があり、住民の集いの場である避難タワーを起点とした高齢者の防災意識の向上や避難行動への動機づけに繋がる活動への支援が必要であるとの議論となった。このことより、令和７年度は「日々の暮らしの中で災害に備える力を身につけよう」と題して、三里地域の住民と本学がともに、南海トラフ地震への防災活動を主軸にした事業を計画した。

【目的】

本事業は、三里地区の集いの場を起点として、高齢者の防災意識の向上や避難行動への動機づけに繋がるとともに、平時から災害への準備性を備える事により、今後も住み慣れた地域で暮らし続けられるための一助となることを目的とする。また、事業会場は、三里地区の避難施設と本学池キャンパス施設を利用することで、災害時の避難経路の具体的なイメージ化や、高知市の指定避難場所である本学を知り身近な存在となることが、住民間及び本学との平時からのつながりをつくることとなる。

さらに、学生が事業に参加することで、住民の暮らしや生活環境を肌で感じ、そこに暮らす住民との対話から、地域課題を学べるため、対象者の立場で支援できる専門職の育成にもつながると考えられる。

（2）活動成果・評価

①９月 10 日（水）高知県立大学　池キャンパス９時 30 分～ 12 時

○講演「避難時の体力づくりと筋力アップの食事、災害時の料理方法（パッククッキング）」

＊体験１－１：講演「‘いざ’という時の貯筋の大切さについて」

・周囲の人と話し合い、避難場所を決めておこう！

・‘いざ’という時、皆で逃げるための貯筋の大切さ

・体操前の心構えと体調チェック

＊体験１－２：避難所設営「みんなで一緒に、避難所の設営をやってみましょう！」

・受付や簡易テントの設置、簡易ベッドの設営、ダンボールベッド、トイレの作成

・ダンボールベッドで新聞棒体操の実施

＊体験２：「湯せん専用のポリ袋を使った‘パッククッキング’で災害食づくり」

常備食を使ったサバイバル丼、ういろう２種類、試食

②10 月 24 日（金）千松園　13 時 30 分～ 15 時

○学生と一緒に新聞棒づくり

○講演「日々の暮らしの中で災害に備える（貯筋習慣）を身につけよう」

・体操の効果と気をつけておきたいこと

・体操前の体調チェック

○レクリエーション

・ボール体操

○交流会（グループワーク）

・テーマとして、会場別の取組み紹介、いきいき百歳体操で課題に感じていること等、学生がファシリテーターを担当し、住民の方々の発表をサポートした。

評価

・住民同士の日常的なつながりを促し、三里地域活動の活性化が図ることへの一助となった。

・災害時の指定避難場所である池キャンパスを身近に感じることで、住民間及び大学との連携が強まり、災害への備え（防災意識の向上）につながったのではないか。

・専門職養成の観点からは、将来、住民の視点に立って行動できる専門職になることが期待できる。

（3）三里地区サロン活動の様子



①体育館の震度５で開く鍵保管庫を確認（高知県立大学）



②段ボール作る簡易トイレを作成（高知県立大学）



③交流しながら新聞棒を作成（千松園）



④いき百サロンの課題を話し合う様子（千松園）



⑤アンケートの様子（千松園）



⑥記念写真（千松園）





4　第 14 回　みさとフェア

活動ポリシー　3　高知県の医療機関、社会福祉施設等との健康長寿を推進する活動
開催日時　令和 7 年 11 月 30 日（日）10 時 30 分～ 14 時
開催場所　高知市立十津小学校
対　　象　三里地区住民
参加者総数　約 700 人（みさとフェア参加者）
教 職 員　健康長寿研究センター長　久保田 聰美／看護学部 助教　塩見 理香／社会福祉学部 講師
清家 庸佑 、助教　乾 由美／健康栄養学部 講師　隅田 有公子、助教　杉本 拓海
事務局：土居 誠、倉橋 孝幸、天野 美夢、片山 美涼（計 10 人）

(1) 事業概要

みさとフェアへの出展は、包括的連携協定を結んでいる高知医療センターから、共同出展のお声掛けをいただいてから、今年度（令和 7 年度）で 10 回目の参加となる。両機関が立地している池・三里地区への地域貢献として、健康啓発に関わるブースを出展し、多くの地域住民の方々に健康について関心を持っていただくことを目的として実施している。

本学からは血管年齢測定、ストレス測定などの健康測定機器を用いた健康チェックや災害食サンプル展示などを企画した。

(2) 活動成果・評価

10 回目の参加となった本事業は、例年多くの住民が参加するイベントであり、今年度は十津小学校にて開催された。

高知医療センターとの共同出展ブースへは、今回も高知県のイメージキャラクター「くろしおくん」の誘導により、多くの住民が足を運んだ。出展内容としては、健康測定機器を用いた健康チェックや災害食サンプルの展示に加え、今年度新たな取り組みとしてスタートした「つながる保健室」を実施。日頃のちょっとした身体の悩みについて気軽に相談が寄せられ、来場者が自身の健康を見つめ直す有意義な機会となった。また、本学の取り組みを発信するため、広報誌の設置・配布もあわせて行った。

みさとフェアへの参画を通じ、今後も池・三里地域の住民が健康への関心を深められるよう、高知医療センターと協働しながら継続的な健康啓発活動に取り組んでいく。

(3) みさとフェアの様子


①血管年齢・ストレス測定


②災害食サンプル展示


③つながる保健室

5　高知医療センター包括的連携　子育て支援事業赤ちゃん同窓会



看護学部 教授　髙谷 恭子

活動ポリシー	3　高知県の医療機関、社会福祉施設等との健康長寿を推進する活動
開催日時	令和 7 年 10 月 5 日（日）13 時～ 16 時
開催場所	高知県・高知市病院企業団立　高知医療センター
対　　象	高知医療センター NICU に入院経験のある子どもと家族
参加者総数	103 人（子どもを含めた 27 組の家族 90 人、医師 2 人、看護師 9 人、他職種 2 人）
教 職 員	看護学部 教授　髙谷 恭子､准教授　有田 直子､助教　佃 勇輝､助教　田之頭 恵里(計4人)
学生スタッフ	看護学部 2 回生 10 人、1 回生 3 人、看護学研究科大学院生 1 人（計 14 人）

(1) 事業概要

赤ちゃん同窓会は､高知医療センターの NICU（新生児集中治療室）を退院した子どもへのフォローアップとファミリーケアの継続、及び家族同士の情報交換の場の提供を目的としている。本事業は、高知医療センターと高知県立大学看護学部（以下、本学）が共催し、平成 13 年度より年 1 回開催してきた。令和 2 年度～令和 6 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため開催中止となっていたが、今年度より再開された。

赤ちゃん同窓会の参加者は、高知医療センターの NICU に 3 ヶ月以上入院した子どもとその家族、または希望者とその家族であり、きょうだいや祖父母も対象としている。会のプログラムには、①家族の手記発表、②講演会、③家族と医療従事者との交流会、④お楽しみ会があり、高知医療センターは、本事業の企画や対象者への連絡を行うとともに、当日の運営を本学とともに実施する。本学は、参加者が楽しく過ごすことができるよう、安全に配慮しながら会場の設営を行う。また、お楽しみ会での出し物や家族と医療従事者との交流会の際、保育室での子どもとの交流などを担当している。

(2) 活動成果・評価

【活動成果】

1）学部生、大学院生のボランティア参加

学部生や大学院生が本事業の趣旨やプログラム、役割や活動内容を理解して会に参加できるよう事前に説明会を行い、当日は学部生 13 人、大学院生 1 人がボランティアとして参加した。また、参加する子どもの特徴をふまえ、感染症対策や安全管理について事前に説明を行うとともに、当日も体調や安全管理について留意点や注意事項の説明を行った。会の開催中、大学院生と教員は、学部生や参加者である子どもの体調や安全に注意を払い、医療センターのスタッフとともに安全管理に努めた。

2）保育室の運営

学部生と教員は、子どもが保育室で楽しく安全に過ごせるように、発達段階を考慮した飾り付けを行った。また、家族と医療者が交流している間、保育室で子どもを預かる際は、2 ～ 3 人の学部生が 1 ～ 2 人の子どもを担当し、塗り絵や折り紙、DVD の視聴など、子どもの好みや発達段階に合わせた遊びを提供した。大学院生や教員、医療センターのスタッフは、子どもと学部生が楽しく安全に過ごせるよう見守りを行い、必要に応じて学部生を支援しながら安全な環境を整えた。

3）お楽しみ会への参加

お楽しみ会では、アンパンマンやバイキンマンの着ぐるみを着用した学部生がステージ上でアンパンマン体操を踊った。その他の学部生と教員は、ステージ上で一緒に踊っている子どもの安全に配慮しながら、会場にいる他の子どもや家族とともに踊ったり手拍子をして会場を盛り上げた。また、お楽しみ会の後、着ぐるみを着用した学部生は子どもと一緒に写真撮影を行うなど、お楽しみ会終了後も子どもや家族とかかわった。当日は気温が高かったことから、教員は定期的に学生スタッフの体調確認を行うとともに、特に着ぐるみを着用している学部生の体調変化に注意を払い、休息や水分補給を促し体調管理に努めた。

【活動評価】

ボランティアとして参加した学部生は、会場の設営や保育室の飾り付けを通して、子どもが楽しく安全に過ごせる環境を整えることへの理解を深めていた。また、保育室の運営では、医療センターのスタッフと大学院生、教員が協力して学部生と子どもを見守り、事故なく終了することができた。日頃、子どもと接する機会が少ない学部生は、子どもとのかかわりに少し戸惑っている様子もあったが、大学院生や教員と一緒に子どもとかかわる中で、子どもの特徴や発達段階に合わせた接し方を学び、遊びの提供に繋げていた。さらに、子どもと家族の様子を見ることや手記発表に参加することにより、NICU に入院経験のある子どもと家族のありようを知り、子どもを育む家族の思いや体験、生活について考える機会となっていた。参加した学部生からは「子どもとかかわることができて楽しかった」、「NICU から退院した子どもと家族の生活が少しイメージできた」などの感想があり、会への参加を通して子どもと家族への関心を高めることに繋がったと考える。高知医療センターのスタッフからは、ステージ上の学部生だけでなく、学生スタッフ全員が子どもや家族と共にアンパンマン体操を踊るなど、温かい雰囲気づくりへの貢献について肯定的な評価があった。

講演会や家族と医療従事者との交流会では、NICU に入院経験のある子どもの成長発達や育児に関すること、医療従事者への期待など様々なテーマについて意見交換が行われた。このような機会を通じて、家族同士が繋がり情報を交換するとともに、医療従事者が家族の取り組みを認め、エンパワーメントする機会となっていた。

以上のことから、子どもと家族に安全で楽しい時間を提供するとともに、本事業の目的である NICU に入院経験のある子どものフォローアップとファミリーケアの継続、及び家族同士の情報交換の場の提供に貢献できたと考える。

赤ちゃん同窓会は、NICU に入院経験のある子どもを育む家族を集団としてエンパワーメントする効果が高いことから、今後も高知医療センターと本学が協働し、会の継続に向けて取り組むことが重要である。また、本事業の開始から 20 年以上経過していることから、今後、事業の効果を評価することについても検討していく。

（3）講演の様子



①保育室の飾り付け



②着ぐるみを着た学部生

6　地域ケア会議推進プロジェクト



看護学部 助教　竹中 英利子、助教　源田 美香

活動ポリシー　1　高知県の皆様に対し、健康長寿を啓発する活動
開催日時　通年
開催場所　土佐市市役所
対　　象　土佐市地域包括支援センター
参加者総数　155 人
教 職 員　看護学部 助教　竹中 英利子、助教　源田 美香

(1) 事業概要

【事業目的】

1．土佐市の地域ケア会議において介護支援専門員からあげられる対応困難ケースの課題整理、課題分析援助法の考案支援を行う。
2．地域ケア会議の運営、土佐市における地域資源の開発に関する助言、提案を行う。

【事業内容】

地域ケア会議は土佐市の事業所が担当している要支援１、要介護１のケースについて２回検討する。各回､3事業所から３ケースについて検討を行う。第１回目の会議では､ケースについての報告をうけ､看護師、保健師、薬剤師、理学療法士、歯科衛生士、介護福祉士などが専門的な視点でケースの対応困難状況の分析、ケアの方向性などについて助言を行う。つづいて、第１回目の会議から３か月後に開催する第２回目のモニタリング会議では、事業所より第１回目の会議の内容をうけての情報の追加、介入の実施状況と成果、今後の課題について報告をうけ、今後のケアの方向性を協議する。

また、各回のケース検討終了後には専門職間で土佐市の介護上の課題とその対応策について、地域ケア会議の運営方法の工夫について協議し、介護支援専門員をはじめ関わる専門職がケースについて検討する意義を見出せるような助言方法、土佐市の医療福祉資源の状況などについて共有する。

(2) 活動成果・評価

今年度は計８回の地域ケア会議に出席した。

・令和７年　４月 16 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分　３ケース検討
・令和７年　７月　２日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分　３ケース検討
・令和７年　８月　６日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分　３ケース検討
・令和７年 10 月 15 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分　３ケース検討
・令和７年 11 月　５日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分　３ケース検討
・令和７年 11 月 19 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分　３ケース検討
・令和８年　１月　７日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分　３ケース検討
・令和８年　２月 18 日（水）13 時 30 分～ 15 時 30 分　３ケース検討

期待される役割として、地域ケア会議における看護アドバイザー、土佐市の介護上の課題とその対応策、地域ケア会議の運営方法の工夫について提案する役割として地域ケア会議に出席した。

第１回目の検討会では、脳卒中や循環器疾患の既往があり、認知症を併発しているケースを取り上げた。介護支援員や各事業所のスタッフからは、認知症の進行を遅らせるための支援や、家族介護者の負担を軽減するための支援について、対応の難しさの具体例が共有された。会議では、ケアチームですでに行われている有効なアプローチは保証しつつ、認知症の症状は、身体状態や生活環境の変化による影響を受けやすいことを考慮した助言、疾患に伴う症状変化や異常の早期発見に向けた観察ポイントを助言した。また、血液検査結果から予測される身体状態について説明し、家族介護者の言動の背景理解や、家族の強みを活かして介護負担感を軽減するためのアプローチについても助言を行った。第２回目のモニタリング会議では、第１回目で検討したアプローチの実施状況とその効果が報告され、初回の助言が支援に活かされていることが確認された。

会議運営においては、これまで支援者が築いてきた利用者・家族との援助関係や、各事業所が積み重ねてきた支援内容を尊重し、それらを活かせるような助言を行った。これにより、支援の実行可能性を高めることができた。また、医療・福祉資源の現状や課題を参加者間で共有したことで、その情報を踏まえたケースへの助言が可能となり、より現実的で効果的な支援方針の検討につながった。

7　土佐市両親学級



看護学部 助教　徳岡 麻由

活動ポリシー　1　高知県の皆様に対し、健康長寿を啓発する活動
開催日時　通年
開催場所　土佐市保健福祉センター
対　　象　土佐市地域包括支援センター
参加者総数　16 人
教 職 員　看護学部 助教　徳岡 麻由、助教　前田 愛友香（計 2 人）
外部講師　土佐市健康づくり課保健師
学生スタッフ　8 人

（1）事業概要

包括連携を締結している土佐市と高知県立大学との連携事業の一つとして位置づけている。地域で開催される両親学級に参加し、母子保健事業の実際や健康教育の課題を知ることで、妊婦および家族への対象理解を深め、支援者とのネットワークを構築している。教員だけでなく学生も共に事業に参加することにより、教育現場と地域との連続性のある学生指導につなげることもねらいである。学生にとっては地域の中で生活する妊娠期にある対象の生活や家族の発達、健康を支える看護について理解を深め、具体的な支援を考える機会となっている。

両親学級の内容は ①管理栄養士による妊娠中の食事バランスに関する指導 ②親になることや産後のメンタルヘルスについて、分娩経過 ③沐浴指導、妊婦体験（学生が 1 組の対象に 2 人ずつ関わる）、授乳のポジショニング体験 ④育児生活のシミュレーション、子どもとの関わり方についてのワークである。学生は両親 1 組につかせていただき、コミュニケーションをとりながら体験、演習に関わるなど積極的に参画している。

研究への展開としては、助産看護実習前の助産コース選択学生のフィールドワークとして位置付け、看護研究につながるアプローチをしている。地域母子保健の現状と課題については、学級の前後で担当助産師をはじめとする地域専門職者と意見交換しながら課題やニーズを聞き取り整理し、研究的視点でどのようなアプローチができるかについて検討を重ねている。

（2）活動成果・評価

1）地域母子保健の対象理解

両親学級中に主に対象に関わる場面は、沐浴と妊婦体験、ポジショニング体験である。沐浴指導では、対象家族が新生児を迎えた後の生活を具体的にイメージしながら準備行動がとれるよう、工夫点や生活スタイルに合わせたやり方について両親とともに考え、コミュニケーションをとることができた。このことで対象者が基本的な育児技術を獲得するだけでなく、出産後の育児を具体的にイメージすることに繋がった。また今年度は、地域の助産師と共同して沐浴の手技やポイントを伝える動画制作を行った。動画により視覚的にポイントを理解した上で、その後の演習につなげていくためのリソースを開発できたことで、両親の沐浴実施のイメージを具体化できた。

妊婦体験は主に父親が行い、腹部増大に伴う動作の妨げなどを疑似体験するものである。体験を通して

父親は、母親の妊娠による身体の変化を肌で感じ、サポートを考える機会となる。学生にとっては、妻が妊娠している状況にある夫の気持ちを聞く機会となり、家族のコミュニケーションや相互作用を知り、学びを深める経験となっている。

ポジショニング体験では、新生児人形の抱っこ、授乳姿勢の体験を通して、新生児の特徴を理解しながら、授乳について具体的にイメージができるよう関わった。その際、対象夫婦の産後の生活や仕事と生活のバランスについてイメージできるようコミュニケーションをとりながら関わり、両親が具体的な育児生活のイメージを描くための機会となっている。このように、学生とともに地域の母子保健事業に積極的に参画することで、妊娠中の対象と家族を理解し、対象家族の地域での生活の実際、健康課題やニーズを知ることができている。また、学生が対象と関わり、健康教育の一部を実際に実施させていただく中で、対象の妊娠の受け止めや子どもへの思い、出産に向けた準備性の高まりを学ぶ貴重な機会を得ることができた。

2）地域母子保健サービスの実際の理解

地域母子保健サービスの展開を知り、その実際に関わることで、ニーズに応じて変化するサービスの概要や目的を理解することができている。少子化の進む地域において子育て世代を対象にどのような保健サービスが必要か、コミュニケーションをとりながら課題解決に向けた取り組みを話し合う良い機会となっている。学生にとっては、学内や臨床のみの学習ではなく、地域社会での実際のサービスとの連続性のなかで研究的視点をもち、学びを深める機会となっている。サービス実施までの準備や評価までの一連の流れもともに経験していることで、多職種間の連携や継続性のある事業展開について学び、地域の保健事業と結びつけて視野を広げる教育につながっている。

(3) 両親学級の様子



①栄養指導の様子



②ポジショニング指導の様子

8　健康長寿文庫

活動ポリシー　　1　高知県の皆様に対し、健康長寿を啓発する活動

(1) 事業概要

高知県立大学の池キャンパス図書館の収蔵書は、「看護・福祉・栄養」に関連した専門書を中心に所蔵されており、一般啓発書は多くなかった。そこで健康長寿研究センターは、平成 22 年度から同図書館に「健康長寿文庫」を整備し、県民の方々に役立つような本を選定し、順次収めている。「健康長寿文庫」は、池キャンパス図書館内にコーナーが設けられており、受付カウンター近くには最新年度に収蔵された本が配架されている。各年度の収蔵数は下記のとおりである。

平成 22 年度	155 冊	令和元年度	128 冊
平成 23 年度	169 冊	令和 2 年度	150 冊
平成 24 年度	153 冊	令和 3 年度	119 冊
平成 25 年度	197 冊	令和 4 年度	72 冊
平成 26 年度	154 冊	令和 5 年度	87 冊
平成 27 年度	147 冊	令和 6 年度	20 冊
平成 28 年度	123 冊	令和 7 年度	51 冊
平成 29 年度	80 冊	（合計）（	1908　冊）
平成 30 年度	103 冊		

(2) 活動成果

健康長寿研究センター運営委員が「健康長寿文庫」を選定し、書籍には推薦コメントを添えて展示をした。

(3) 活動評価

池キャンパス図書館に特設コーナーを設置し、教員からの推薦コメントを添えたこと、また、受付カウンター近くに最新年度の書籍を配架したことにより、多くの県民の方々が健康啓発に関する書籍に興味を持ち、書籍を手に取る機会となったと考える。

(4) 写真



①池キャンパス図書館　展示

総合情報研究センター紹介ページ

総合情報研究センター

総合情報研究センターは、高知県立大学の教育・研究活動の支援及び地域社会への貢献を目的として、学術情報の収集・蓄積と発信、ネットワークシステムの整備・運用・管理といった学術情報の基盤管理を行っています。教育・研究および事務業務を支える情報ネットワークシステムの整備やインターネットへの接続環境の整備をはじめ、無線 LAN へのアクセスポイントの提供、池・永国寺両キャンパスの情報の管理（パスワード認証、セキュリティ対策）などのサービスを提供しています。

健康情報 DX を推進し、新機構で得られた県民の健康情報に関するデータ等を解析し、高知県の発展や高知県民の健康・幸福感の向上に資する有益な情報を発信してまいります。

1．情報処理施設等の整備・維持・利用・運用に関すること
2．高知県立大学の地域共生学研究機構で得られた調査研究データの DX・解析に関すること
3．高知県立大学と地域共生社会の推進に係る有益な情報発信に関すること
4．高知県立大学の教職員・学生への情報リテラシー及び情報セキュリティ等に係る教育・研修に関すること
5．他の情報システムとの連携に関すること

(1) プログラミング講座

1　プログラミング講座（第 1 回）

総合情報研究センター 講師　根本 大志

開催日時	令和 7 年 8 月 5 日（火）9 時 45 分～ 15 時 20 分
開催場所	高知県立大学永国寺キャンパス情報演習室
対　　象	中学生・高校生
参加者数	10 人
教 職 員	総合情報研究センター：センター長　五百藏 高浩、 講師　根本 大志（計 2 人）
事 務 局	3 人

(1) 事業概要

IT・プログラミングに興味・関心を持つ中学生・高校生を対象に Javascript を用いたアプリ・Web アプリケーションの開発を体験してもらう。

(2) 活動成果・評価

当日は、五百藏センター長より講座開催の挨拶があり、根本講師により Javascript を用いたプログラミング講義・実習を行った。

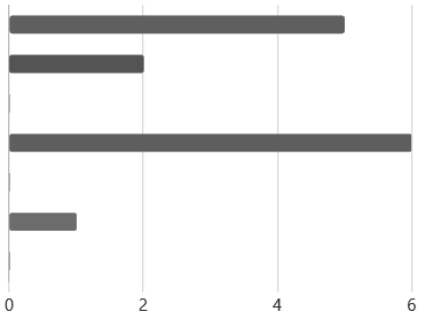
プログラミング講座後に実施したアンケート（回収率 100%）では、本講座に参加を決めた理由として「プログラミングに興味がある」（80%）、「将来の進路に役に立ちそうだから」（60%）と自信の将来に向け IT スキルに興味を持ち習得したいという、教育ニーズが高いことがわかった。また、難易度としては「少し難しかった」（60%）との答えが最多となったが、「今後もこのようなイベントに参加したいと思いますか」の問いには全員（100%）が " はい " と回答しており参加者に学びの意欲を高めるイベントの開催が出来た。今後も継続して同様の取り組みを行い本学への志望者増にも繋げていきたい。

8/5 開催　プログラミング公開講座アンケート結果

参加者：10 名　回答者：10 名（回答率 100%）

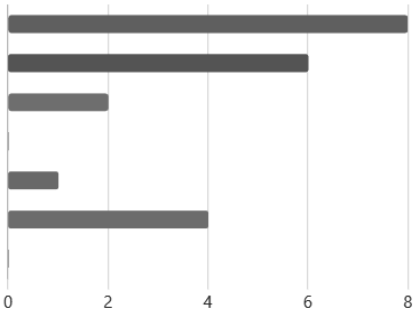
1. このイベントをどこで知りましたか？（複数選択可）　詳細情報

学校の先生から	5
保護者から	2
友達から	0
学校の掲示物・配布物	6
インターネット（ホームページ・SNSなど）	0
チラシ・ポスター	1
その他	0



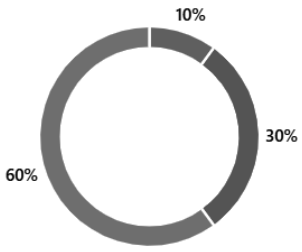
2. このイベントを受講したきっかけは何ですか？（複数選択可）　詳細情報

プログラミングに興味がある	8
将来の進路に役立ちそうだから	6
保護者や先生にすすめられたから	2
友達が参加するから	0
無料だったから	1
内容が面白そうだから	4
その他	0



3. 今回の講座の難易度はいかがでしたか？　詳細情報

とても簡単だった	1
ちょうどよかった	3
少し難しかった	6
とても難しかった	0



4. 受講した感想を教えてください。

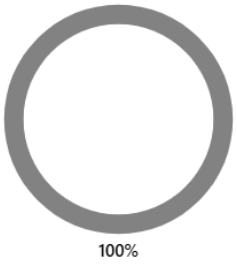
8 応答

ID ↑	名前	回答
1	anonymous	プログラミングの難しさと奥深さについて学ぶことができるいい機会だった
2	anonymous	楽しかったです。
3	anonymous	わかりやすく楽しんでプログラミングできたから参加してよかった
4	anonymous	普段できないことをできたのでいい経験になった。
5	anonymous	学校の授業でわからなかった内容をなぞっていたので復習になりました
6	anonymous	説明がわかりやすく今後も受けてみたい授業だと感じた
7	anonymous	難しいところもありましたが、楽しかったです！
8	anonymous	今までプログラミングは数回しかしたことがなかったのでとてもいい体験になりました。とても楽しかったです。

5. 今後もこのようなイベントに参加したいと思いますか？

詳細情報

- はい 10
- いいえ 0
- わからない 0





2　プログラミング講座（第 2 回）

総合情報研究センター 助教　名和 真一

開催日時	令和 7 年 12 月 13 日（土）9 時 45 分～ 15 時 20 分
開催場所	高知県立大学永国寺キャンパス情報演習室
対　　象	中学生・高校生
参加者数	7 人
教 職 員	総合情報研究センター：センター長　五百蔵 高浩、助教　名和 真一（計 2 人）
事 務 局	3 人

(1) 事業概要

IT・プログラミングに興味・関心を持つ中学生・高校生を対象に Python を用いて数値解析などプログラミング基礎を学んでもらう。

(2) 活動成果・評価

当日は、五百蔵センター長より講座開催の挨拶があり、名和講師により Python を用いたプログラミング講義・実習を行った。

プログラミング講座後に実施したアンケート（回収率 100%）では、本講座に参加を決めた理由として「プログラミングに興味がある」（86%）、「将来の進路に役に立ちそうだから」（43%）と第 1 回プログラミング講座と同様に自身の将来に向け IT スキルに興味を持ち習得したいという、教育ニーズが高いことがわかった。また、難易度としては「とても簡単だった」（28%）「ちょうどよかった」（28%）「少し難しかった」（43%）との回答で参加者に分かり易い講座となった。また「今後もこのようなイベントに参加したいと思いますか」の問いには全員（100%）が“はい”と回答しており参加者に学びの意欲を高めるイベントの開催が出来た。今後も継続して同様の取り組みを行い本学への志望者増にも繋げていきたい。

(3) プログラミング講座の様子



①講義の様子

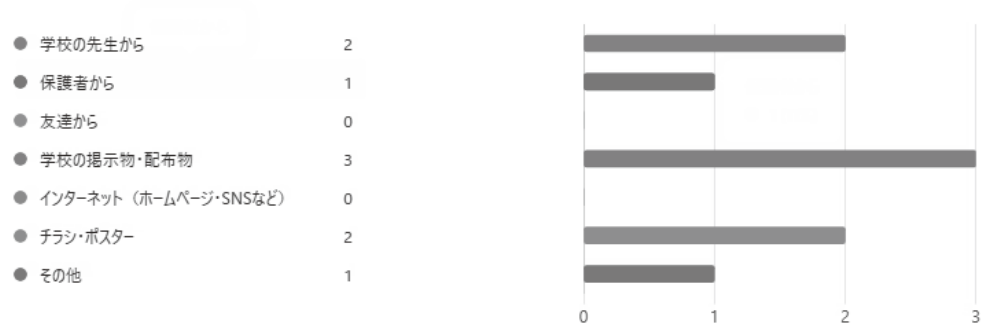


②講義の様子

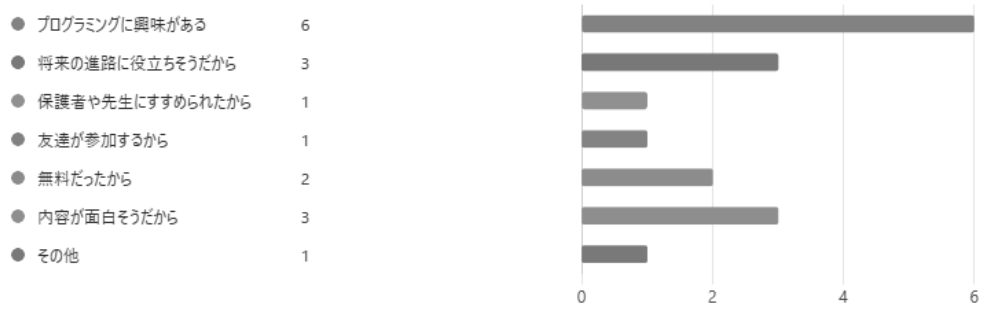
12/13 開催　プログラミング公開講座アンケート結果

参加者：7 名　回答者：7 名（回答率 100%）

1. このイベントをどこで知りましたか？（複数選択可）　詳細情報



2. このイベントを受講したきっかけは何ですか？（複数選択可）　詳細情報



3. 今回の講座の難易度はいかがでしたか？　詳細情報



4. 受講した感想を教えてください。

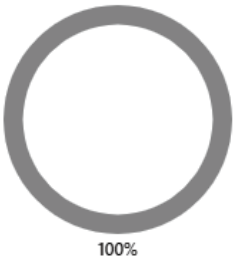
6 応答

ID ↑	名前	回答
1	anonymous	わかりやすく面白かった
2	anonymous	プログラミングの複雑さ、そして機械語がパソコンに伝わった瞬間の満足感が存分に味わえました。
3	anonymous	学校の授業以外でプログラミングをしたのは初めてで、とても楽しかった。またこのようなイベントがあれば、ぜひ参加したい。
4	anonymous	分かりやすくプログラミングに苦手意識があったが達成感もあり、良かった。
5	anonymous	プログラミングについて知れて、おもしろいと思いました
6	anonymous	先生の話し方が上手く、非常にわかりやすかった。コンピューターのすごさを実感でき、また、数学へ興味がわいてくる内容だと思った。

5. 今後もこのようなイベントに参加したいと思いますか？

詳細情報

- はい 7
- いいえ 0
- わからない 0





付　録

1　高知県立大学地域共生学研究機構規程

（趣旨）

第１条　この規程は、高知県公立大学法人高知県立大学組織規程第２条の規定に基づき、本学に設置する高知県立大学地域共生学研究機構（以下「機構」という。）の組織及び管理運営について必要な事項を定める。

（目的）

第２条　機構は、分野横断的・共創的な教育・研究を推進し、研究成果の社会還元機能を強化し、高知県における地域共生社会を支援することを目的とする。

（所掌事項）

第３条　機構は、次に掲げる事項を実施する。

（１）高知県における地域共生社会の支援に関すること

（２）分野横断的・共創的な教育・研究の推進に関すること

（３）健康長寿を推進する調査・研究及び社会実装の提案に関すること

（４）調査研究データの情報発信及び管理に関すること

（５）域学共生に関すること

（６）学生の地域活動・地域での学びの推進に関すること

（７）県内の高等学校等との連携に関すること

（８）地域社会や医療機関・社会福祉施設等との連携に関すること

（９）生涯・リカレント教育、専門職研修の充実に関すること

（１０）地域共生社会に携わるボランティア・リンクワーカーの育成に関すること

（１１）その他機構が必要と認めた事項

２　機構は、活動内容を点検及び評価しなければならない。

（組織）

第４条　機構は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

（１）地域共生学研究機構長（以下「機構長」という。）

（２）地域共生学研究機構副機構長（以下「副機構長」という。）

（３）地域共生学研究機構に所属する専任教員（以下「専任教員」という。）

（４）その他学長が指名した者

（運営会議）

第５条　機構の円滑な業務の推進及び連絡・調整に関する事項を協議するため運営会議を設置し、必要に応じて運営会議を開催する。

２　運営会議は、機構長が招集する。

３　運営会議は、機構長、副機構長、専任教員から１名、地域連携部長、その他機構長が指名する者で構成する。

４　運営会議の議長は、機構長が務める。

５　運営会議は、構成員の過半数の出席がなければ開くことができない。

６　運営会議の議事は、出席した構成員（議長を除く。）の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

７　機構長は、必要に応じて構成員以外の者を会議に出席させることができる。

（事務）
第６条　機構に関する事務は、地域連携部において処理する。
（雑則）
第７条　この規程に定めるもののほか、機構の運営に関して必要な事項は、別に定める。

附　則
この規程は、令和６年４月１日から施行する。
附　則
この規程は、令和８年４月１日から施行する。

2　高知県立大学地域教育研究センター規程・構成員

○高知県立大学地域教育研究センター規程

（目的）
第１条　この規程は、高知県公立大学法人高知県立大学組織規程（以下「組織規程」という。）第２条の規定に基づき、本学が、社会と連携する大学として、地域コミュニティに根ざし、未来を拓く「知の拠点」としての役割の強化並びに本学の理念である「域学共生」を推進するために設置する高知県立大学地域教育研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営について必要な事項を定める。
（所掌事項）
第２条　センターは、次の各号に掲げる事項を審議し、実施する。
（１）地域社会との連携に関すること
（２）生涯教育・リカレント教育の充実に関すること
（３）学生の地域活動・地域での学びの推進に関すること
（４）大学及び県内の高等学校等との連携に関すること
（５）地域共生社会に携わるボランティアの育成・訓練に関すること
（６）その他センターの運営に関し必要な事項
（組織）
第３条　センターは、次に掲げる教職員をもって構成する。
（１）地域教育研究センター長（以下「センター長」という。)
（２）センター専任の教員
（３）各学部及び大学院から選出された教員
（４）地域連携部長
（５）その他センター長が必要と認めた者
（センター長等）
第４条　センターにセンター長のほか副センター長を置く。
２　センター長は、組織規程第６条に定める業務のほか、第５条に定めるセンター運営会議 (以下「運営会議」という。)」の議長を務める。
３　副センター長は、前条第２号及び第３号のセンター員の中からセンター長が指名する。
４　副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代行する。

（センター運営会議）
第５条　センターの円滑な業務の推進及び連絡・調整に関する事項を協議するため運営会議を設置し、必要に応じて運営会議を開催する。
２　運営会議は、センター長が招集する。
３　運営会議は、第３条第１号から第５号までのセンター員で構成する。ただし、センター専任教員は、１名をセンター長が指名する。
４　運営会議の議長は、センター長が務める。
５　運営会議は、構成員の過半数の出席がなければ開くことができない。
６　会議の議事は、出席した構成員（議長を除く。）の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
７　センター長は、必要に応じてセンター員以外の者を会議に出席させることができる。
８　運営会議は、センターが行った活動内容を自己点検・評価しなければならない。
（任期）
第６条　第３条第３号のセンター員の任期は、２年とする。
２　欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
（事務）
第７条　センターの事務は、地域連携部において処理する。

附　則
１　この規程は、平成 24 年４月１日から施行する。
２　この規程の施行に伴い、高知県立大学キャリアセンター規程（平成 23 年４月１日施行）は廃止する。
３　この規程の施行に伴い、高知県立大学地域創成センター規程（平成 23 年４月１日施行）は廃止する。
４　この規程の施行に伴い、高知県立大学共通教育専門委員会規程（平成 23 年４月１日施行）は廃止する。

附　則
この規程は、平成 26 年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、平成 27 年４月１日から施行する。

附　則
１　この規程は、平成 30 年４月１日から施行する。
２　高知県立大学地域教育研究センター生涯学習部会規程、高知県立大学地域教育研究センターキャリア支援部会規程、高知県立大学地域教育研究センター産官学研究部会規程及び高知県立大学地域教育研究センター地域課題研究部会規程は、廃止する。

附　則
１　この規程は、令和２年４月１日から施行する。
２　高知県立大学地域教育研究センター地域連携部会規程は、廃止する。

附　則
この規程は、令和６年４月１日から施行する。

〇令和７年度高知県立大学地域教育研究センター構成員

地域教育研究センター

センター長	宇都宮　千穂
センター専任教員	石山　貴章
	鈴木　康郎
	秋谷　公博
	高徳　希

地域教育研究センター運営会議

議長	宇都宮　千穂
センター員	秋谷　公博
	内田　雅子
	橋尾　直和
	山中　福子
	田中　眞希
	井治　賢希
	三觜　美香

事務局

三觜 美香（永国寺キャンパス次長兼地域連携部長）
藤波 将司（地域連携課長）
保志場 由紀子
紀ノ國 亜妃
池知 靖野
竹内 理香

3　高知県立大学健康長寿研究センター規程・構成員

〇高知県立大学健康長寿研究センター規程

（目的）

第１条　この規程は、高知県公立大学法人高知県立大学組織規程（以下、「組織規程」という。）第２条に基づき、本学における地域の人々の健康長寿の推進及び健康長寿社会の構築に貢献する専門職者の最新の知識・技術の向上に努めるとともに、これらの研究を関連学部等が連携して円滑に推進するため設置する、高知県立大学健康長寿研究センター（以下「センター」という。）の組織及び管理運営について必要な事項を定める。

（所掌事項）

第２条　センターは次の各号に掲げる事項を実施する。

（１）健康長寿社会を推進する調査・研究及び社会実装の提案に関すること
（２）健康長寿を目指す県・市町村との連携に関すること
（３）医療機関・社会福祉施設などの健康長寿に関連する機関との連携に関すること
（４）健康長寿に携わる専門職等の教育・研修に関すること
（５）地域共生社会の実現に係る施策・事業の科学的評価に関すること

（６）地域共生社会に携わるリンクワーカーの育成に関すること
（７）その他学長が必要と認めた事項に関すること

（組織）

第３条　センターは、次の各号に掲げる教職員（以下「センター員」という。）をもって構成する。
（１）センター長
（２）センター専任の教員
（３）健康長寿の教育研究に従事している関連学部から選出された教員各２名
（４）地域連携部健康長寿研究センター担当職員から１名
（５）その他センター長が必要と認めた者

（センター長等）

第４条　センターにセンター長のほか副センター長を置く。
２　センター長は、組織規程第６条に定める業務のほか、第５条に定めるセンター運営会議（以下「運営会議」という。）の委員長を務める。
３　副センター長は、前条第２号及び第３号のセンター員の中からセンター長が指名する。
４　副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代行する。

（センター運営会議）

第５条　センターの円滑な業務の推進及び連絡・調整に関する事項を協議するため運営会議を設置し、必要に応じて運営会議を開催する。
２　運営会議は、センター長が招集する。
３　運営会議は、第３条第１号から第５号までのセンター員で構成する。
４　運営会議の議長は、センター長が務める。
５　運営会議は、構成員の過半数の出席がなければ開くことができない。
６　会議の議事は、出席した構成員（議長を除く）の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
７　運営会議は、センターが行った活動内容を自己点検・評価しなければならない。

（任期）

第６条　第３条第３号のセンター員の任期は、２年とする。
２　第３条第３号のセンター員は、再任することができる。
３　第３条第３号のセンター員に欠員が生じた場合の後任者の残任期間とする。

（事務）

第７条　センターに関する事務は、地域連携部において処理する。

（雑則）

第８条　この規程に定めるもののほか、センターの運営に関する必要な事項は別に定める。

附　則
１　この規程は、平成２３年４月１日から施行する。
２　ただし、高知県立大学の最初の健康長寿センター長の任期は、平成 24 年３月 31 日までとする。

附　則
この規程は、平成２６年３月２６日から施行する。

附　則
この規程は、平成２７年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、令和２年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、令和３年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、令和６年４月１日から施行する。

○令和７年度高知県立大学健康長寿研究センター構成員

健康長寿研究センター長		久保田　聰美
健康長寿研究副センター長		小林　秀行
看護学部	准教授	中井　寿雄
看護学部	助教	德岡　麻由
社会福祉学部	准教授	辻　　真美
社会福祉学部	講師	清家　庸佑
社会福祉学部	助教	乾　　由美
健康栄養学部	教授	近藤　美樹
健康栄養学部	助教	隅田　有公子

看護学部　特任教授（寄附講座、入退事業スーパーバイザー）

森下　　安子

看護学部　准教授（寄附講座、入退院事業学内責任者）

森下　　幸子

看護学部	特任助教（寄附講座）	井上　加奈子
企画調整課課長		三本　雅宣

事務局

企画調整課	土居　誠
企画調整課	倉橋　孝幸
企画調整課	福重　彩音

4　高知県立大学総合情報研究センター規程・構成員

○高知県立大学総合情報研究センター規程

（趣旨）

第１条　この規程は、高知県公立大学法人高知県立大学組織規程（以下「組織規程」という。）第２条の規定に基づき、高知県立大学（以下「本学」という。）が設置する総合情報研究センター（以下「センター」という。）について、必要な事項を定める。

（センターの目的）

第２条　センターは、情報・データ科学分野の教育及び応用に関する研究を行うとともに、地域社会の情報システム等との連携に取り組み、地域の発展に寄与することを目的とする。

（所掌事項）

第３条　センターは、次の各号に掲げる事項を実施する。

（１）本学の情報・データ科学領域の教育・研究に関すること。

（２）本学の情報処理施設・設備の利用者教育に関すること。
（３）本学の情報基盤の整備及び情報セキュリティ等の推進に関すること。
（４）地域共生学研究機構で得られた調査研究データの情報発信及び管理に関すること。
（５）他の情報システムとの連携に関すること。
（６）その他センターの運営に関し必要な事項
２　センターは、活動内容を点検及び評価しなければならない。
（組織）
第４条　センターは、次の各号に掲げる職員をもって構成する。
（１）高知県立大学総合情報研究センター長（以下「センター長」という。）
（２）センター専任の教員
（３）その他センター長が必要と認めた者
（センター長）
第５条　センター長は、組織規程第６条に定める業務を行う。
（運営会議）
第６条　センターの業務を総合的かつ計画的に推進するため、高知県立大学総合情報研究センター運営会議（以下「運営会議」という。）を置き、必要に応じて運営会議を開催して審議を行う。
２　運営会議は、次の各号に掲げる構成員をもって構成する。
（１）センター長
（２）センター専任の教員
（３）情報部長
（４）情報部情報課長
３　運営会議の議長は、センター長をもって充てる。
４　運営会議に構成員の互選によって選出される副議長１名を置く。
５　センター長は、会議を招集し、議長となる。
６　副議長は、議長を補佐し、議長に事故あるときは、その職務を代行する。
７　運営会議は、構成員の２分の１以上の出席がなければ、開くことができない。
８　会議の議事は、出席した構成員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
９　議長は、必要に応じ構成員以外の者を運営会議に出席させることができる。
（事務）
第７条　センターに関する事務は、情報部において処理する。
（雑則）
第８条　この規程に定めるもののほか、センターの運営に関して必要な事項は別に定める。

附　則
１　この規程は、平成 31 年４月１日から施行する。
２　この規程の施行に伴い、高知県立大学総合情報センター・高知短期大学総合情報センター運営委員会細則 (平成 27 年 11 月 26 日施行) は廃止する。
附　則
この規程は、令和２年４月１日から施行する。
附　則
この規程は、令和６年４月１日から施行する。

○令和 7 年度高知県立大学総合情報研究センター構成員

センター長　　五百蔵　高浩
講師　　根本　大志
助教　　名和　真一

■発　　行　高知県立大学 地域共生学研究機構
■発行年月　令和８年(2026年)9月
〒781-8515 高知市池2751番地1
TEL 088-847-8815　FAX 088-847-8579